

第6節 中世大友府内町跡

第67次調査C区 (K～M-27・28区)

1 調査の概要

中世大友府内町跡第67次C調査区は大分県大分市元町に所在し、標高約4.5mの沖積低地上に立地する。中世大友府内町跡は、大分県教育委員会が1993年に刊行した『大分県遺跡地図』において「中世大友城下町跡」の名称で登録されていた周知遺跡である。また、1987年に大分市史編さん委員会が作成した「戦国時代の府内復元想定図」によると、当該調査区は大友氏館跡の東西側に位置する「御内町」の一部に相当することが推定されていた。

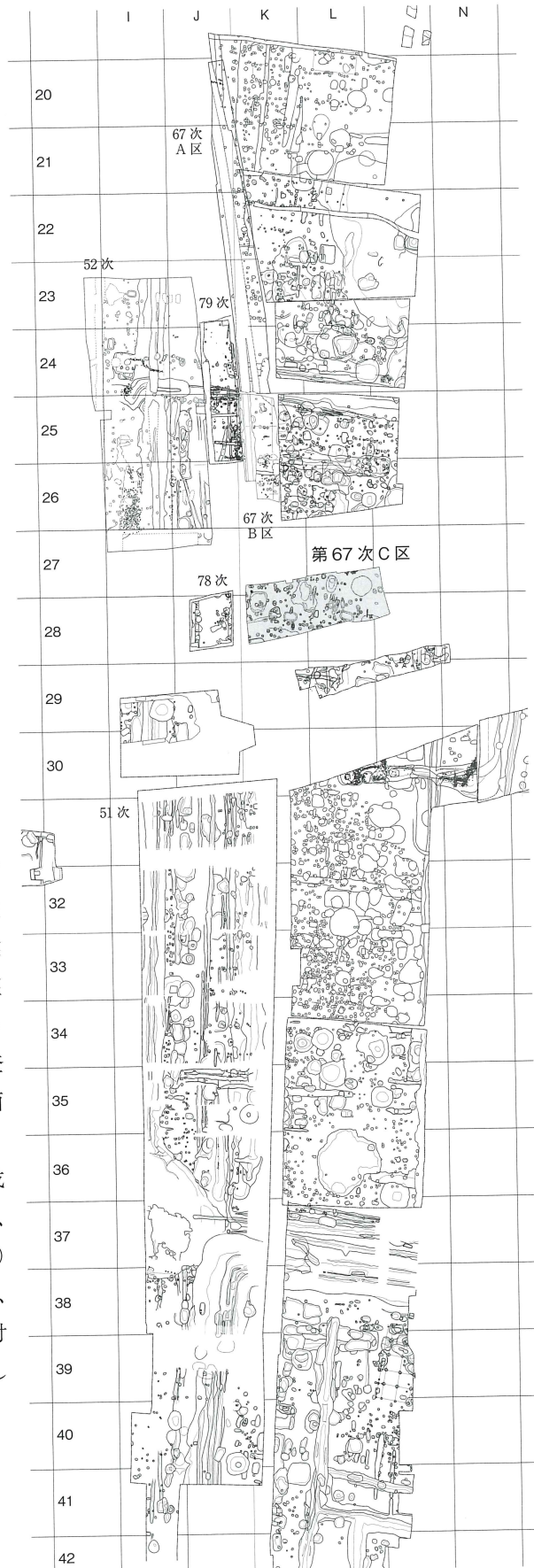
「御内町」

本節で報告する第67次C調査区(第348図)については、一般国道10号古国府拡幅事業に伴って国土交通省大分河川国道事務所からの委託を受け、2006年(平成18年)6月1日～9月1日までの約3箇間発掘調査を行った。前節で記したように、当該調査区は同年5月8日～6月1日までに発掘調査を行った第67次A調査区の調査終了後に引き続いて実施したもので、一般国道10号古国府拡幅事業に伴う発掘調査で設定した調査区画(国土座標座標(旧日本測地系)に乗せた10m方眼)のうち、K～M-27・28区に位置する。調査区は南北約8.0m、東西20.5mを測り、調査面積は約160m<sup>2</sup>である。

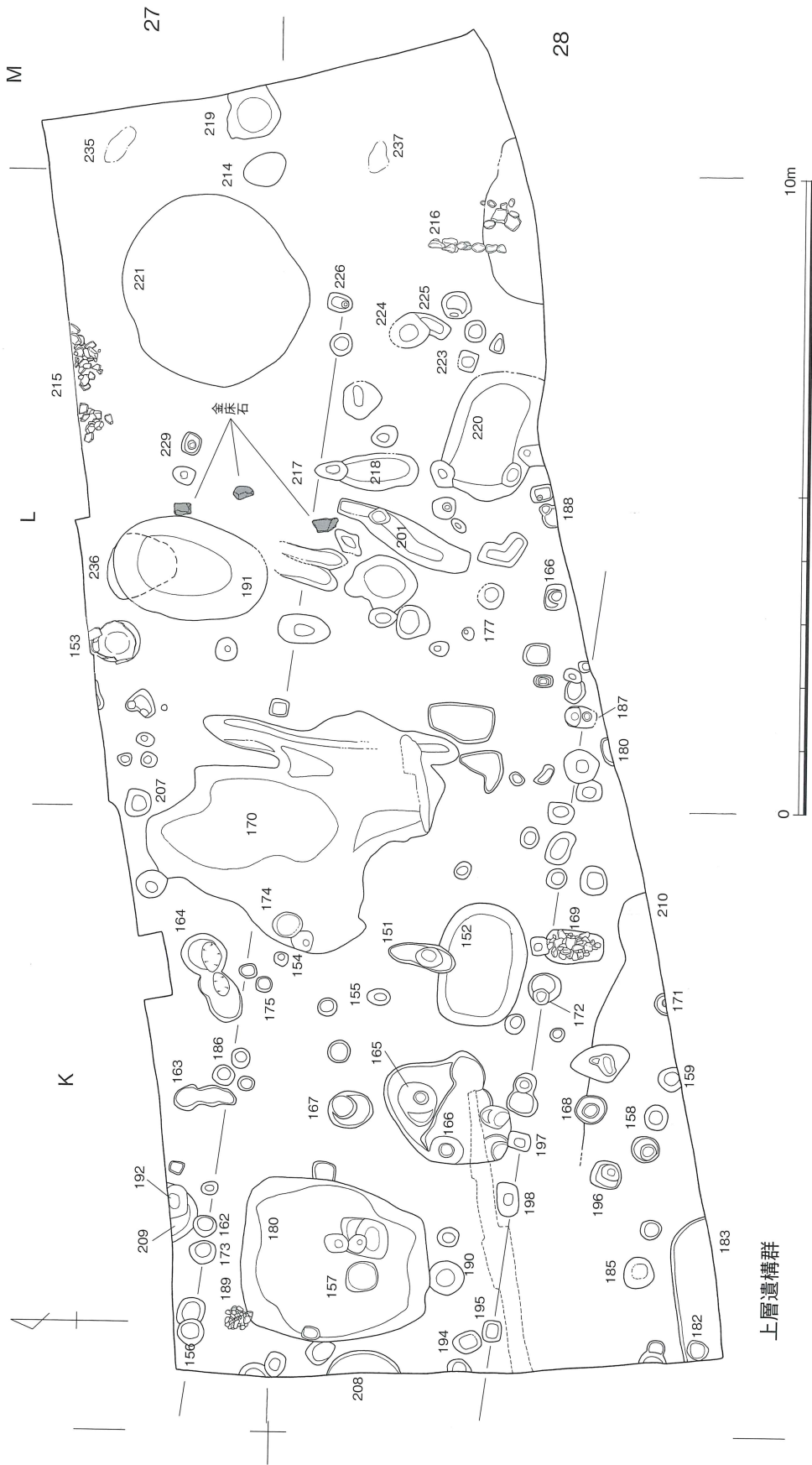
調査期間  
2006年  
(平成18年)  
6月1日～  
9月1日

調査面積  
約160m<sup>2</sup>

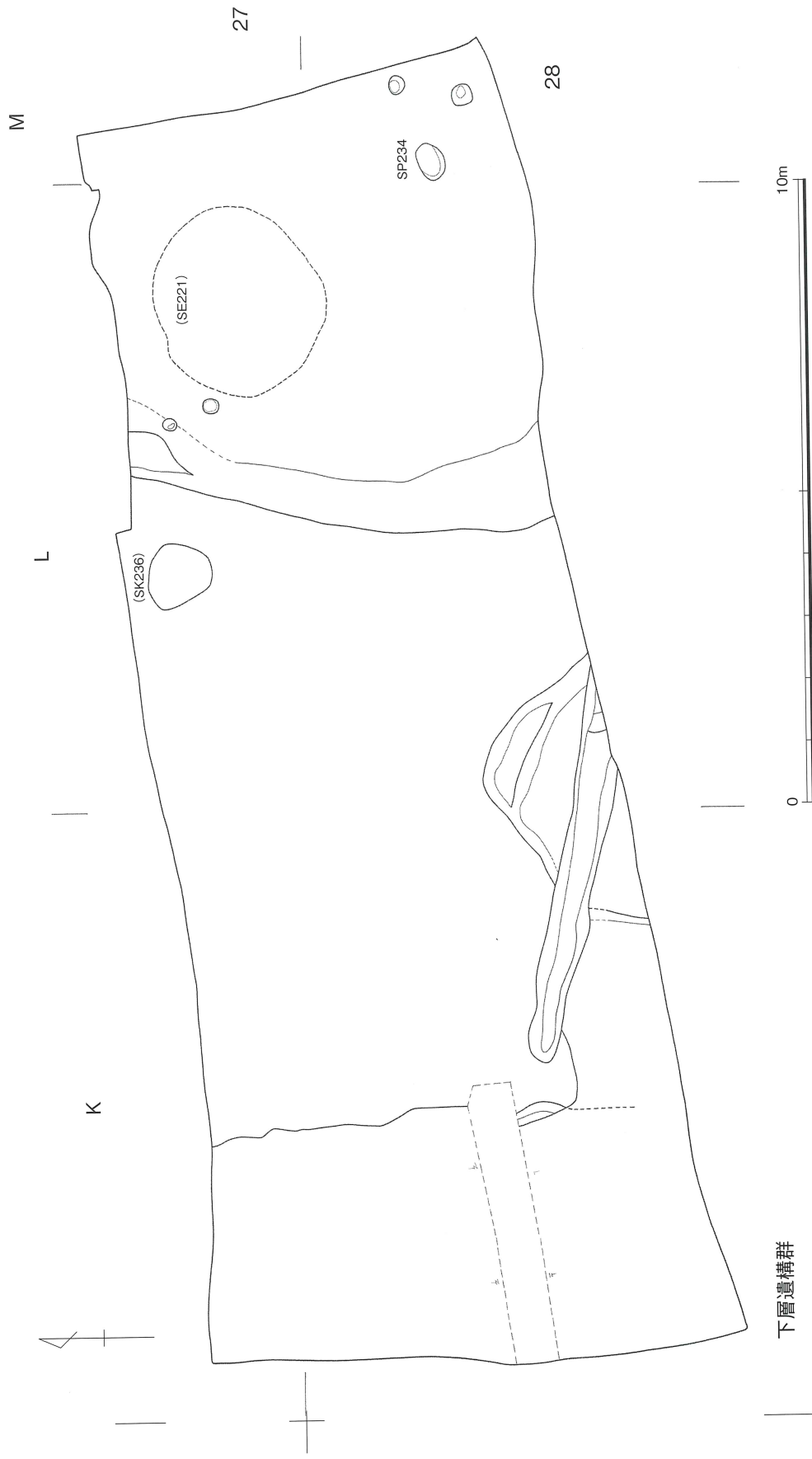
なお、本調査区の西には2007年度(平成19年度)に発掘調査を実施した第78次調査区、北には2000～2001年度(平成12～13年度)に発掘調査を実施した第9次調査I・IV区、南には2004年度(平成16年度)に大分駅付近連続立体交差事業に伴い発掘調査を実施した第40次調査区が所存する。



第348図 調査区位置図(1/1,000)



第349図 第67次調査区遺構配置図① (1/100)



第350図 第67次C調査区遺構配置図② (1/100)

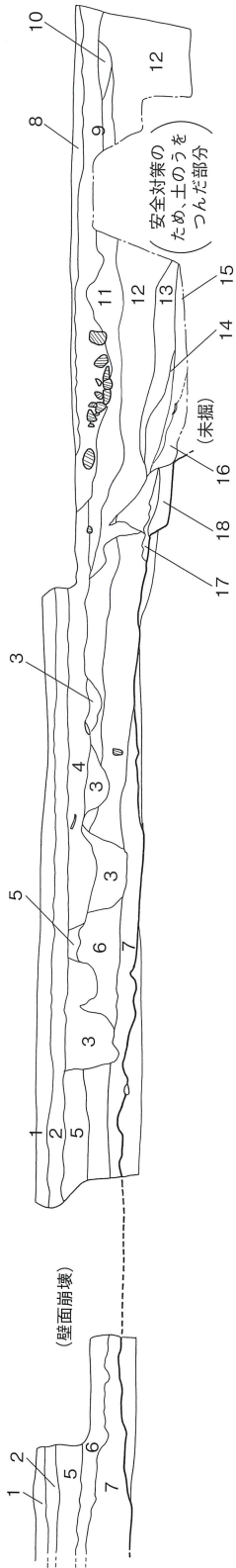
第6節 中世大友府内町跡第67次調査C区

第12表 中世大友府内町跡第67次調査C区遺構一覧表①

遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SP151	S151	不明遺構	K28区	16世紀末葉～17世紀初頭	SK152を切る	
SK152	S152	火災処理土坑	K28区	16世紀末葉	天正14年(1586)島津侵攻時	318
SX153	S153	大甕埋設遺構	L27区	16世紀末葉		331
SP154	S154	柱穴	K28区	16世紀末葉		
SP155	S155	柱穴	K28区	16世紀末葉		
SP156	S156	柱穴	K27区	16世紀末葉		
SP157	S157	柱穴	K28区	16世紀末葉		
SP158	S158	柱穴	K28区	16世紀末葉		
SP159	S159	柱穴	K28区	16世紀末葉		
—	S160	—	—	—		
—	S161	—	—	—		
SP162	S162	柱穴	K27区	16世紀末葉		
SP163	S163	柱穴	K27区	16世紀末葉		
SP164	S164	柱穴	K27区	16世紀末葉		
SP165	S165	柱穴	K28区	16世紀末葉		
SP166	S166	柱穴	K28区	16世紀末葉		
SP167	S167	柱穴	K28区	16世紀末葉		
SP168	S168	柱穴	K28区	16世紀末葉		
SX169	S169	集石遺構	K28区	16世紀末葉	備前焼水屋甕が出土	333
SK170	S170	土坑	KL-27・28区	16世紀末葉		322
SP173	S171	柱穴	K28区	16世紀末葉		
SP173	S172	柱穴	K28区	16世紀末葉		
SP173	S173	柱穴	K27区	16世紀末葉		
SP174	S174	柱穴	K28区	16世紀末葉		
SP175	S175	柱穴	K27区	16世紀末葉		
SP176	S176	柱穴	K28区	16世紀末葉		
SX177	S177	土器片集中部	L28区	16世紀前葉～中葉		339
—	S178	—	—	—		
—	S179	—	—	—		
SK180	S180	土坑	K28区	16世紀前葉～中葉		322
—	S181	—	—	—		
—	S182	—	—	—		
SK183	S183	土坑	K28区	16世紀前葉～中葉	京都系土師器の大量廃棄	322
—	S184	—	—	—		
SP185	S185	柱穴	K28区	16世紀末葉		
SP186	S186	柱穴	K28区	16世紀末葉		
SP187	S187	柱穴	L28区	16世紀末葉		
SX188	S188	炉跡関連遺構	L28区	16世紀前葉～中葉	小鍛冶の炉跡	338
SX189	S189	集石遺構	K27区	16世紀末葉		336
SP190	S190	柱穴	L28区	16世紀末葉		
SK191	S191	土坑	L27区	16世紀末葉		322
SP192	S192	柱穴	L28区	16世紀末葉		
—	S193	—	—	—		
SP194	S194	柱穴	L28区	16世紀末葉		
SP195	S195	柱穴	K28区	16世紀末葉		
SP196	S196	柱穴	K28区	16世紀末葉		
SP197	S197	柱穴	K28区	16世紀末葉		
SP198	S198	柱穴	K28区	16世紀末葉		
SP199	S199	柱穴	K28区	16世紀末葉		
—	S200	—	—	—		

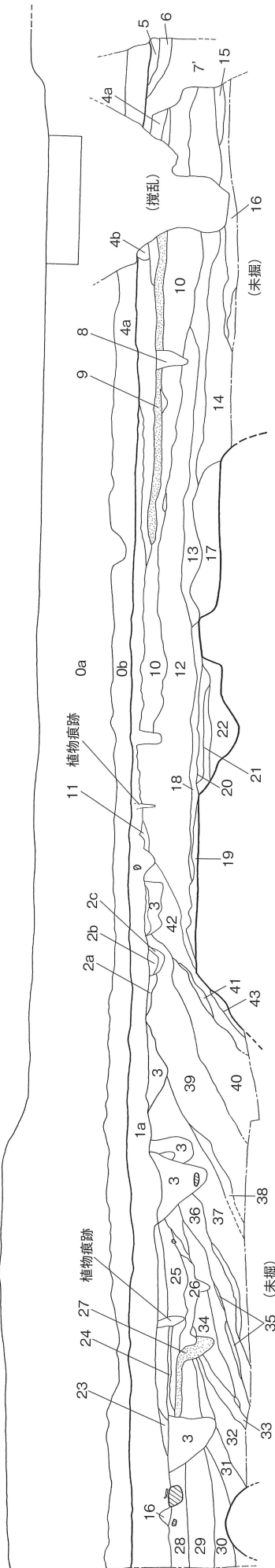
第13表 中世大友府内町跡第67次調査C区遺構一覧表②

遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SK201	S201	土坑	L28区	16世紀前葉～中葉		
—	S202	—	—	—	欠番（第67次A調査区で遺構番号を使用）	—
SP203	S203	柱穴	L28区	16世紀末葉		
SP204	S204	柱穴	L28区	16世紀末葉		
SK205	S205	土坑	L28区	16世紀末葉		
—	S206	—	—	—		
SP207	S207	柱穴	L28区	16世紀末葉		
SK208	S208	土坑	K28区	16世紀前葉～中葉	京都系土師器の廃棄土坑	326
SK209	S209	土坑	K28区	16世紀前葉～中葉	京都系土師器の廃棄土坑	326
SX210	S210	整地層	K28区	16世紀前葉～中葉		
—	S211	—	—	—		
—	S212	—	—	—		
SX213	S213	土器集中部	M28区	16世紀後葉	京都系土師器の埋納遺構	339
SX214	S214	集石遺構	L27区	16世紀後葉		336
SX215	S215	集石遺構	L27区	16世紀後葉		337
SX216	S216	石列	L28区	16世紀後葉		337
SP217	S217	柱穴	L28区	16世紀末葉		
SK218	S218	土坑	K28区	16世紀前葉～中葉		327
SK219	S219	土坑	K27区	16世紀後葉		327
SK220	S220	土坑	L28区	16世紀前葉～中葉		328
SE221	S221	井戸	L27区	16世紀末葉		329
SP222	S222	柱穴	L28区	16世紀末葉		
SP223	S223	柱穴	L28区	16世紀末葉		
SP224	S224	柱穴	L28区	16世紀末葉		
SP225	S225	柱穴	L28区	16世紀末葉		
SP226	S226	柱穴	L28区	16世紀末葉		
SP227	S227	柱穴	L28区	16世紀末葉		
SP228	S228	柱穴	L28区	16世紀末葉		
SP229	S229	柱穴	L28区	16世紀末葉		
SP230	S230	柱穴	L28区	16世紀末葉		
SP231	S231	柱穴	L28区	16世紀末葉		
SP232	S232	柱穴	L28区	16世紀末葉		
—	S233	—	—	—		
SP230	S234	柱穴	L28区	16世紀末葉		
SX235	S235	土器集中部	M27区	16世紀前葉～中葉		340
SK236	S236	土坑	L27区	16世紀末葉		329
SX237	S237	土器集中部	M28区	16世紀前葉～中葉		341



調査区北壁

- 1 近世の水田層 2 灰褐色粘質土 3 柱穴等の遺構埋土 4 灰褐色粘質土
- 5 灰褐色粘質土 6 にぶい褐色粘質土 7 にぶい褐色粘質土 8 灰褐色粘質土
- 9 褐色粘質土 10 暗褐色粘質土 11 暗褐色粘質土 12 褐色粘質土
- 13 灰褐色粘質土 14 褐色粘質土 15 灰褐色粘質土 16 灰褐色粘質土
- 17 褐色粘質土 18 褐色粘質土

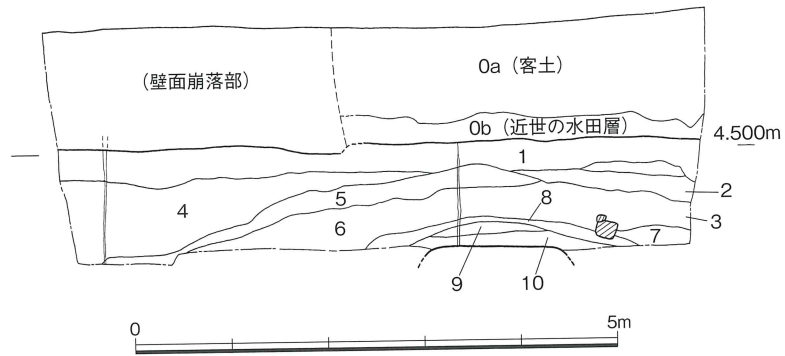


調査区南壁

- 0a 近年の速成土 0b 旧表土 1a 褐灰色粘質土 1b 褐灰色粘質土ブロック
- 2a にぶい褐色粘質土(炭化物・砂を含む) 2b にぶい褐色粘質土(炭化物・砂を多量に含む)
- 2c にぶい赤褐色粘質土(焼土) (2層は小銀治の炉跡 SX1788) 3 柱穴などの遺構埋土
- 4 暗褐色粘質土(焼土粒を含む)
- 5 褐色粘質土 6 暗褐色粘質土 7 黒褐色粘質土 (5~7は土坑 SK183の埋土)
- 8 褐灰色粘質土(柱穴埋土) 9 褐灰色粘質土(堅く締まる、礫地層 SX210の形成土)
- 10 にぶい褐色粘質土 11 にぶい褐色粘質土 12 暗赤褐色粘質土 13 暗赤褐色粘質土
- 14 にぶい赤褐色粘質土 15 にぶい赤褐色粘質土 16 褐色粘質土 17 灰褐色粘質土
- 18 褐色粘質土 19 にぶい黄褐色粘質土 20 にぶい褐色粘質土 21 にぶい褐色粘質土
- 22 にぶい褐色粘質土 23 褐灰色粘質土 24 褐灰色粘質土 25 にぶい黄褐色粘質土
- 26 灰黄褐色粘質土 27 灰黄褐色粘質土 28 褐灰色粘質土(中位~下位に炭化物を含む)
- 29 褐灰色粘質土 30 褐色粘質土 31 灰黄褐色粘質土 32 褐灰色粘質土
- 33 灰褐色粘質土 34 にぶい赤褐色粘質土 35 にぶい黄褐色粘質土(炭化物を含む)
- 36 灰褐色粘質土 37 にぶい赤褐色粘質土 38 灰褐色粘質土 39 にぶい褐色粘質土
- 40 褐色粘質土 41 にぶい黄褐色粘質土 42 にぶい黄褐色粘質土 43 灰黄褐色粘質土

第351図 調査区土層実測図 (1/80)

- 0a 近年の造成土(客土)
- 0b 近世以降の水田層
- 1 褐灰色粘質土
- 2 灰褐色粘質土
- 3 褐灰色粘質土(中に炭化物を多量に含む)
- 4 褐色粘質土(均質で、一見地山と誤認しそうな層  
下層と完全に整合する)
- 5 灰褐色粘質土
- 6 褐灰色粘質土
- 7 褐灰色粘質土
- 8 黒褐色粘質土(炭化物を多量に含む真っ黒な層)
- 9 にぶい黄褐色粘質土
- 10 暗褐色粘質土



第352図 調査区東壁土層実測図(1/80)

## 2 遺構と遺物

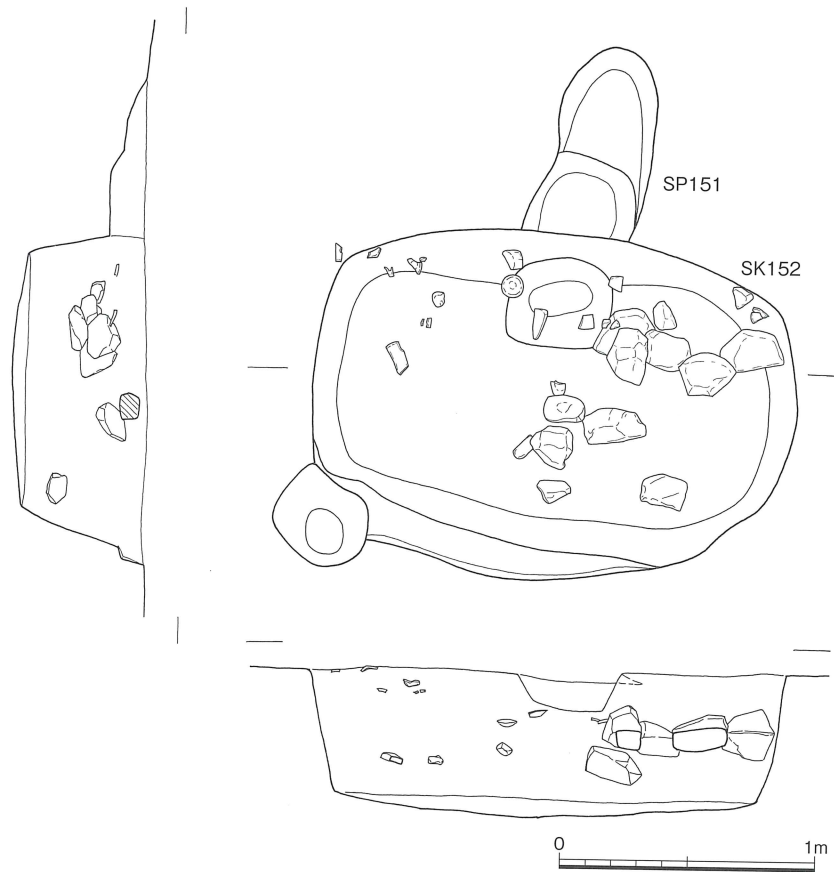
### (1) 調査の概要と基本層序

中世大友府内町跡第67次調査C区では、表土下に近年の造成で置かれた客土が1.0～1.5mほど堆積しており、これらを重機によって除去すると、16世紀末葉から17世紀末初頭前後の遺物を包含する整地層が現われる。発掘調査ではこの整地層を人力によって5cm程度掘り下げた時点で最初の遺構検出を行った。当該遺構面からは16世紀前葉から末葉にかけての柱穴・土坑・大甕埋設遺構・井戸・集石遺構・石列・小鍛冶の炉跡などの遺構が集中していた。これらの遺構を「上層遺構群」(第349図)と呼称する。上層遺構群の遺構は、16世紀末葉頃に比定される柱穴・土坑・大甕埋設遺構・井戸・集石遺構・石列や16世紀前葉から中葉に比定される土坑や小鍛冶の炉跡に大別される。16世紀末葉頃の遺構群は「府内古図」に描かれた段階の「御内町」の町屋遺構に関連するものと推定され、16世紀前葉から中葉に比定される土坑や小鍛冶の炉跡は当該調査地点が武家地(武家屋敷)として空間利用されていた段階の遺構群と推定される。

上層遺構群

16世紀代に形成されたと推定される整地層をすべて除去した後の地山面で検出されたものが、「下層遺構群」(第350図)である。下層遺構群には調査区の東側と西側にそれぞれ落ち込みが認められ、東側の落ち込みは大規模な掘り込み遺構、西側の落ち込みは溝や堀であった可能性が考えられる。これらの遺構の周辺は、調査区の地盤が軟弱であることや調査時期が雨期に相当したことなどから、これ以上の掘り下げを行うと、調査区の壁面等が崩落する危険性が想定された。第67次調査C区の調査区に隣接する地点は交通量の多い国道や里道として使用されており、仮に調査区壁面が大きく崩壊すると、国道や里道の使用に重大な支障が生じる可能性が考えられた。そのため発掘調査では遺構の完掘を行わず、最小限の土層確認や遺物の採集に留めている。

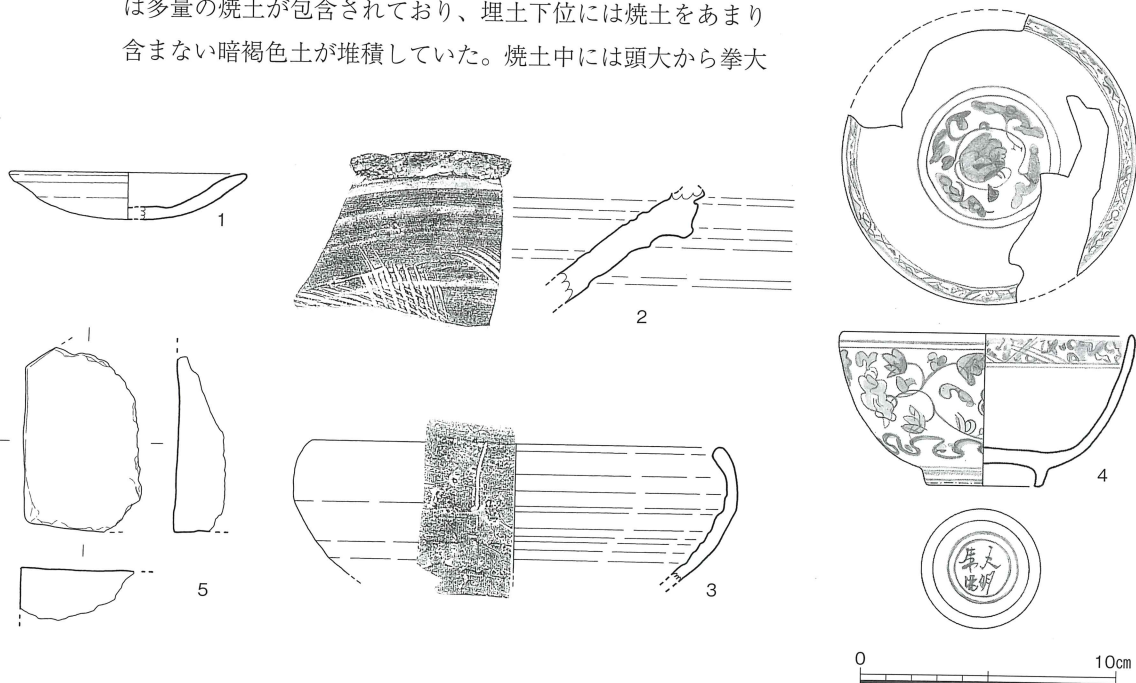
下層遺構群



第353図 SK152実測図(1/30)

(2) 土坑

SK152(第353図) K28区に位置する土坑で、その平面形態は略楕円形を呈する。その規模は長径1.96m、短径1.4m、深さ0.6mを測る。北側に位置する柱穴SP151と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSK152(古)→SP151(新)となる。埋土上位には多量の焼土が包含されており、埋土下位には焼土をあまり含まない暗褐色土が堆積していた。焼土中には頭大から拳大



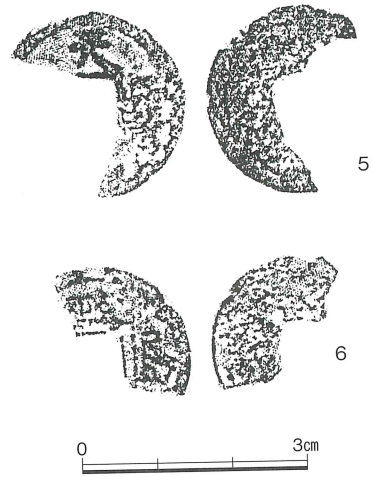
第354図 SK152出土遺物実測図①(1/3)



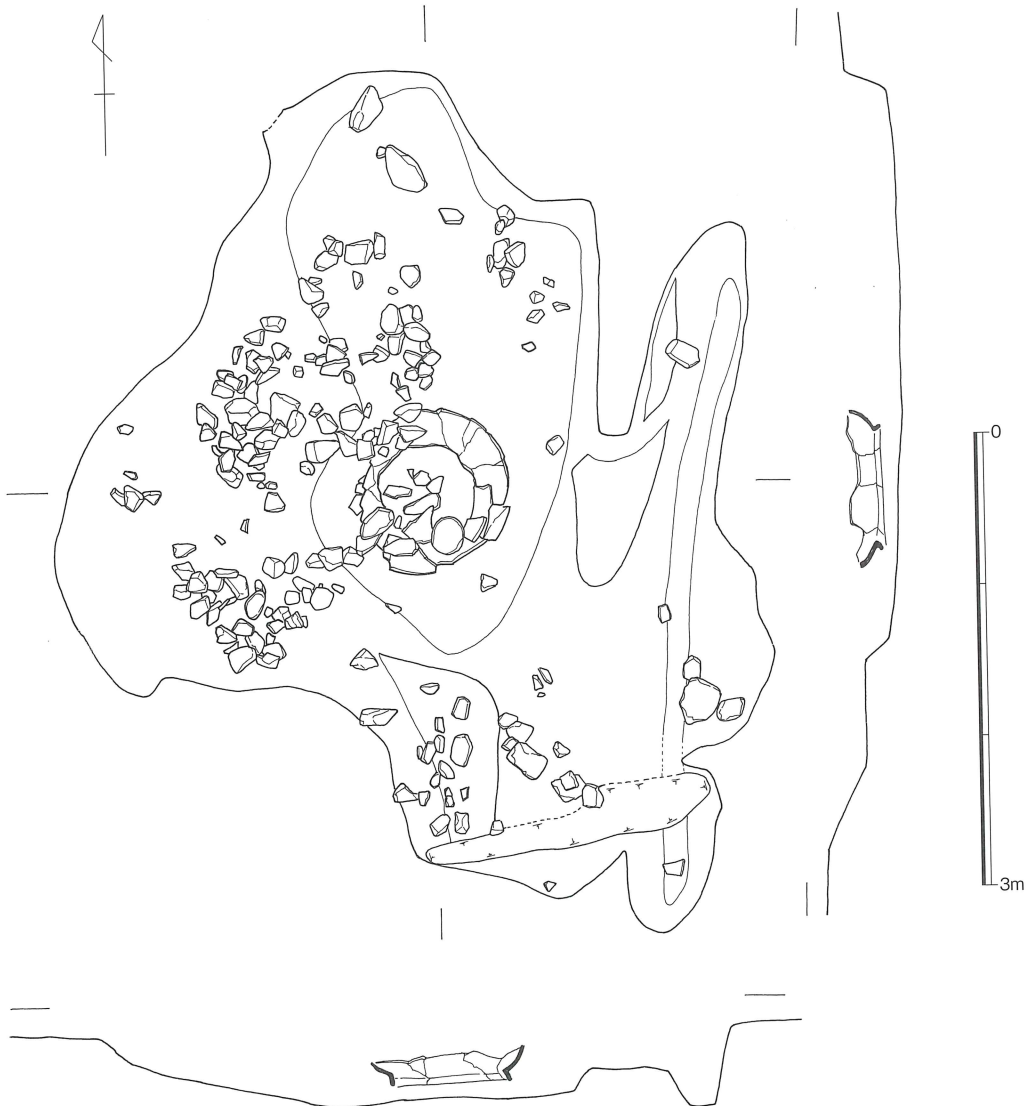
天正14年  
(1586)の  
火災処理  
土坑

の礫が含まれており、遺物も大半が焼土中から出土した。出土遺物の年代観と遺構の状況から、当該遺構は天正14年(1586)の島津侵攻時の火災処理土坑と推定される。16世紀末葉に比定される遺構である。

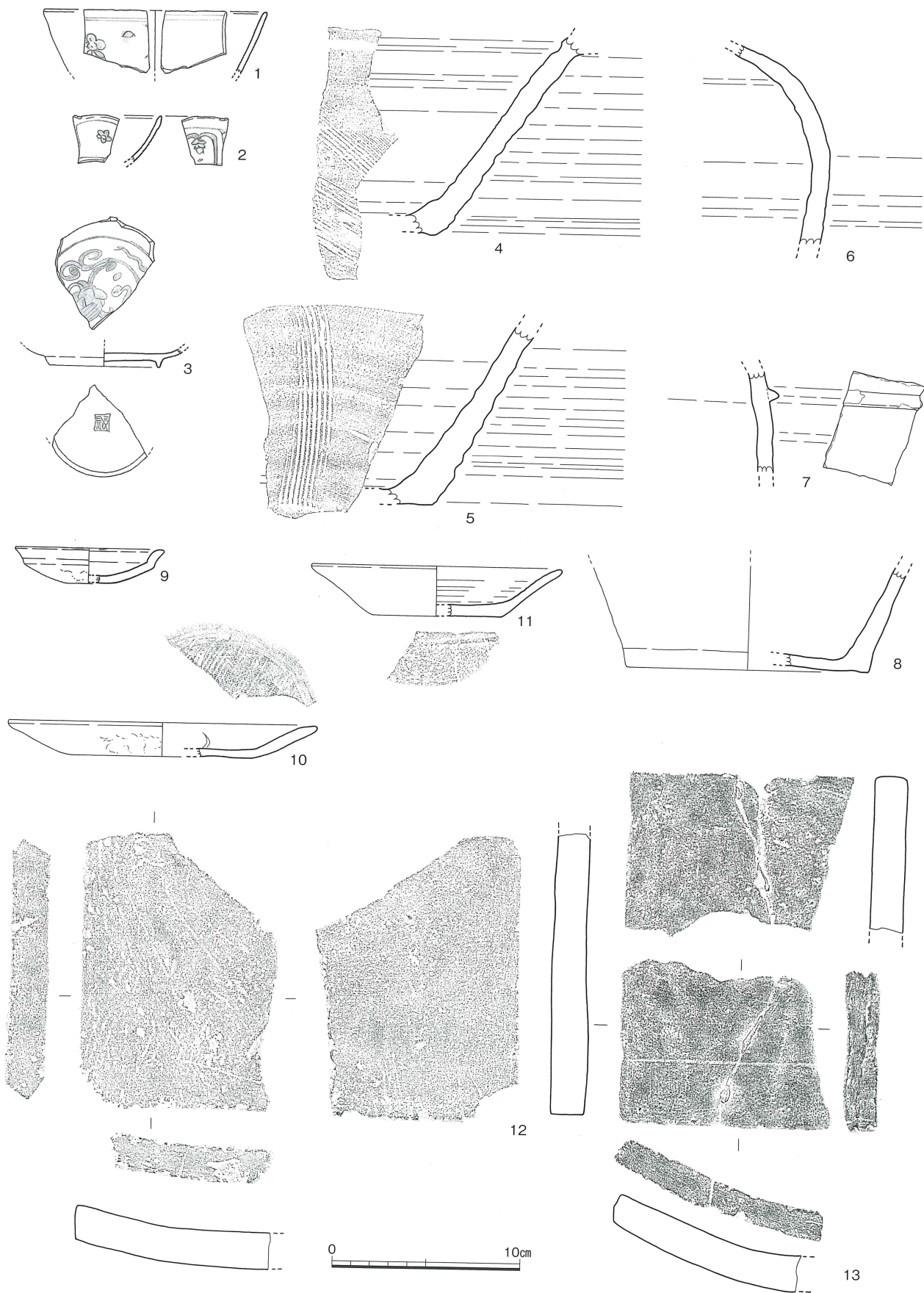
SK152出土遺物(第354・355図) 第354図1は京都系土師器皿で、器壁の厚みが5mm程度であることから、塩地編年2期の製品である。2は備前焼播鉢で、内面には放射状播目と斜め播目が交差する。3は備前焼鉢で、口縁部外面にヘラ記号を有する。4は中国景德鎮窯系青花碗で、小野分類E群に分類される製品である。内底部には「大明年製」の銘款が描かれる。第355図5・6は銅銭で、5は初鑄造年1023年の北宋銭「天聖□□」、6は初鑄造年1111年の北宋銭「政和通寶」で、「政」と「通」字が残存する。



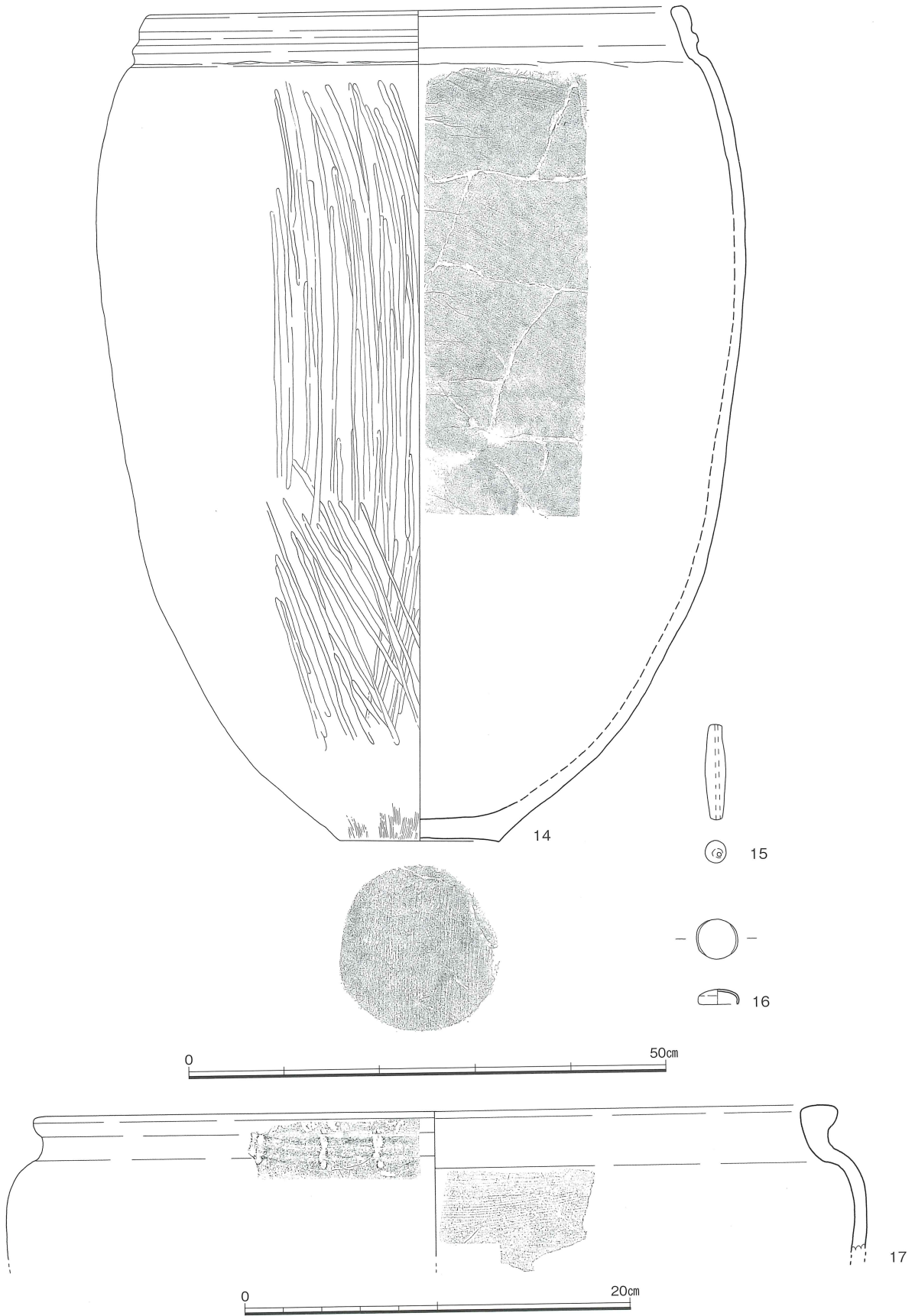
第355図 SK152出土遺物実測図②(1/1)



第356図 SK170実測図(1/50)



第357図 SK170 出土遺物実測図① (1/3)



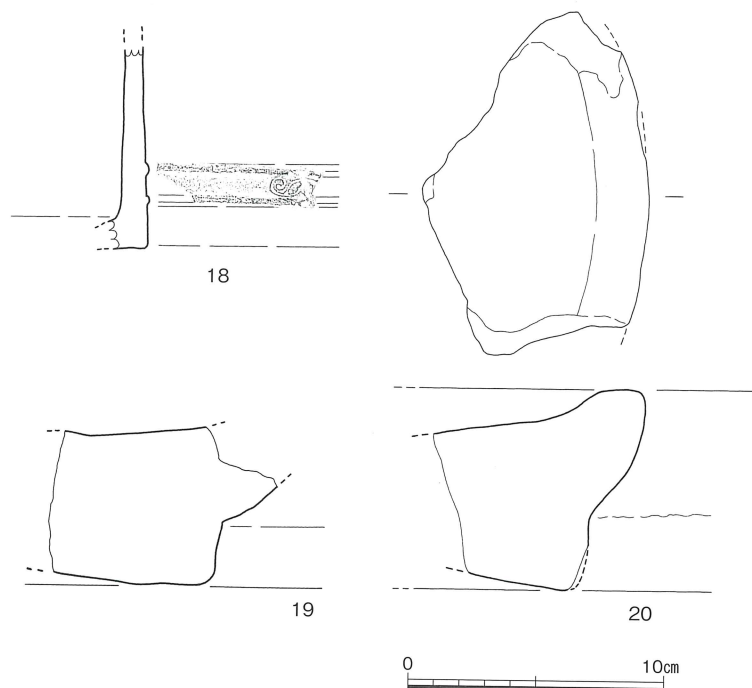
第358図 SK170 出土遺物実測図② (1/6・1/3)

SK170（第356図） 調査区のほぼ中央に位置する大型の土坑である。検出時には遺構の輪郭が不明瞭であったが、掘り下げを進めたところ、複数の土坑と南北方向の溝が切り合っていることが確認された。平面形態は不整形で、その規模は南北3.1m、東西2.8m、深さ0.3mを測る。埋土には多量の礫が廃棄されており、遺構中央部の床面付近には瓦質土器の大甕が口縁部を下にした状態で出土した（写真図版\*\*参照）。大甕は据えられた状態ではなく、廃棄された状態と思われる。遺構の性格は廃棄土坑で、遺構の年代は出土遺物の年代観から、16世紀末葉に比定される。

SK170出土遺物（第357～359図） 第357図1は中国景德鎮窯系青花碗で、小野分類E群碗である。2は中国景德鎮系青花皿で、口縁部が輪花になる。外面には蓮弁文が描かれている。3も中国景德鎮系青花皿で、小野分類E群皿である。内底部には変形「福」字の銘款が認められる。4・5は備前焼播鉢で、4は内面に斜め播目が施される近世1期、5は内面に放射状播目のみが施される中世6期の製品であろう。6・7は備前焼水屋甕で、7の外面には1条の断面三角突帯が認められる。8は備前焼の壺の底部である。9・10は京都系土師器皿で、10の底部内面には布などを用いたナデの痕跡が認められる。11は内面にロクロ目が顕著に残るロクロ目土師器である。12・13は平瓦の破片である。第358図14は瓦質土器の大甕である。類例の少ない製品であるが、図面上で完形に復元された。（写真図版20参照）内傾する

瓦質土器  
大甕

口縁部をもち、口縁部外面には2条の凹線が施される。胴部外面には縦ないし斜め方向の荒いミガキが施され、底部近くの胴部外面付近と胴部内面、および底部外面には刷毛目状の調整が認められる。器形については備前焼大甕との類似性が高いとも思われるが、口縁部が内傾するなど相違点も多く、類例が少ないため断定できない。15は土錘で、完存品である。16は平面形態が円形を呈する青銅製品であるが、用途不明である。17は在地系の瓦質土器火鉢で、屈曲して肥厚する口縁部の外面には刺突による文様を有する。胴部内面には刷毛目状工具による調整痕が認められる。第359図18は長胴形の器形を呈する在地系の瓦質土器火鉢である。底部付近の胴部外面に2条の小さな突帯を有し、突帯間に双頭蕨手文を押捺する。内外面は、ナデによって仕上げられている。19・20は安山岩を素材とする茶臼の下臼である。



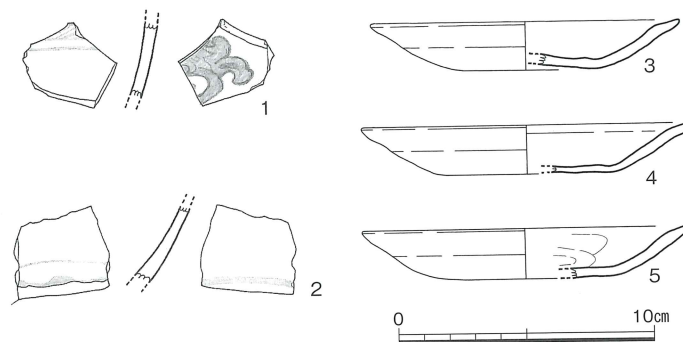
第359図 SK170出土遺物実測図③（1/3）

SK180 L28区に位置する小型の土坑で、南側は調査区外に伸びる。その平面形態は略楕円形で、現状での規模は長径0.4m、短径0.2m、深さ30cmである。遺構の内部からは、中国産青花の破片や京都系土師器皿が出土した。遺構の性格は不明であるが、廃棄土坑であろうか。出土遺物の年代観か

ら、遺構の年代は16世紀前葉から中葉に比定される。

SK180出土遺物(第360図)

1・2は中国景德鎮窯系青花碗で、小破片のため断定できないが、小野分類C群碗の可能性が高い製品である。3～5は京都系土師器皿で、器壁の厚みが5mm以下であることから、塩地編年1期に比定される資料である。



第360図 SK180 出土遺物実測図 (1/3)

SK183 (第361図) 調査区南西隅 (K28区) に位置する土坑である。遺構の西側と南側は調査区外に伸び、現状での規模は、長径2.25m、短径0.7m、深さ85cmである。未調査の部分を勘案すると、かなりの大規模な土坑であると推定される。遺構の埋土は2層に大別され、上層には黒褐色土が堆積する。当該土層を含め、上層の堆積土は土坑が埋没する過程で生じた窪地を平坦にするため、意図的に搬入された土層群である可能性が考えられる。また、下層からは完形品を含む土師質土器皿が大量に出土した。土師質土器皿はそのほとんどが京都系土師器で、在地系土器であるロクロ目土師器を含まない。京都系土師器皿には、ススが付着しないことから「食器」等として使用されたと推定されるものと明らかにススが付着し、「灯明皿」として使用されたことが明らかなものが混在している。京都系土師器皿は器壁が薄い古式(塩地編年1期)のものであり、その所産年代は16世紀前葉から中葉に比定されるものである。京都系土師器が大量に廃棄された遺構が検出されるということは、当該時期において、この遺構が存在する地点付近が「武家地」として空間利用されていた可能性が考えられ、当該地点の土地利用の性格を示唆する上で重要な遺構と考える。

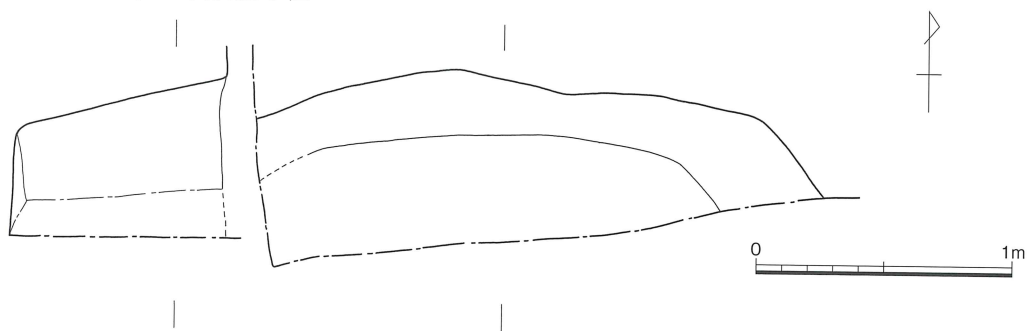
京都系  
土師器皿の  
大量廃棄

SK183出土遺物(第362図) 1～28は京都系土師器皿で、色調は淡黄褐色を呈する。底部内面に布などをを用いたナデ調整痕が顕著に認められる個体(10・19・21・26)が存在する。器壁の厚みが5mm以下と薄いため、塩路編年1期(16世紀前葉～中葉)に比定される製品である。29は色調や見かけ上の器形は、1～28の京都系土師器皿と大差ないものであるが、底部外面に回転糸切り痕が認められるものである。京都系土師器皿の「模倣品」と考えられる資料である。

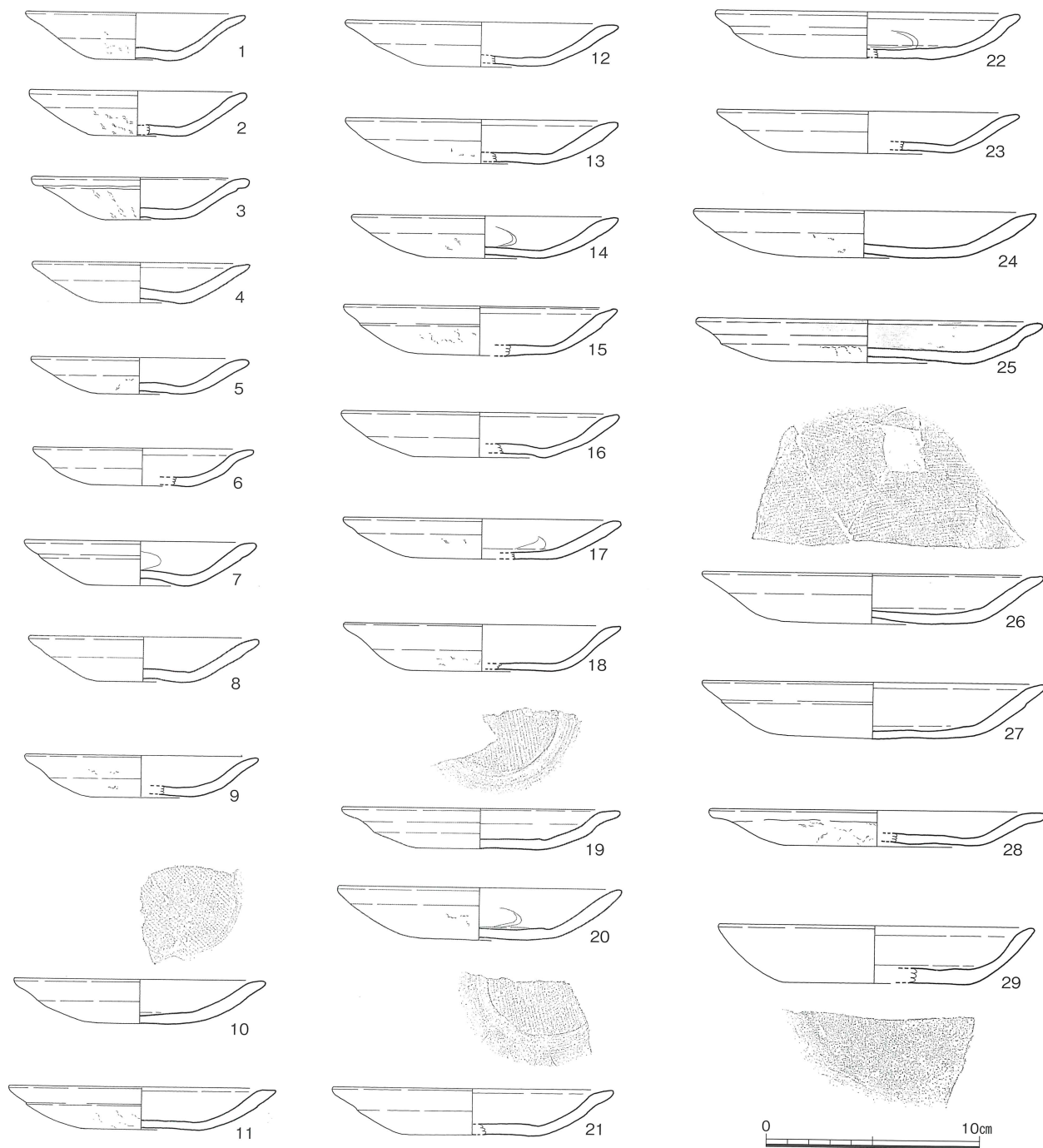
京都系  
土師器皿  
の模倣品

SK191(第363図) L27区に位置する土坑である。土坑の平面形態は略楕円形で、その規模は、長径2.3m、短径1.5m、深さ0.4mである。土坑SK236と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSK236(古)→SK191(新)である。土坑内部北寄りに頭大から拳大の礫が集中していた。廃棄土坑と推定される遺構である。埋土中から京都系土師器や備前焼播鉢などが出土した。出土遺物の年代観から、遺構の所産年代は16世紀末葉に比定される。

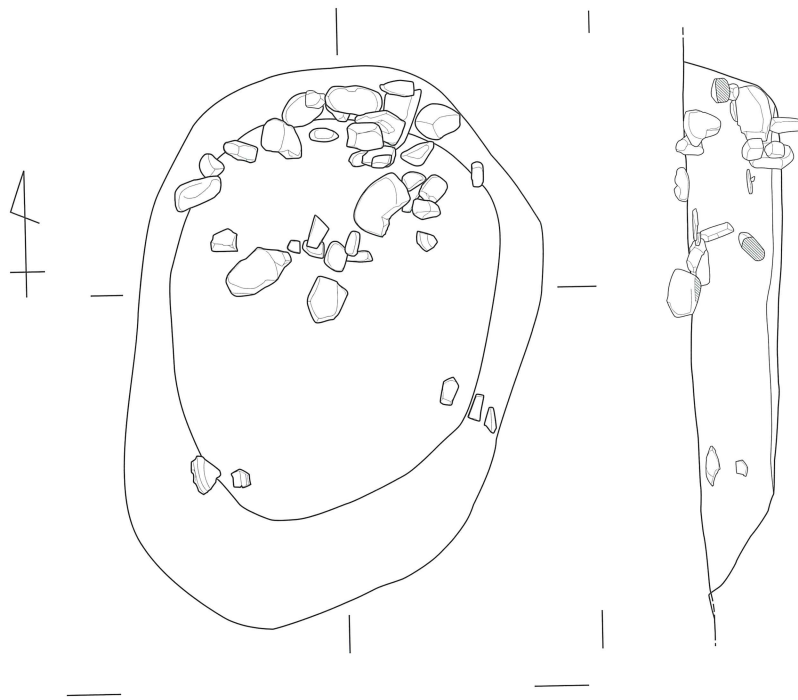
SK191出土遺物(第364図) 1～4は京都系土師器皿で、器壁の厚みは5mm以上で、塩地編年2期から3期に比定される。16世紀後葉から末葉の製品である。5は備前焼鉢で、「く」の字状の口縁部を有し、胴部内面に顕著なロクロ目が認められる。6は備前焼大甕の底部破片と思われ、底部外面は未調整である。7・8は備前焼播鉢で、7は口縁部付近の胴部、8は底部の破片である。いずれも内面に放射状播目や斜め播目が認められ、乗岡編年近世1期の製品である。



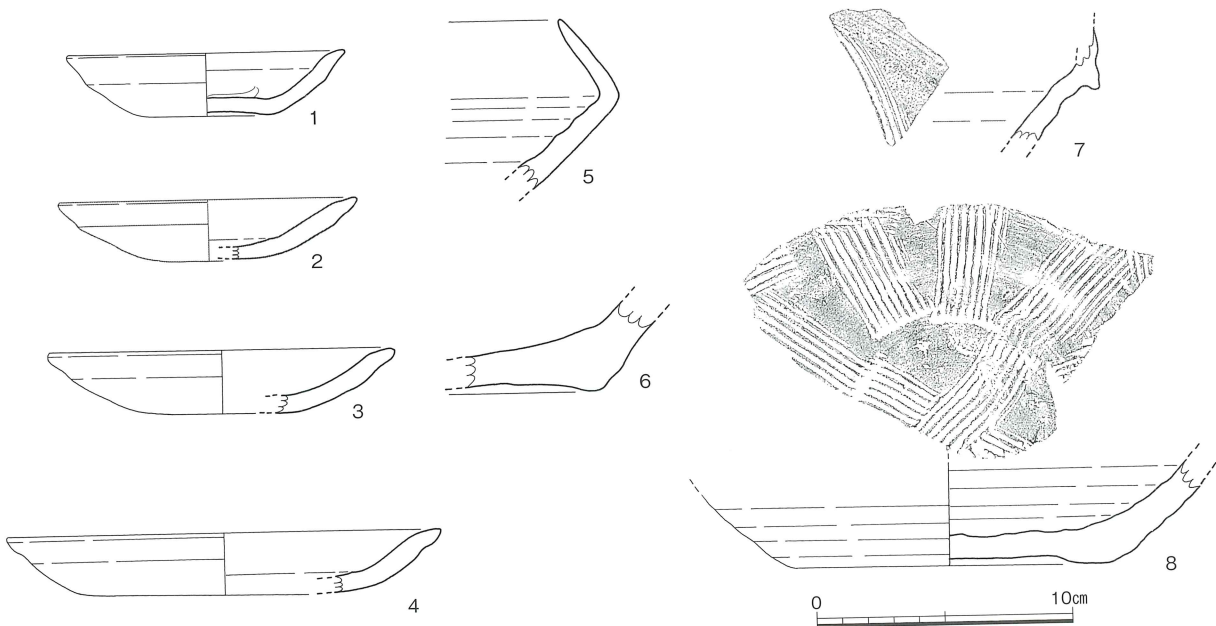
第361図 SK183実測図(1/30)



第362図 SK183出土遺物実測図(1/3)



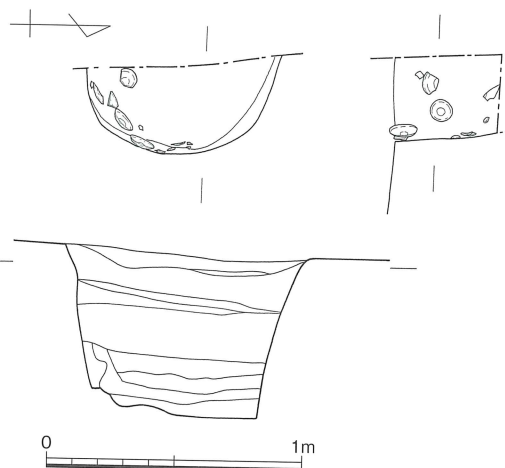
第363図 SK191 実測図 (1/30)



第364図 SK191 出土遺物実測図 (1/3)

京都系  
土師器の  
特異な  
出土状況

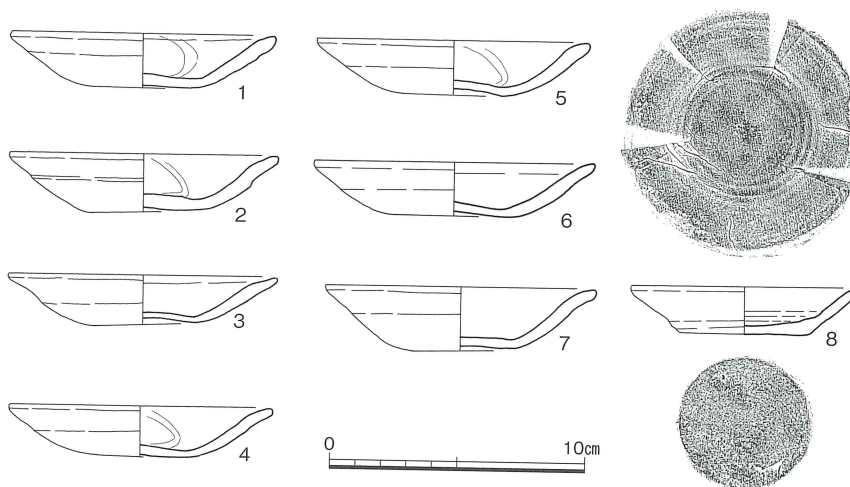
SK208 (第365図) 調査区東側 (K28区) に位置する土坑である。遺構の平面形態は略円形と思われ、遺構西側は調査区外に伸びる。現状での規模は長径0.8m、短径0.35m、深さ0.65mである。掘り下げ中、埋土中位以下から京都系土師器皿が多量に出土し、その大半が遺構の壁面に貼り付くような特異な状況で出土した。同様な遺構は第78次調査SK003でも確認されている。埋土上位には焼土が堆積しており、硬く焼きしまって床状をなしている部位も認められた。出土した京都系土師器の年代観から、遺構の所産時期は16世紀前葉から中葉に比定される。



第365図 SK208 実測図 (1/30)

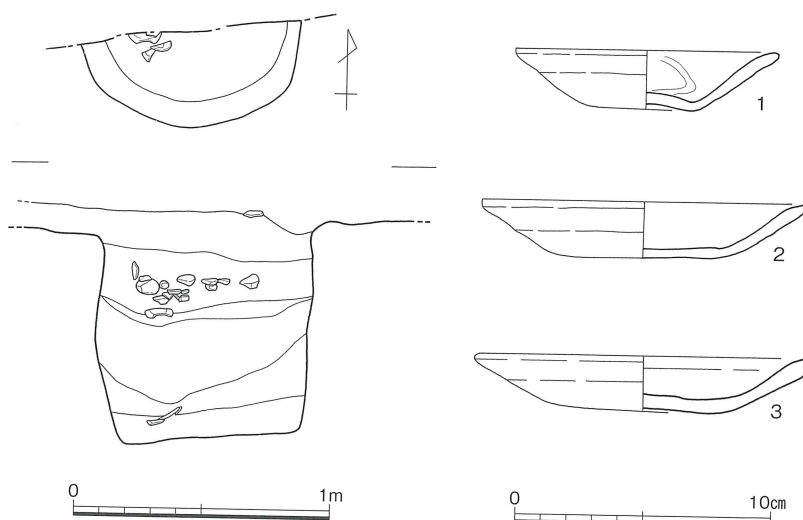
SK208出土遺物 (第366図)

1～7は京都系土師器皿で、器壁の厚みが5mm以下であることから、塩地編年1期の製品である。8は在地系のロクロ目土師器皿で、内面に整形時に生じる細かい段があり、底部外面に回転糸切り痕が認められる。



第366図 SK208 出土遺物実測図 (1/3)

SK209 (第367図) 調査区東側 (K28区) に位置する土坑である。遺構の平面形態は略円形と思われ、遺構北側は調査区外に伸びている。現状での規模は長径1.0m、短径0.4m、深さ0.85mである。埋土は6層



第367図 SK209 実測図 (1/30)

第368図 SK209 出土遺物実測図 (1/3)



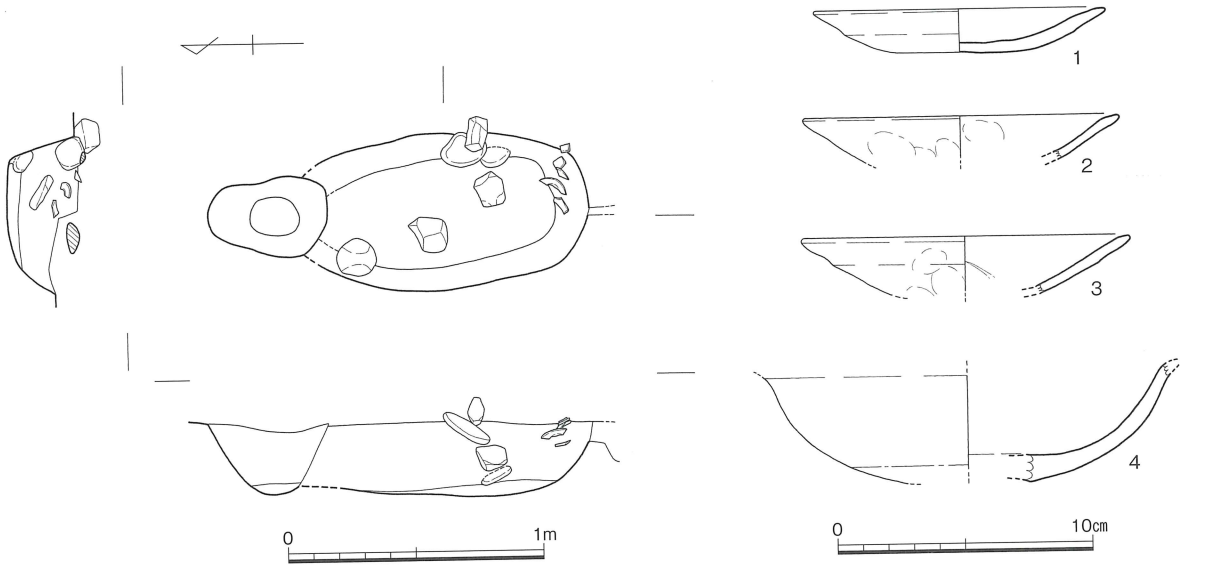
京都系  
土師器が  
出土する  
特異な土坑

に分層されるが、埋土上位からは拳大の礫、埋土下位からは京都系土師器皿などが出土した。前項で触れたSK208や第78次調査区SK003と同様、京都系土師器が出土する特異な土坑であろう。遺構の所産時期は、16世紀前葉から中葉に比定される。

SK209出土遺物（第368図） 1～3は京都系土師器皿で、器壁の厚みが5mm以下であることから、塩路編年1期の製品である。16世紀前葉から中葉の所産である。

SK218(第369図) K28区に位置する土坑である。遺構の平面形態は略楕円形で、その規模は長径1.2m、短径0.6m、深さ0.3mである。柱穴SP217と切り合い関係を有し、遺構の構築順序は、SK218（古）→SP217（新）である。埋土中から拳大の礫や京都系土師器皿などが出土した。遺構の性格は、小型の廃棄土坑と推定される。出土遺物の年代観から、遺構の所産時期は16世紀前葉から中葉に比定される。

SK218出土遺物（第370図） 1～3は京都系土師器皿で、塩地編年1期の製品である。16世紀前葉から中葉の所産である。4は中国産の白磁碗の胴部破片である。



第369図 SK218 実測図 (1/30)

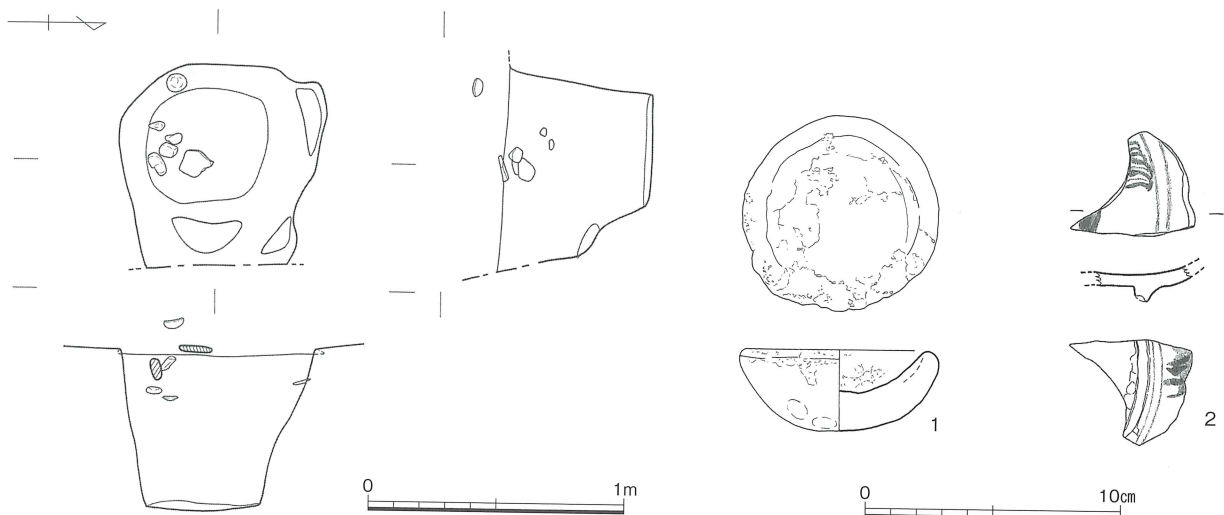
第370図 SK218 出土遺物実測図 (1/3)

SK219（第371図） 調査区東側（K27区）に位置する土坑である。遺構の平面形態は不正円形で、遺構のプランや断面形態から複数の土坑が切り合っている可能性が考えられる。その規模は長径0.85m、短径0.8m、深さ0.6mである。埋土上位から拳大の礫や中国産青花の破片などが出土し、埋土下位には礫や遺物をほとんど含まない。なお、遺構の検出面より15cmほど上位から完存品の取瓶が出土したが、出土レベルより、当該遺物はこの土坑の包含遺物ではないと考えられる。遺構の性格は廃棄土坑と推定される。出土遺物が少ないため、遺構の詳細な年代を判定できないが、16世紀後葉以降の所産であろう。

取瓶は土坑  
の包含遺物  
ではない

SK219出土遺物（第372図） 1は完存品の取瓶である。前述したように、当該遺物は遺構検出面より上位で出土しているため、当該土坑の帰属遺物ではない。2は中国景德鎮系青花皿で、小野分類E群の製品である。16世紀後葉の所産である。

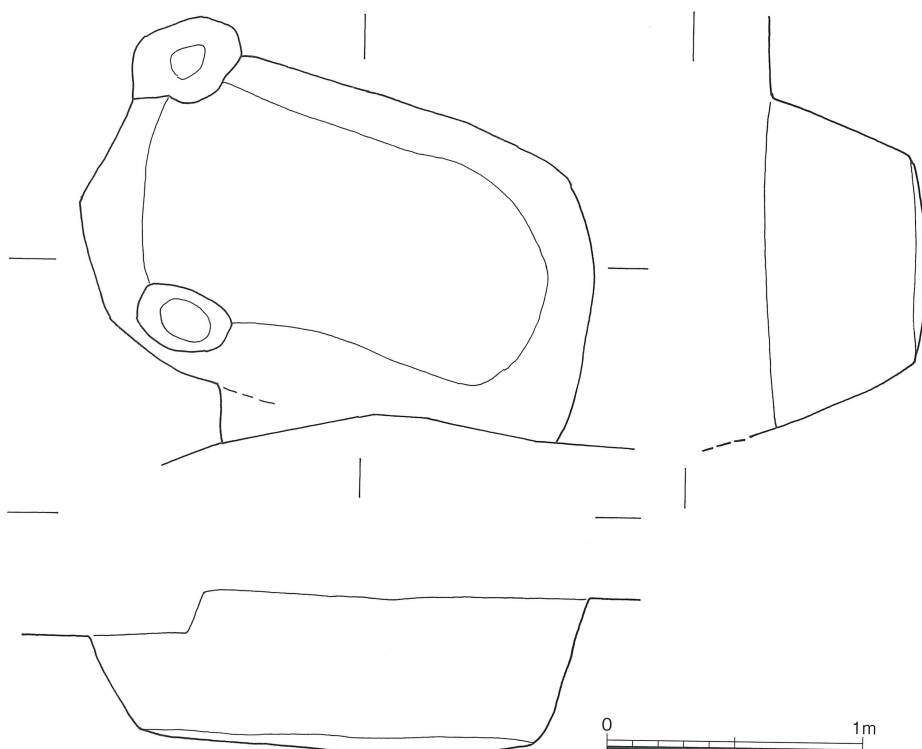
第6節 中世大友府内町跡第67次調査C区



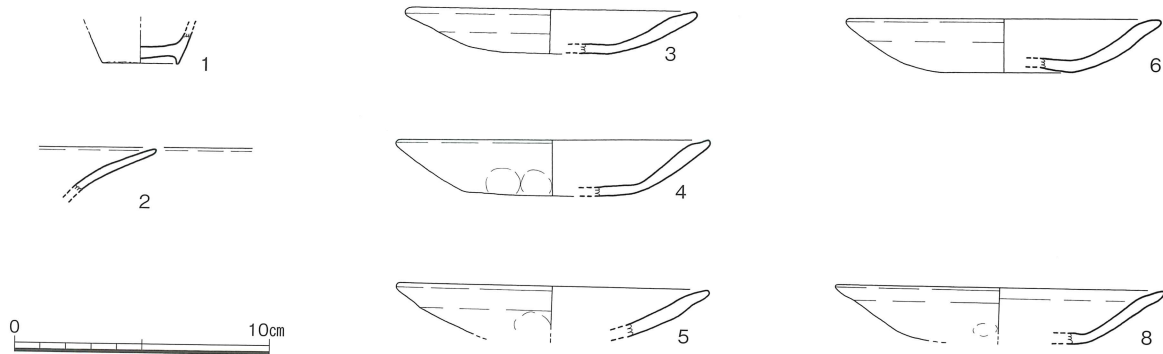
第371図 SK219実測図(1/30)

第372図 SK219出土遺物実測図(1/3)

SK220(第373図) L28区に位置する土坑である。遺構の平面形態は略隅丸長方形を呈し、遺構の南西側コーナーは調査区外に伸びる。その規模は、現状で長径2.2m、短径1.2m、深さ0.6mである。周辺の柱穴と切り合い関係を



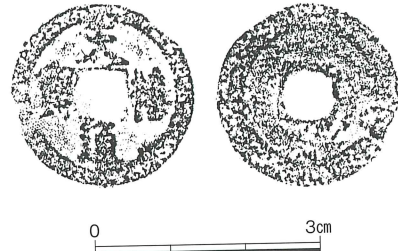
第373図 SK220実測図(1/30)



第374図 SK220出土遺物実測図①(1/3)

有するが、これらの柱穴すべてに切られている。遺構の埋土中から、薄手の京都系土師器や銅銭などが出土した。遺構の性格は廃棄土坑であろう。出土遺物の年代観から、遺構の年代は16世紀前葉から中葉に比定される。

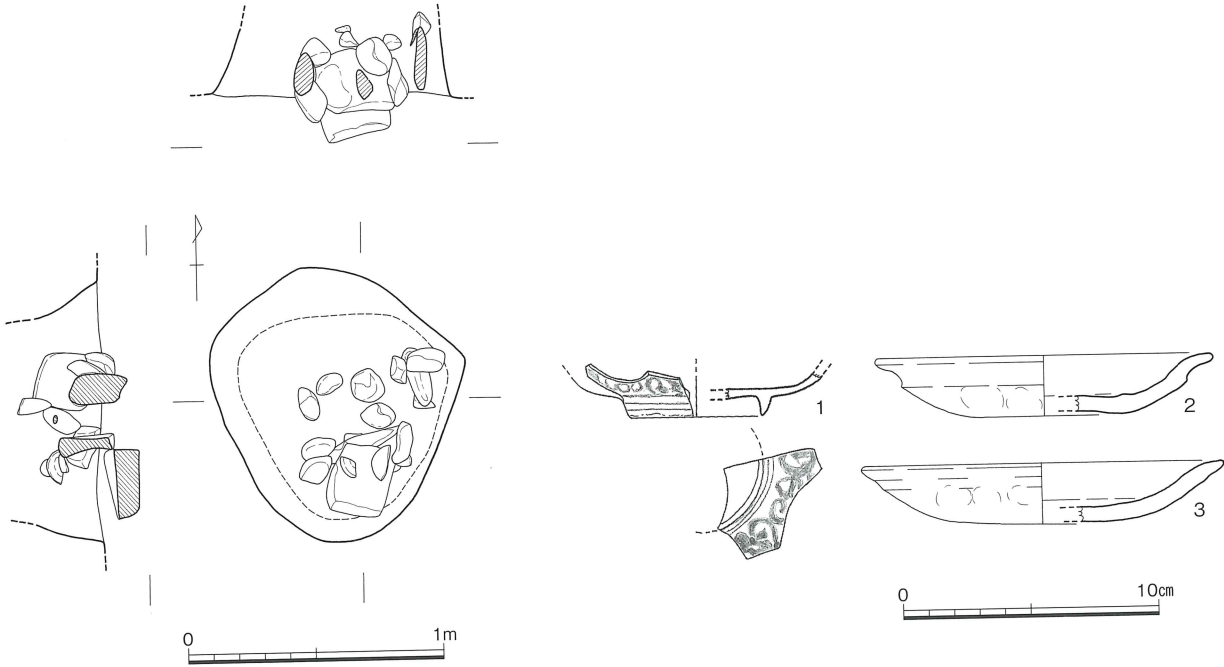
SK220出土遺物（第374・375図） 第374図1・2は中国景德鎮系白磁で、1は小杯の底部、2は皿の口縁部破片である。いずれも森田分類のE群に属し、16世紀代の製品である。3～8は京都系土師器皿で、塩路編年1期に属する。16世紀前葉から中葉の所産である。第375図は中国北宋代の銅銭「元禧通寶」で、初鑄造年は1017年である。



第375図 SK220出土遺物実測図②（1/1）

SK236（第376図） L27区に位置する土坑である。遺構の平面形態は略円形を呈し、その規模は長径1.1m、短径1.0m、深さ0.6mである。16世紀末葉の土坑SK191と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSK236（古）→SK191（新）である。土坑内部からは礫とともに、中国産青花や京都系土師器皿が出土した。礫は土坑の南東側に片寄って出土する傾向があり、頭大ほどの大型の礫数個も認められた。出土した京都系土師器皿は厚手の製品で、時期的に新しい様相を呈する資料である。出土遺物の年代観から、遺構の年代は16世紀末葉に比定される。

SK236出土遺物（第377図） 1は中国景德鎮系青花碗で、小野分類C群に属する。2・3は京都系土師器皿で、器壁の厚みが5mm以上を測り、塩地編年2期から3期に分類される製品である。

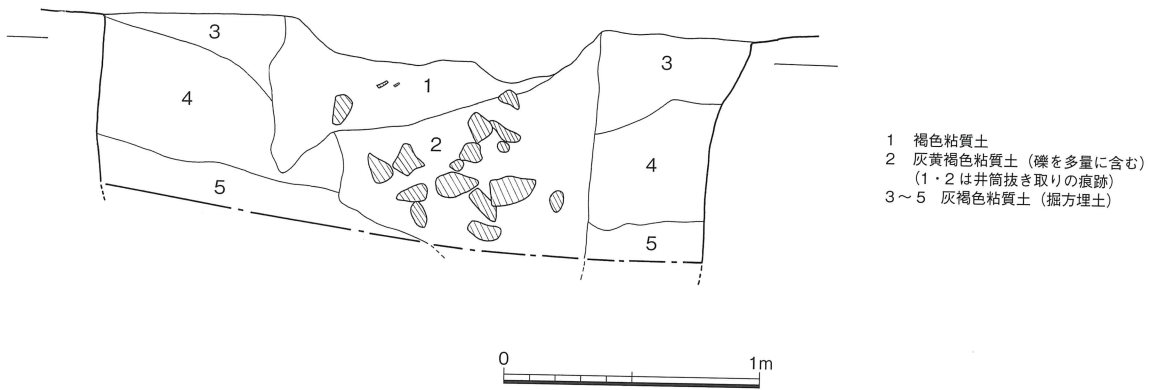


第376図 SK236実測図（1/30）

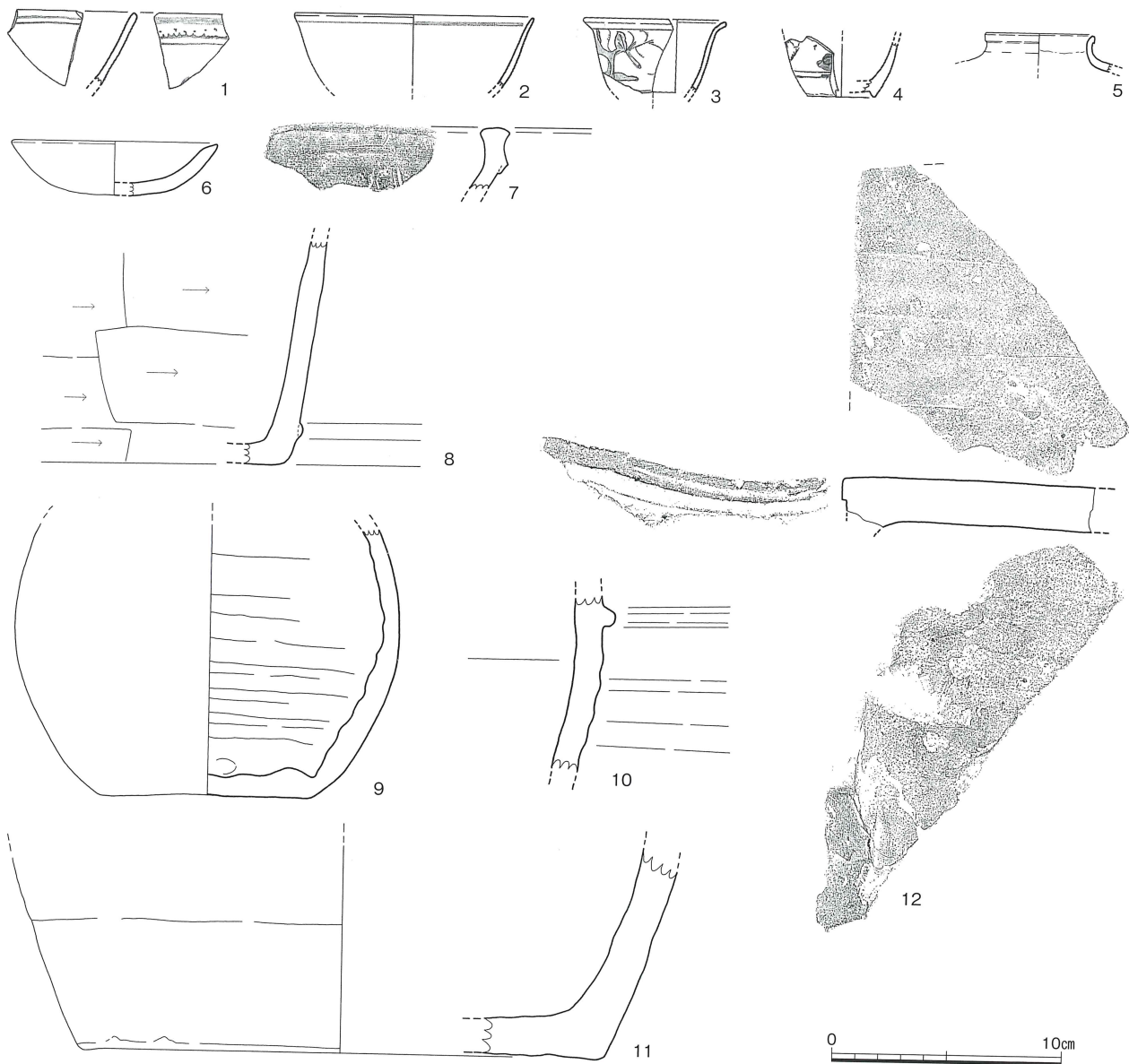
第377図 SK236出土遺物実測図（1/3）

(3) 井戸

SE221（第378図） L27区に位置する井戸である。掘方は略楕円形を呈し、長径3.1m、短径2.6mを測る。調査は遺構を半截する形で掘方の西側半分を掘り進めていたが、掘り下げ時期が雨期に相



第378図 SE221 土層断面実測図 (1/30)



第379図 SE221 出土遺物実測図 (1/3)

当したため湧水が著しく、これ以上の掘り下げを進めると、遺構壁面の崩壊等が生じ、作業が危険になることが想定されたため、遺構の完掘や井筒の施設の確認、遺構の詳細な平面図や土層図の作成等を断面せざるを得なかった。掘り下げ途中までの遺構断面図からは、桶等の抜き取り痕と推定される掘り込みや抜き取り後の掘り込み部に礫を投入した状況などが観察できる。町屋の裏手に位置する井戸と推定される。未完掘ではあるものの、井筒内や堀方内から出土した遺物から、遺構の年代は16世紀後葉から末葉に比定される。

中国産  
茶入

SE221 出土遺物 (第379図) 1～4は中国景德鎮窯系青花で、1は小野分類C群碗(蓮子碗)、2はE群碗(饅頭心碗)、3・4は小杯である。5は中国産の茶入で、口縁部の破片である。外面に鉄釉を施し、内面は露胎となる。6は京都系土師器皿で、塩地編年2期に相当する資料である。7は瓦質土器播鉢で、内面の播目がわずかに残存する。口縁部の形態から在地系の製品と推定される。8も在地産と推定される瓦質土器火鉢で、底部付近の胴部外面に退化した断面三角形の突帯を巡らせる。外面にはナデ調整、内面には削り調整が認められる。9～11は備前焼で、9は壺または徳利の胴部中位以下の破片、10は水屋甕の胴部破片、11は甕の底部破片である。12は軒平瓦で、瓦当文様はほとんど欠損しているが、瓦当部の一部が残存する資料である。

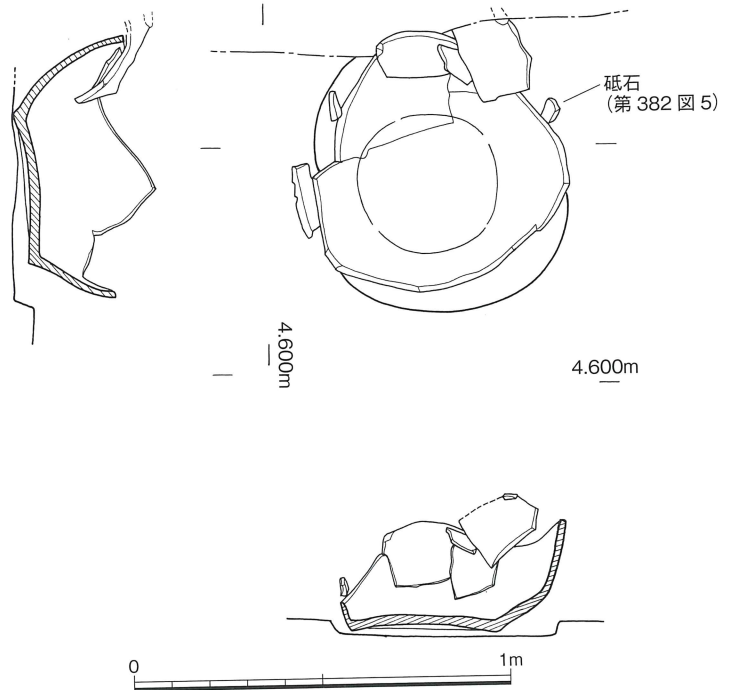
(4) 大甕埋設遺構

大甕埋設  
遺構

SX153 (第380図) L27区に位置する遺構で、備前焼大甕を埋設した「大甕埋設遺構」である。遺構上面の削平が著しく、胴部下位以下は原位置で残存するものの、胴部上位以上は欠損している。大甕のサイズより、わずかに大きな規模の土坑を掘り、その内部に備前焼大甕を正位で埋置する。残存する甕の内部から、青花・硯などとともに、同一個体である大甕の口縁部や胴部中位以上の破片が落ち込んだ状態で出土した(写真図版19参照)。また、甕の外部から砥石が1点出土している。遺構の北側は未掘であるが、現状では複数の大甕が埋設されている状況は確認できておらず、大甕1個体のみの埋設遺構である可能性が高い<sup>(1)</sup>。町屋の裏手に埋設された大甕埋設遺構であり、便所遺構である可能性も想定されるが、大甕内部の堆積土壌の所見からは否定的<sup>(2)</sup>である。

便所遺構  
ではない

大甕内部の堆積土壌の分析が不十分であり、当該遺構の機能は不明といわざるを得ない。

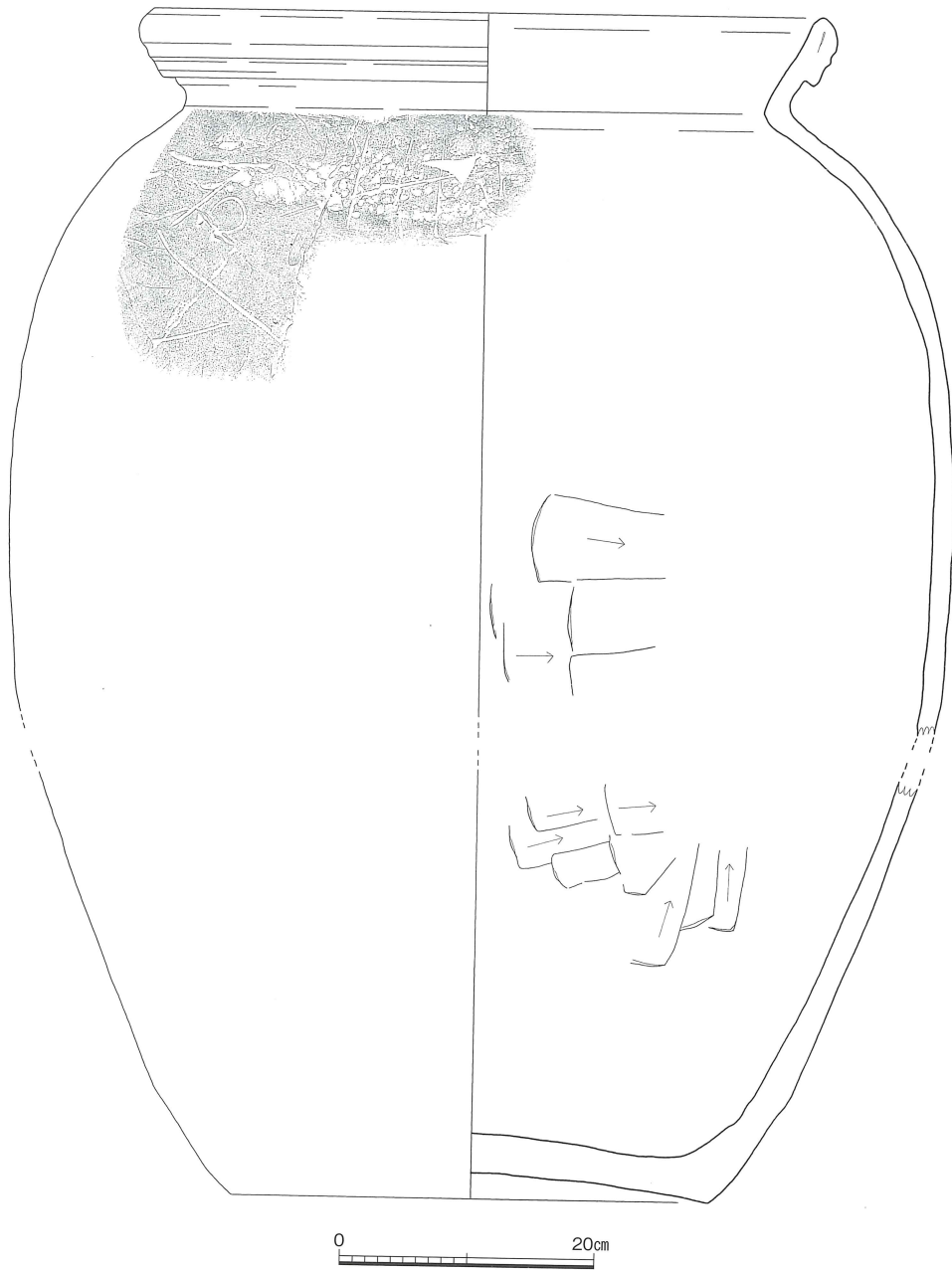


註(1) 備前焼大甕を1基のみ埋設する遺構は、中世大友府内町跡第13次調査区にも存在する。SK250・SK251とする遺構がそれに相当する。

大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内2-中世大友府内町跡第9次・第13次・第21次調査区-』(大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告第2集2005年)144～145頁

(2) 大甕内に堆積する土壌を堀苑孝志氏(大成エンジニアリング)に顕微鏡で見ていただいたが、当該遺構が「便所遺構」と断定する痕跡は、土壌内に認められないという所見をご教示いただいた。

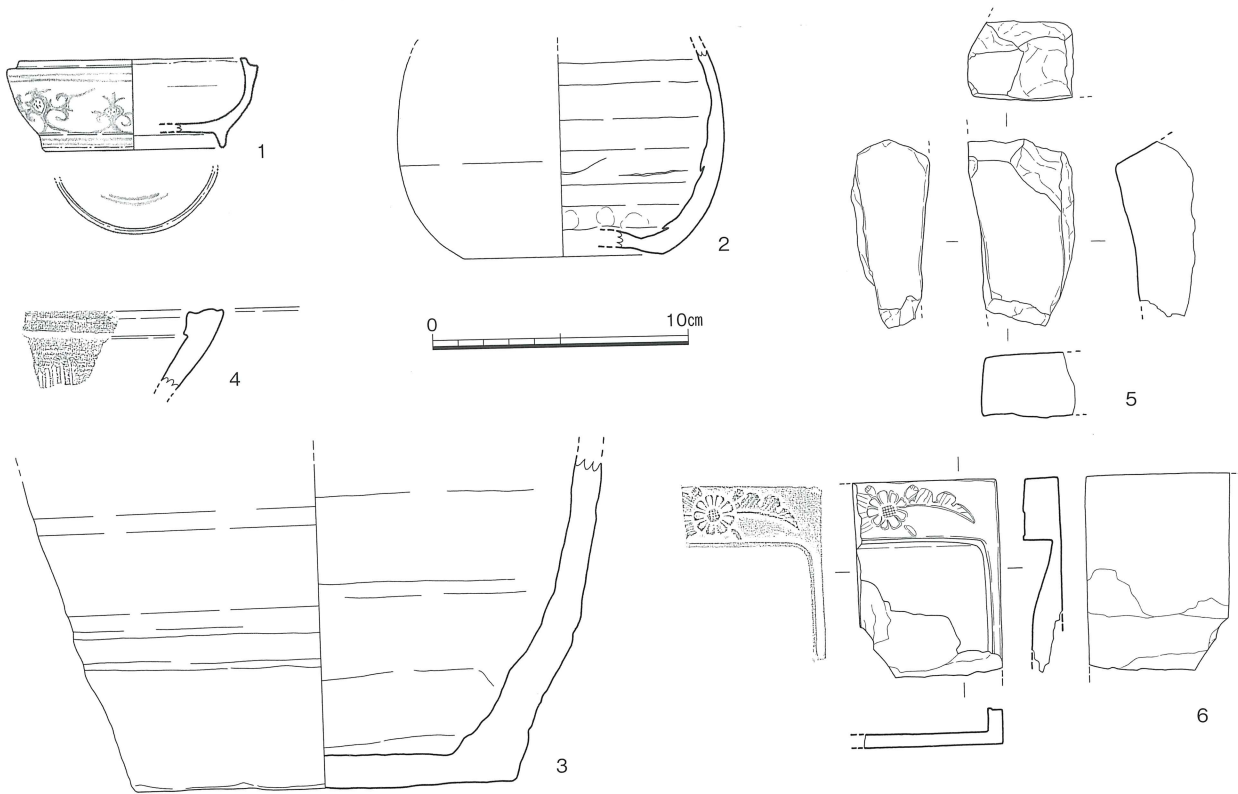
第380図 SX153 実測図 (1/20)



第381図 SX153出土遺物実測図① (1/6)

ヘラ記号・  
「二石入」  
のヘラ描き  
文字

SX153出土遺物（第381・382図） 第381図は埋設されていた備前焼大甕で、口縁部に凹線を有する乗岡編年近世1期の製品である。肩部外面にヘラ記号と「二石入」のヘラ描き文字が認められる。第382図1は中国景德鎮窯系青花合子で、内面は露胎となる。内底部には二重圈線が描かれており、圈線内に銘款が存在すると思われるが、欠損により不明である。2・3は備前焼で、2は壺または徳利、3は壺の胴部下位から底部にかけての破片である。4は瓦質土器播鉢の口縁部破片で、内面に5条を一単位とする播目が残存する。口縁部の形態から、「防長型」に分類される製品である。5は砂岩を素材とする砥石である。6は輝緑凝灰岩製の硯で、長門産の赤間硯である。硯縁部に浮き彫りによる菊花文を有する上手の製品である。

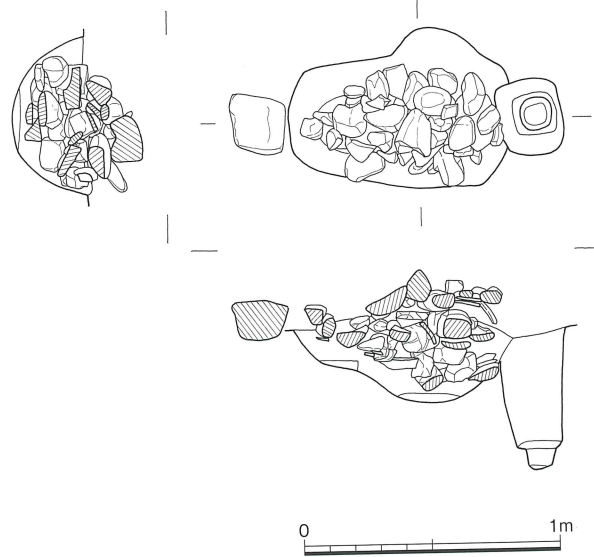


第382図 SX153 出土遺物実測図② (1/3)

(5) 集石遺構・石列

SX169 (第383図) K28区に位置する遺構である。長径0.95m、短径0.65m、深さ0.4mの二段掘りの土坑内に拳大程度の礫を多数充填しており、ここでは集石遺構のひとつとして報告する。北側を柱穴によって切られており、遺構の構築順序はSX169 (古) → 柱穴 (新) となる。礫を除去する過程で、備前焼水屋甕の大型破片が礫上に被せられたような状況で出土したが (写真図版20)、これが意図的なものかどうかは判断できなかった。礫内からは水屋甕の他、京都系土師器や備前焼播鉢・瓦・茶臼の破片などが出土し、礫には被熱したものも認められた。礫については町屋の建物の屋根上に重しとして乗せられていたものである可能性が考えられる。出土遺物の年代観から、当該遺構は16世紀末葉の所産である。

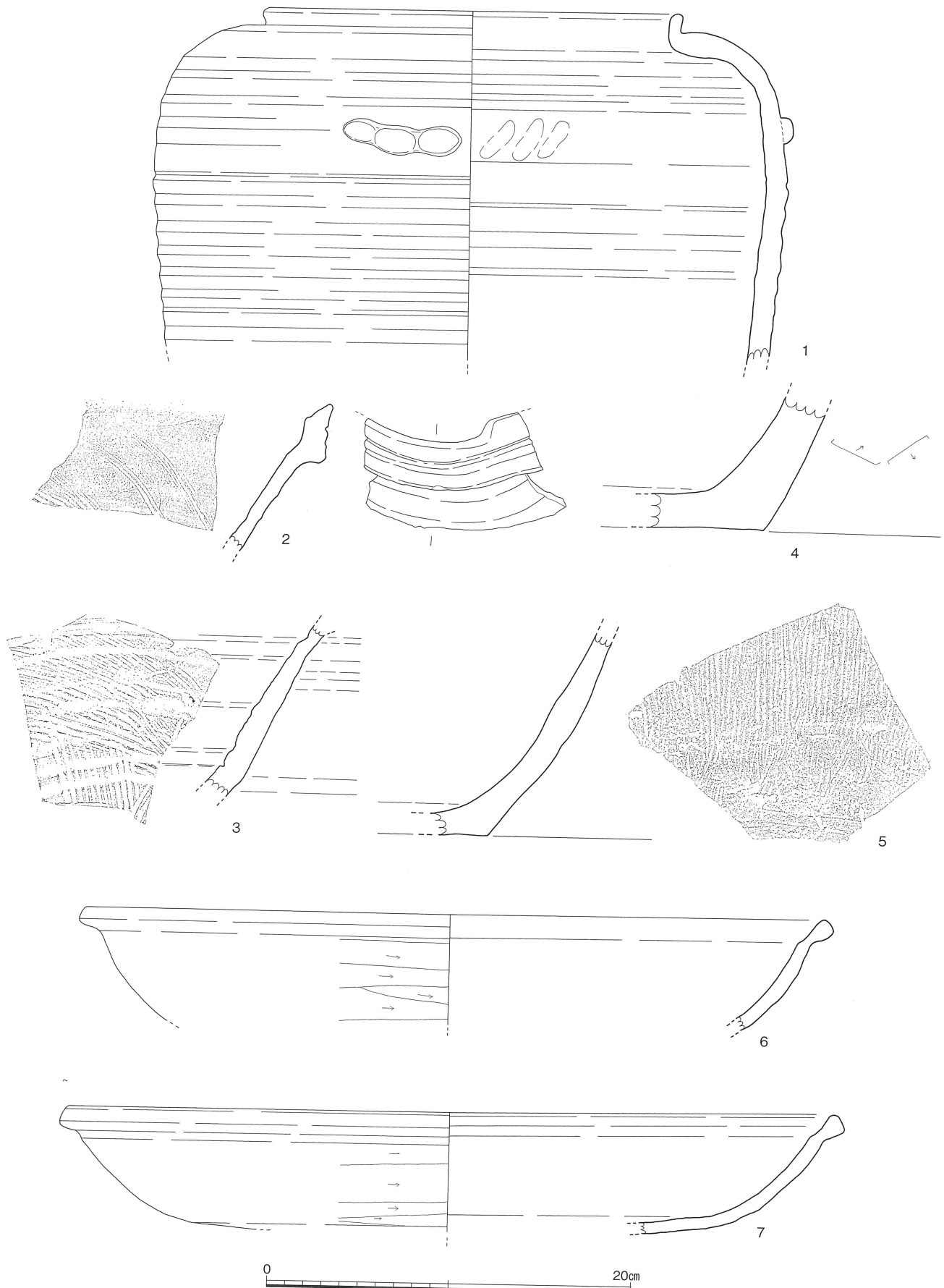
屋根の重し



第383図 SX169 実測図 (1/30)

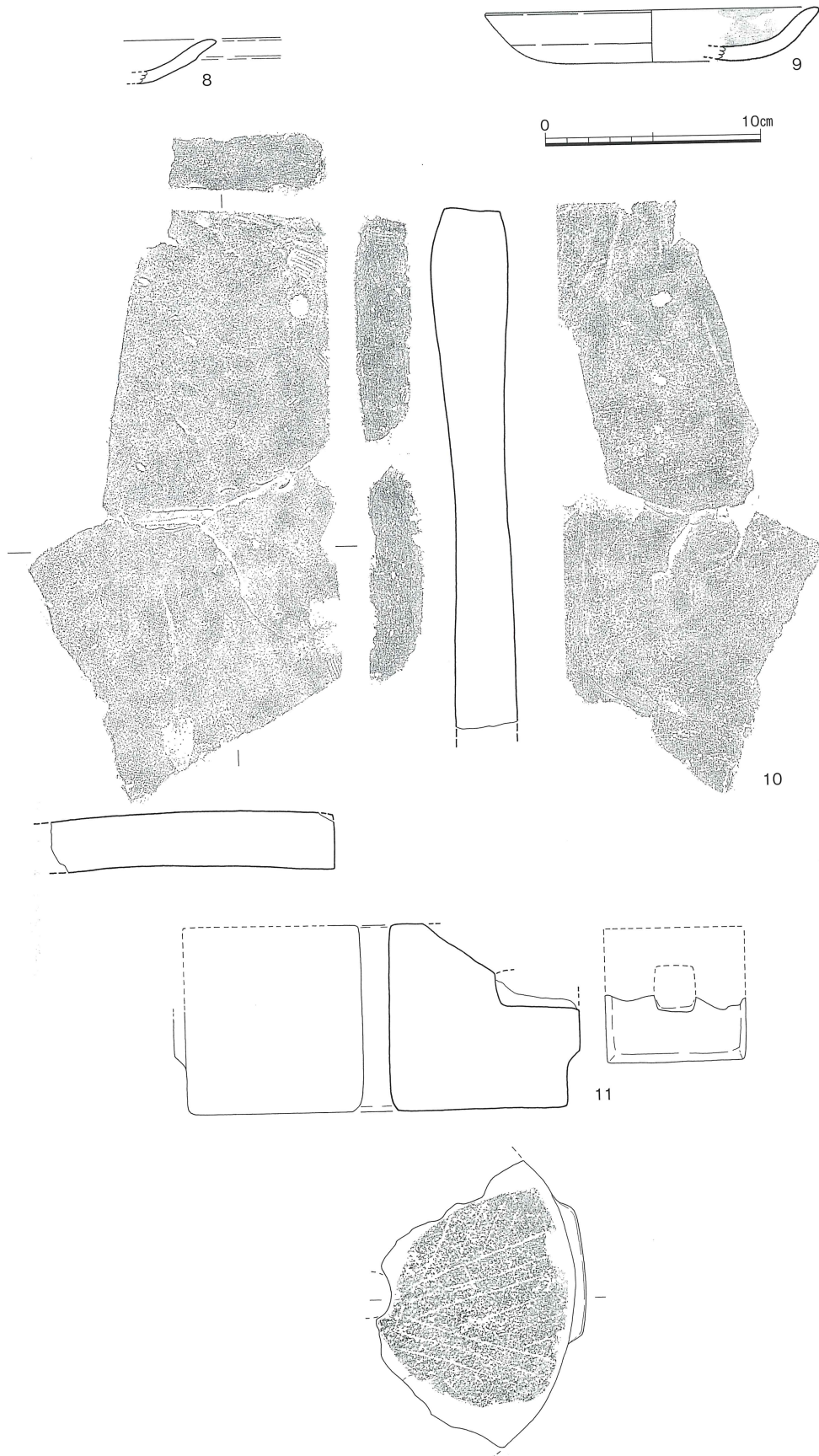
SX169 出土遺物 (第384・385図)

第384図1は備前焼水屋甕で、礫上に被せられたような状況で出土した資料である。肩部外面に痕跡的な把手を有する。2・3は備前焼播鉢で、内面に放射状播目と斜め播目を施す近世1期の資料である。4は備前焼大甕の底部破片である。5は備前焼あるいは常滑焼大甕で、外面に



第384図 SX169出土遺物実測図① (1/3)



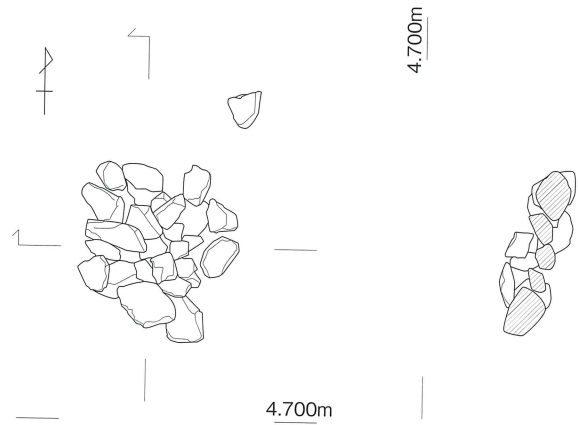


第385図 SX169出土遺物実測図② (1/3)

第6節 中世大友府内町跡第67次調査C区

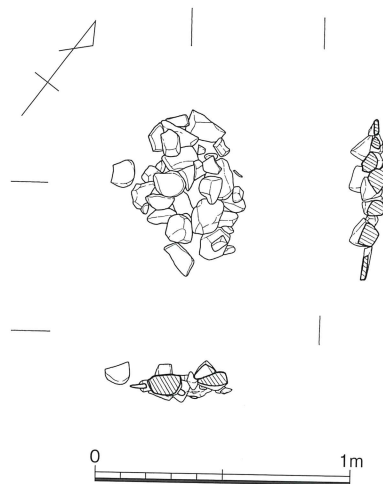
和泉砂岩

刷毛目状工具による調整痕、内面に回転横ナデが施されている。6・7は瓦質土器鍋で、在地系の製品である。胴部外面に削り、内面にナデを施す。第385図8・9は京都系土師器皿で、器壁が厚い塩地編年2～3期の製品である。9の内面にはススの付着が見られる。10は平瓦の破片で、側面と端面の一部が残存する。11は和泉砂岩を素材とする茶臼の上臼で、把手を差し込む部位の一部が残存している。



第386図 SX189 実測図 (1/30)

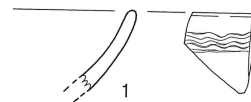
SX189 (第386図) 調査区の北西隅(K27区)に在する集石遺構である。16世紀前半から中葉の土坑SK180と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSK180(古)→SX189(新)となる。長径0.6m、短径0.5mの範囲に拳大の礫を集積している。礫の中には被熱したものも認められた。礫以外の出土遺物はないが、遺構の切り合い関係から、16世紀中葉以降の所産と推定される。



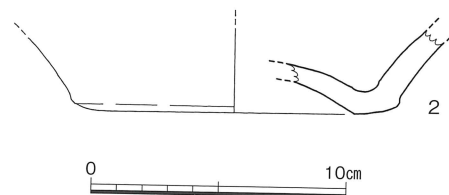
第387図 SX214 実測図 (1/30)

SX214 (第387図) L27区に位置する集石遺構である。長径0.65m、短径0.5mの範囲に拳大以下の礫が集積された形で検出された。礫の中には被熱したものも認められる。礫に混じって、陶磁器の小片なども出土している。出土遺物には遺構の年代を特定できる資料はないが、周辺の遺構の状況から、16世紀後葉から末葉の所産と推定される。

SX214出土遺物 (第388図) 1は中国産の青磁碗の口縁部で、外面に櫛描波状文を施す。15世紀代の製品である。2は中国産の褐釉陶器壺の底部である。内面は施釉されているが、内底部および外面は露胎となる。16世紀代の所産と推定される。

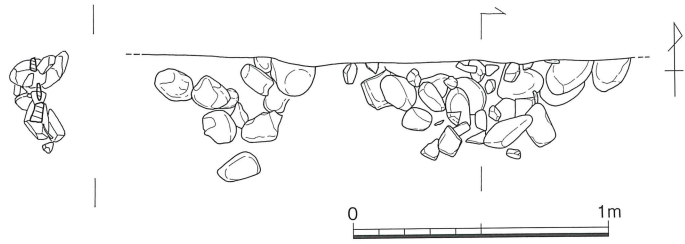


SX215 (第389図) L27区北辺に位置する集石遺構である。集石は西側と東側の2箇所礫の集中部が認められるが、いずれも頭大から拳大の礫で構成されており、その規模は東西約2m、南北約0.35mを測



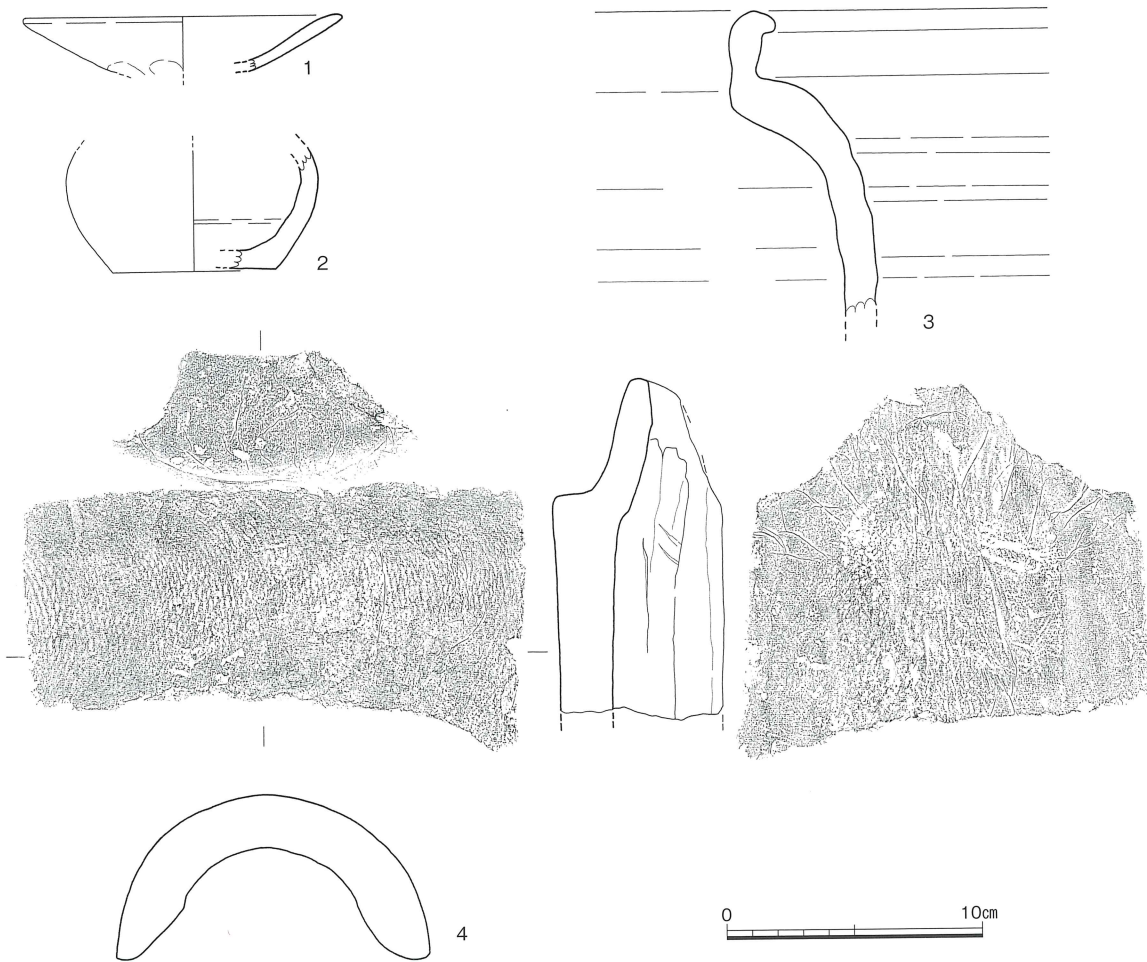
第388図 SX214 出土遺物実測図 (1/3)

る。西側の集石からは礫以外の遺物は出土しなかったが、東側の集石からは礫の他に京都系土師器、備前焼、丸瓦片などが出土した。遺構の年代は、備前焼の水屋甕が出土していることから、16世紀後葉から末葉に比定される。



第389図 SX215実測図(1/30)

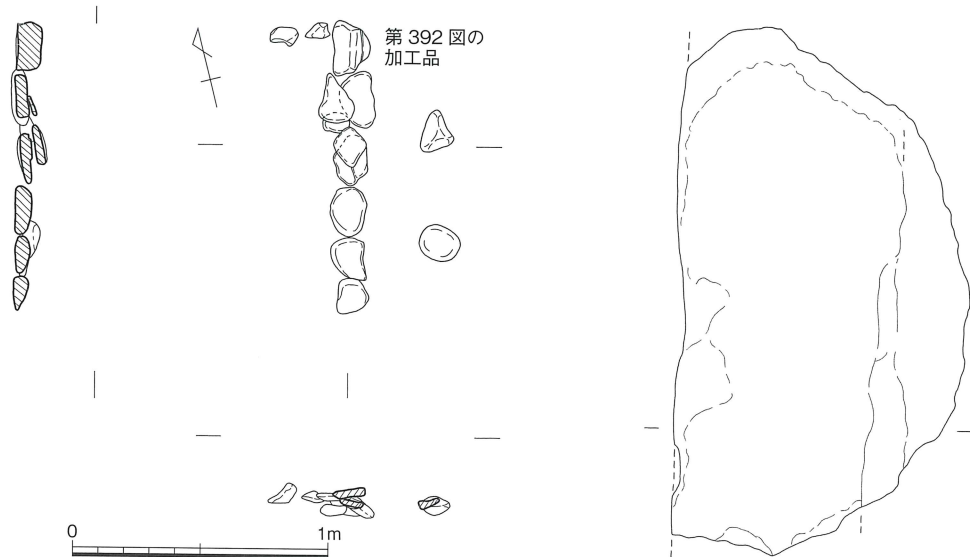
SX215出土遺物(第390図) 1は京都系土師器皿で、器壁の厚みが5mm以下であることから、塩地編年1期の資料である。当該遺物は16世紀前葉から中葉の所産であるが、遺構の年代と合わないため、周辺からの混入品と推定される。2は備前焼小壺の胴部中位から底部にかけての破片である。3は備前焼水屋甕で、集石遺構の所産年代を示唆する遺物である。16世紀後葉以降に比定される。4は筒部を有する丸瓦で、外面に縄目叩きが認められる。



第390図 SX215出土遺物実測図(1/3)

SX216(第391図) L28区に位置する遺構で、10個程度の川原石を南北方向に並べた石列である。その規模は長さ1.15m、幅0.2mを測る。遺構の主軸は座標北に対し、西にやや振れており、第2南北街路の主軸方向とほぼ同一である。石列を構成する礫の中には、凝灰岩製の加工部材が認められた。町屋の裏手を画する何らかの区画を示す遺構である可能性が考えられる。遺構の構築時期を示す遺物は出土していないが、周辺の状況より16世紀後葉から末葉の所産と推定される。

第6節 中世大友府内町跡第67次調査C区



第391図 SX216実測図(1/30)

凝灰岩の加工品

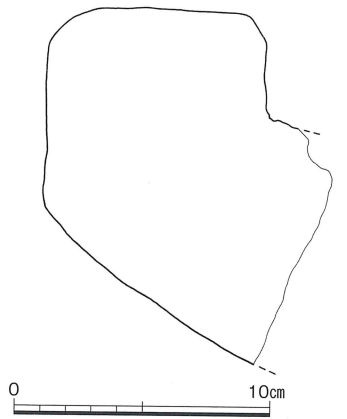
SX216出土遺物(第392図) 図示した遺物は、凝灰岩を素材とした加工品である。破片のため、その用途や機能は不明である。

(6) 炉跡関連遺構

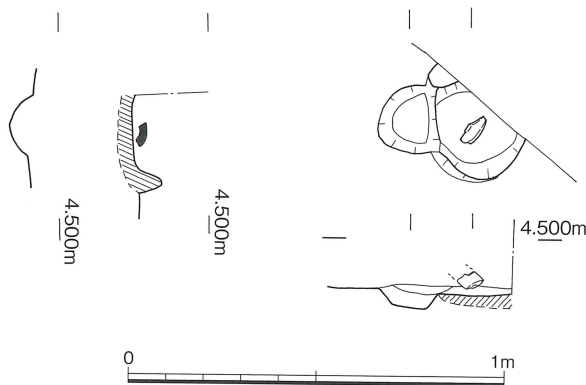
SX188(第393図) L28区で検出した遺構で、その規模は長径0.4m、短径0.25m、深さ5~8cmである。南端部はわずかに調査区外に伸びる。遺構の周辺と底面は強く被熱しており、内部には焼土ブロックや炭化物が多量に堆積する。遺構の北側には炉を構成していた壁面がわずかに残存している。中央部から鞆羽口が出土したが、破片であり、原位置を保つものではなさそうである。遺構の上部から、薄手の京都系土師器皿の破片が出土したが、図示を行っていない。遺構の状態から判断して、「小鍛冶の炉跡」と推定される。出土遺物と遺構の状態から、16世紀前葉から中葉の所産である。

小鍛冶の炉跡

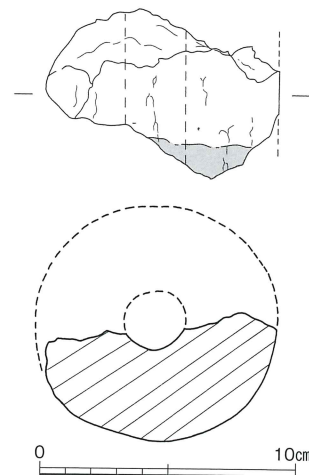
SX188出土遺物(第188図) 図示した遺物は、鞆羽口である。小破片であるが、残存部の一端が強く被熱している。



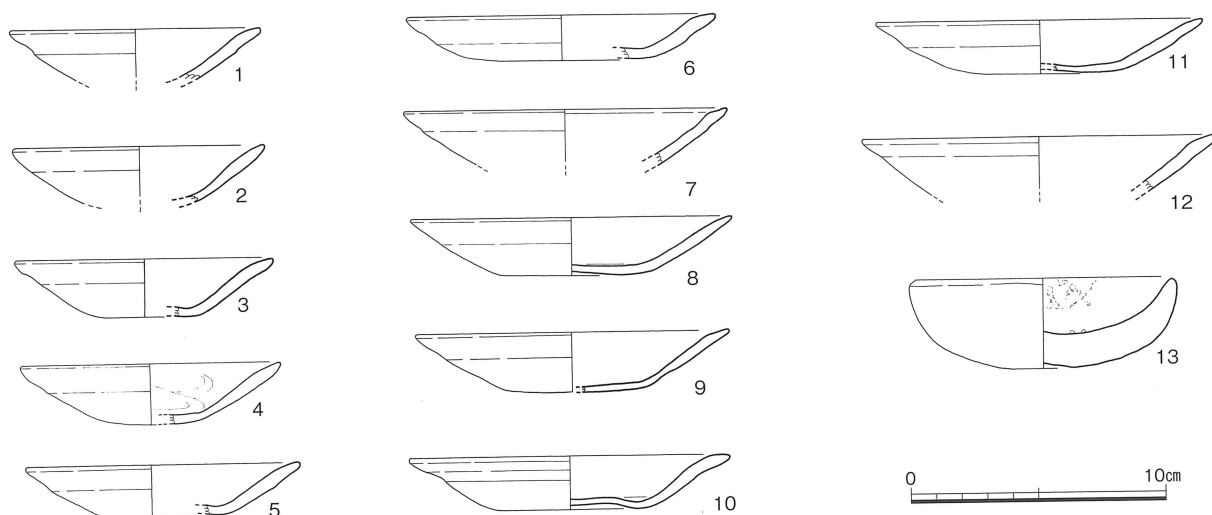
第392図 SX216出土遺物実測図(1/3)



第393図 SX188実測図(1/20)



第394図 SX188出土遺物実測図(1/3)



第395図 SX177 出土遺物実測図 (1/3)

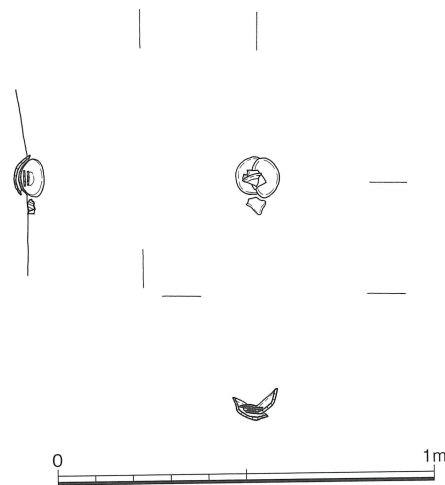
(7) 土器集中部

SX177 L28区で検出された土器片の集中部で、南北2.0m、東西3.5mの範囲に土器片が集中する。土器片の大半は薄手の京都系土師器皿で占められるが、14～15世紀代の在在系土師器も混在する。整地層内の2次堆積とも推定されるが、周辺に16世紀前葉から中葉に比定される土坑や炉跡関連遺構も存在するため、これらとの関連性が注目される。

SX177 出土遺物 (第395図) 1～12は京都系土師器皿で、器壁の厚みが5mm以下となる塩地編年1期の製品である。16世紀前葉から中葉の所産である。13は取瓶で、内面には金属滓が付着している。

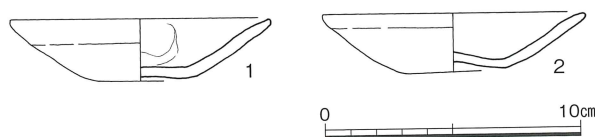
SX213 (第396図) L28区で検出された土器の集中部である。薄手の京都系土師器皿2枚と土器片少量を埋置している。土器は埋置された状態であるが、周囲に土坑などが掘り込まれた痕跡は認められなかった。京都系土師器皿2枚はいずれも正位の方向で出土したが、互いの個体が90度の方向で直行するような重ね方をされている。遺構の性格は不明であるが、土器を意図的に埋置したものと考えられるため、地鎮等の祭祀的な行為である可能性も考えられる。出土遺物の年代観から、遺構の年代は16世紀前葉から中葉に比定できる。

土器の重ね方



第396図 SX213 実測図 (1/20)

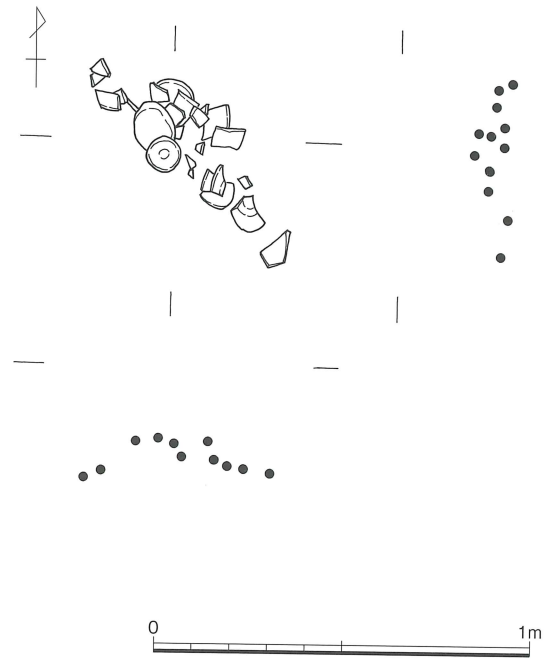
SX213 出土遺物 (第397図) 1・2は京都系土師器皿で、器壁の厚みが5mm以下となる塩路編年1期の製品である。16世紀前葉から中葉の所産である。



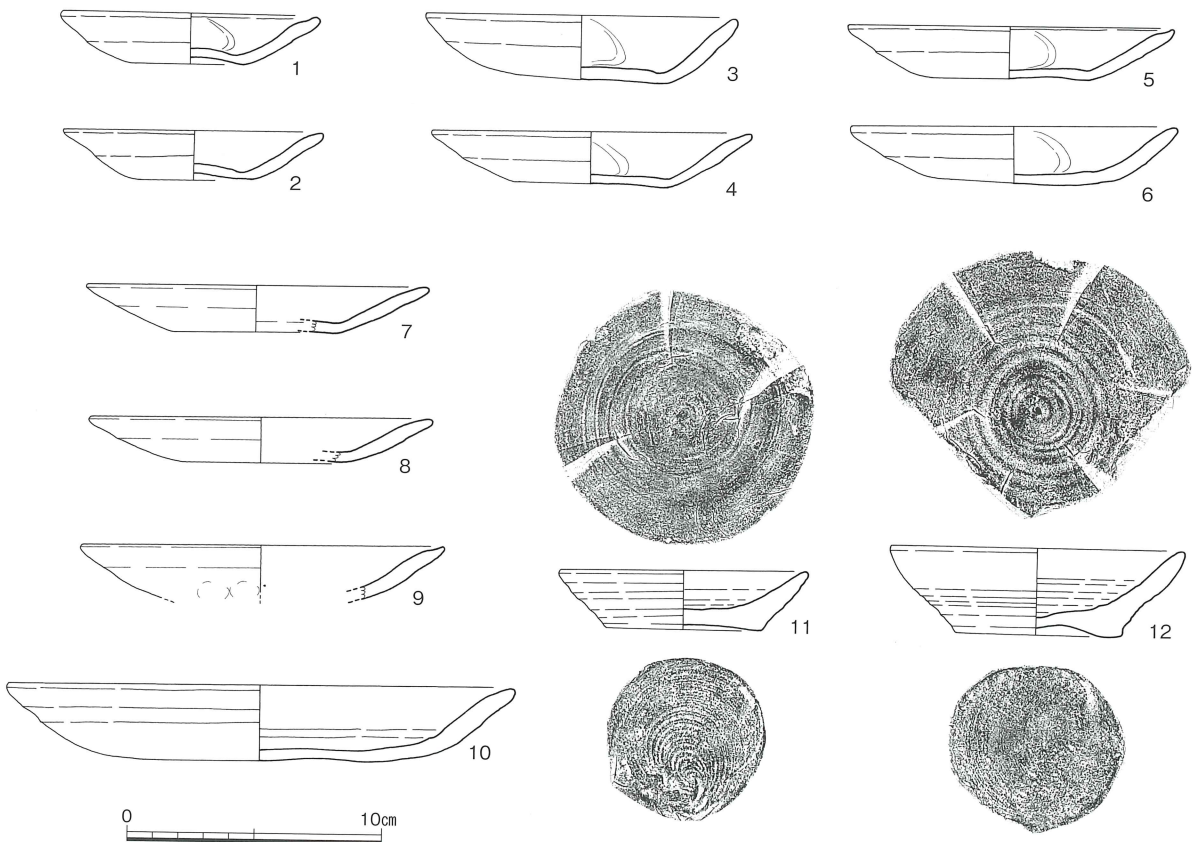
第397図 SX213 出土遺物実測図 (1/3)

SX235 (第398図) 調査区北東隅 (M27区) で検出された土器の集中部である。調査区東側の落ち込みを埋める整地層中に形成され、南北0.6m、東西0.5mの範囲に完形品を含む土器が集中していた。土器は薄手の京都系土師器皿と在地系のロクロ目土師器で構成されている。遺構の性格は不明で、土器は一括廃棄されたものと推定されるが、意図的なものかどうかは判断が難しい。出土遺物の年代観から、遺構の年代は16世紀前葉から中葉に比定できる。

SX235出土遺物 (第399図) 1～10は薄手の京都系土師器皿で、色調は淡黄褐色を呈する。器壁の厚みが5mm以下となる塩地編年1期の製品である。11・12は底部外面に糸切り痕を有する在地系のロクロ目土師器である。色調は赤褐色を呈する。以上の出土遺物は、いずれも16世紀前葉から中葉の所産である。

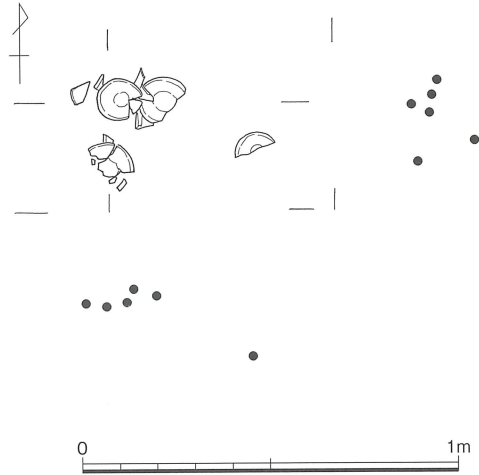


第398図 SX235実測図 (1/20)



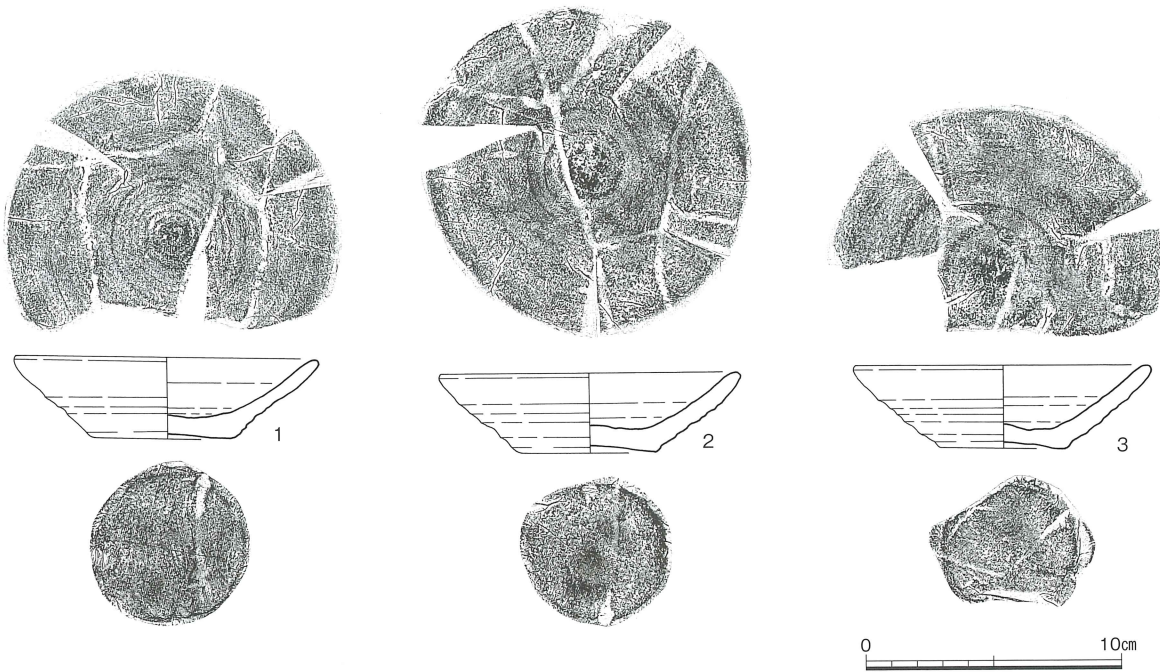
第399図 SX235出土遺物実測図 (1/3)

SX237（第400図） 調査区南東隅（M28区）で検出された土器の集中部である。当該遺構も調査区東側の落ち込みを埋める整地層中に形成され、南北0.4m、東西0.6mの範囲に完形に復元されるロクロ目土師器3個体が集中する。遺構の性格は不明であるが、土器は意図的に配置されたものである可能性が考えられる。遺物の周辺に掘り込みライン等は検出できなかった。ロクロ目土師器は15世紀末頃から出現するが、薄手の京都系土師器が出現する16世紀前葉以降も存続する。出土遺物の年代観と遺構の状況から、遺構の年代は15世紀末から16世紀中葉に比定しておきたい。

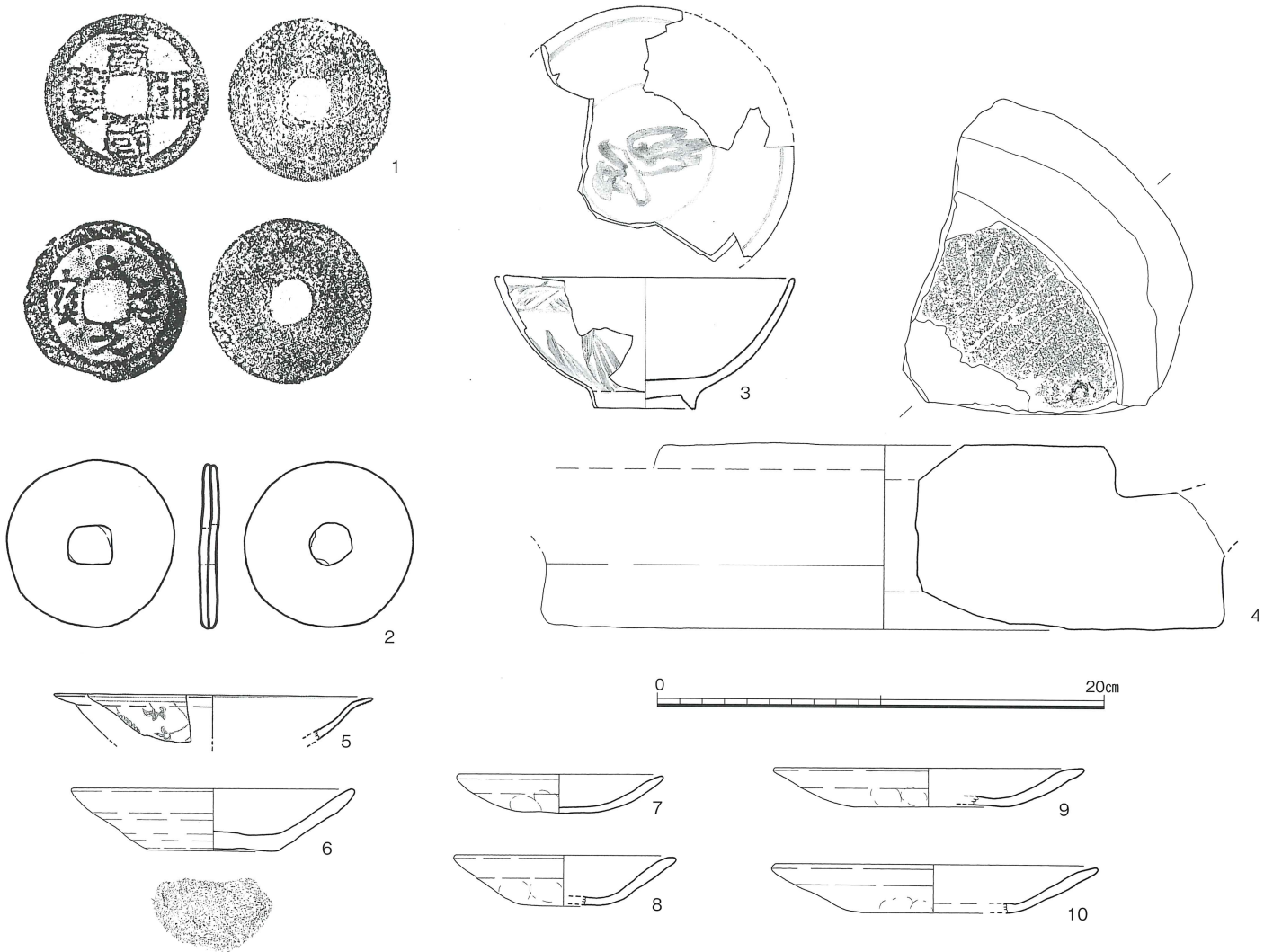


第400図 SX237 実測図（1/20）

SX237出土遺物（第401図） 1～3は在地系のロクロ目土師器である。色調は赤褐色を呈し、内外面にはロクロによる整形痕（段）が認められる。底部には糸切り痕を有すると思われるが、磨滅している。



第401図 SX237 出土遺物実測図（1/3）



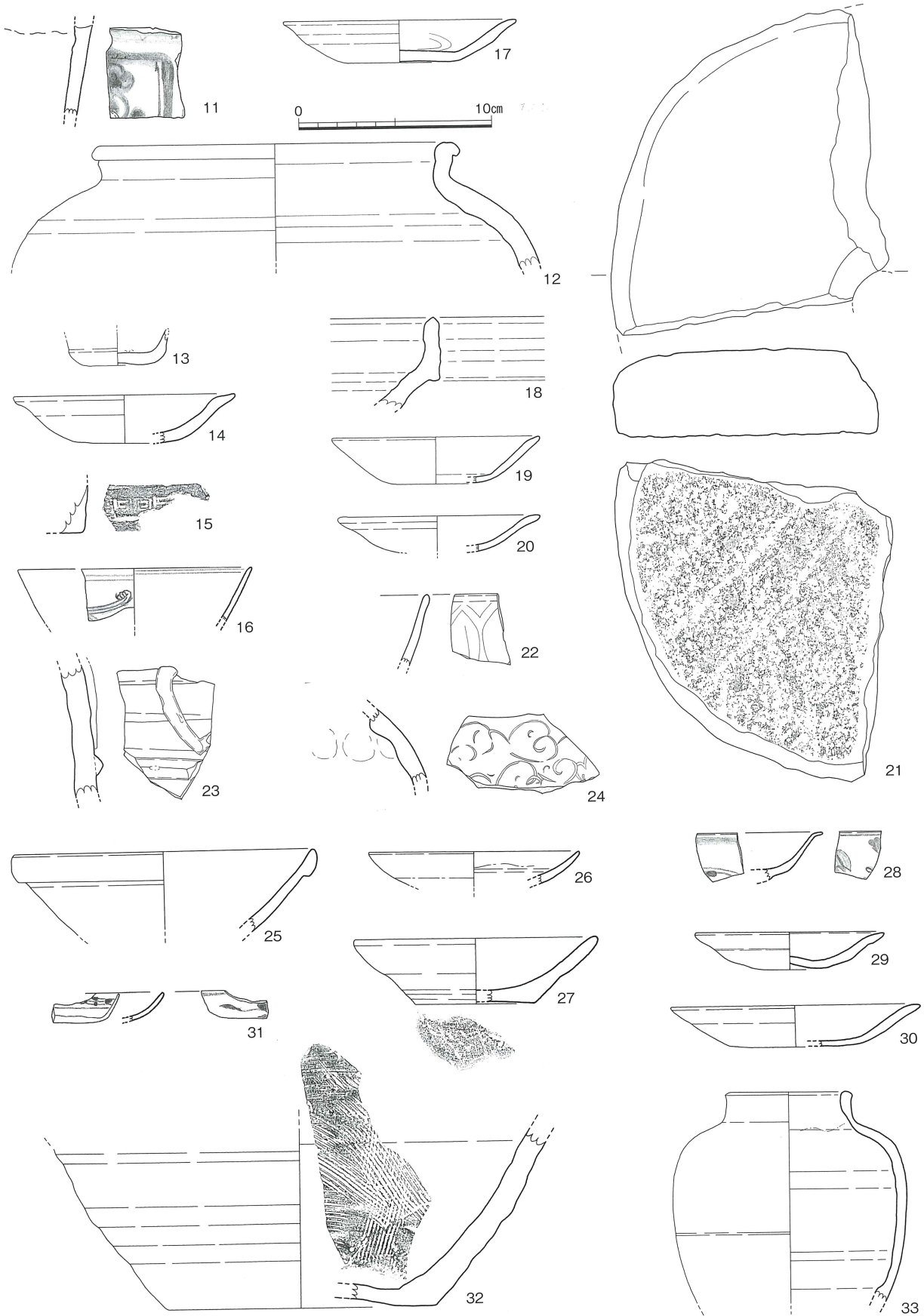
第402図 柱穴出土遺物実測図① (1/3)

(8) 柱穴など

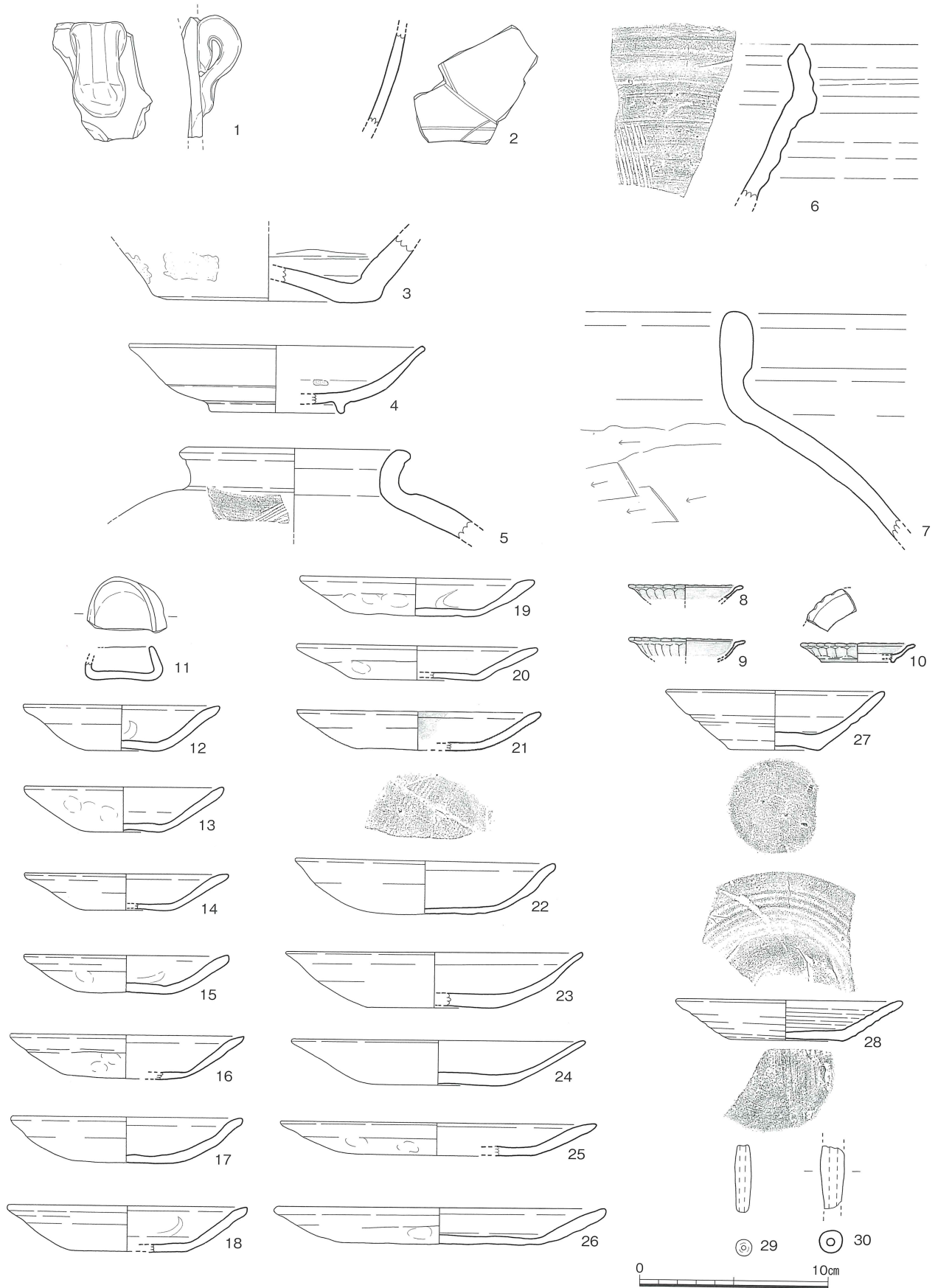
SP151  
鳥津侵攻後  
に構築

柱穴出土遺物(第402～403図) 柱穴内から出土した遺物を順不同で紹介する。第402図1～3は、SP151からの出土遺物である。SP151は天正14年(1586)の鳥津侵攻後に構築された火災処理土坑を切って構築された柱穴である。出土遺物は遺構の年代と矛盾しない。1・2は銅銭で、1は初鑄造年が959年の中国南唐代「唐国通宝」である。2は銅銭2枚が銹着しており、銭文が判読できるものは初鑄造年が959年の中国北宋代「至道元宝」である。3は中国漳州窯系青花碗で、見込みに「寿」の崩し字が描かれている。4は碟の詰まった柱穴SP190からの出土遺物で、和泉砂岩を素材とする茶臼である。5はSP224出土の中国景德鎮窯系青花皿(小野分類B1群)、6はSP234出土の在地系の土師質土器皿である。7～10はSP231出土の京都系土師器皿で、いずれも破片であるが、柱穴埋土内からまとまって出土した。第403図11はSP163の出土遺物で、中国景德鎮窯系青花壺の胴部下位の破片である。外面にラマ式蓮弁文を描き、内面は露胎となる。12はSP164出土の備前焼壺である。13～16はSP167の出土遺物で、13は土師質土器の小型の皿または蓋、14は京都系土師器皿、15は外面に二連雷文を押捺する在地系の瓦質土器火鉢、16は中国景德鎮窯系青花碗(小野分類E群)である。17はSP174出土の京都系土師器皿で、18はSP178出土の備前焼播鉢(乗岡編年中世6期)である。19・20は薄手の京都系土師器皿で、19はSP179、20はSP181からの出土である。いずれも塩地編年1期の資料で、これらからSP179・SP181の構築年代は16世紀前葉から中葉である可能性が考えられ

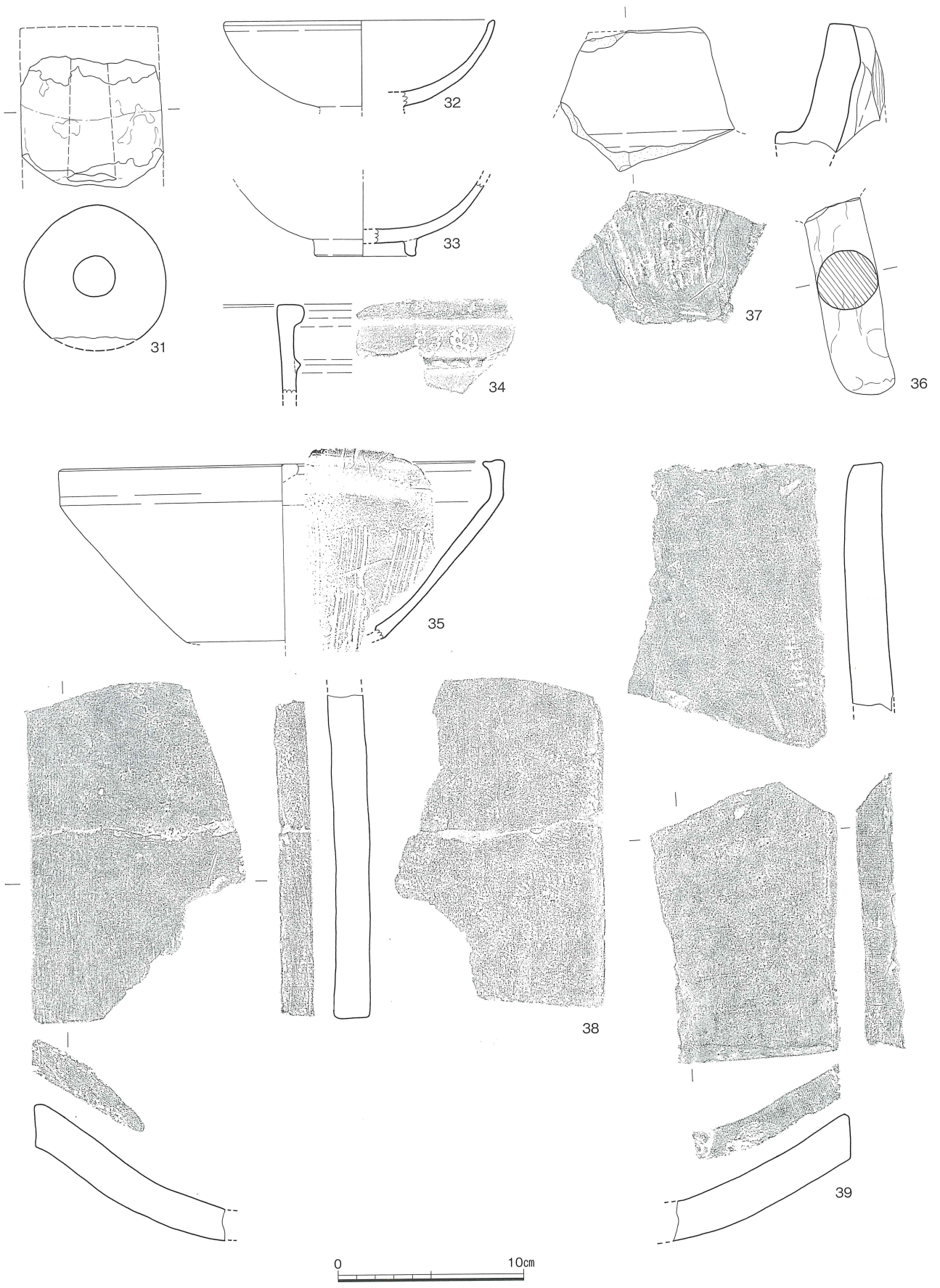




第403図 柱穴出土遺物実測図② (1/3)



第404図 包含層・整地層出土遺物実測図① (1/3)



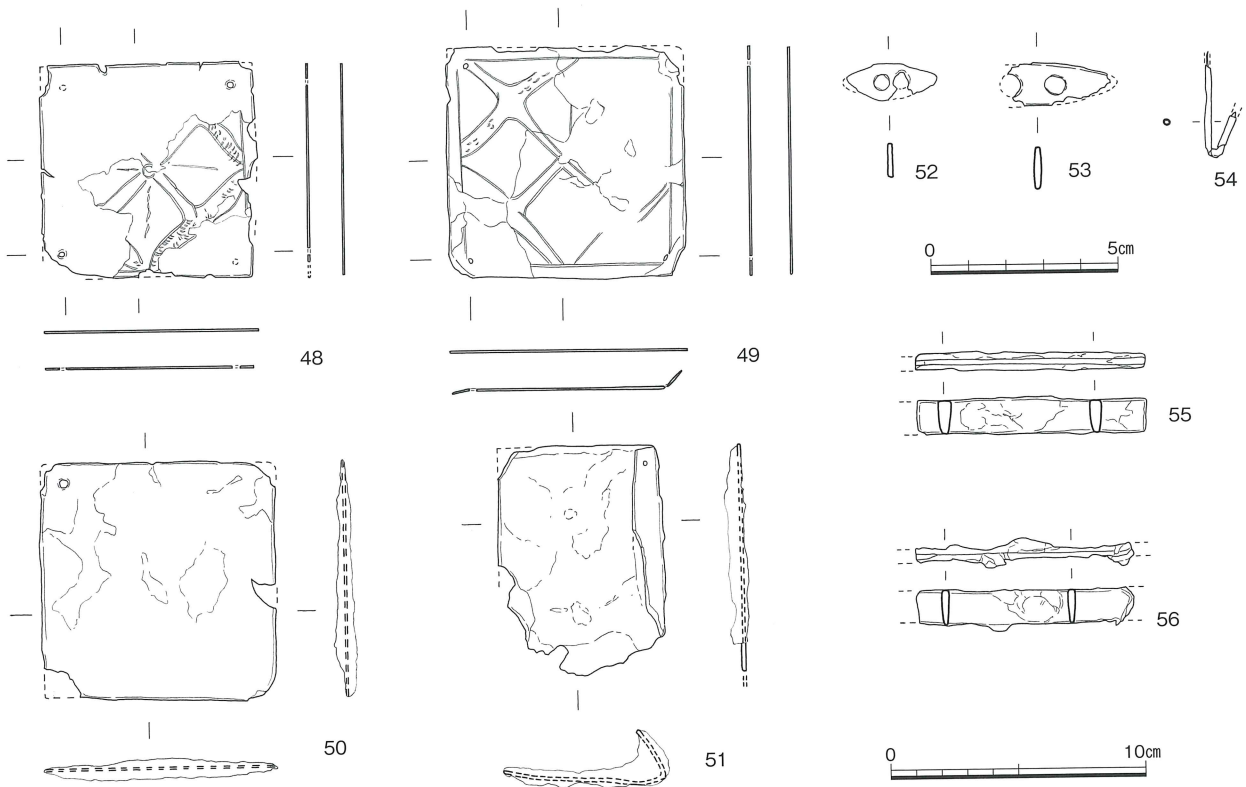
第405図 包含層・整地層出土遺物実測図② (1/3)



第406図 包含層・整地層出土遺物実測図③ (1/3・1/8)

る。22はSP185出土の中国龍泉窯系蓮弁文青磁碗で、製作年代が13世紀代に遡ることから、混入品と思われる。23はSP186出土の備前焼水屋甕の胴部破片で、16世紀代の所産である。24はSP187出土の古瀬戸瓶子の肩部破片である。外面には鉄釉が施され、内面は露胎で、指頭痕が認められる。13～14世紀代の所産であるため、混入品であろう。25はSP201出土の中国産白磁碗で、11～12世紀代の所産であることから、当該資料も混入品と考えられる。26はSP203出土の中国産白磁皿で、見込みと高台周辺が露胎となる。16世紀代の製品である。27はSP210出土の土師質土器皿で、底部外面に回転糸切り痕を残す在地系の資料である。15世紀後半代の所産か。28～30はSP204の出土遺物で、28は小野分類B1群の中国景德鎮窯系青花皿、29・30は器壁が薄い古式の京都系土師器皿である。これらの遺物から、SP204の所産時期は16世紀前葉から中葉に比定される可能性が考えられる。31はSP301出土の中国景德鎮窯系青花皿で、小野分類E群に分類される。32はSP201出土の備前焼播鉢で、内面に放射状播目と斜め播目を施す近世1期（16世紀末葉）の資料である。33は中国産の青磁壺である。胴部中位に沈線状の段を有する。青磁釉は外面と口縁部内面に施釉されており、胴部内面以下は露胎となる。

中国産  
青磁壺

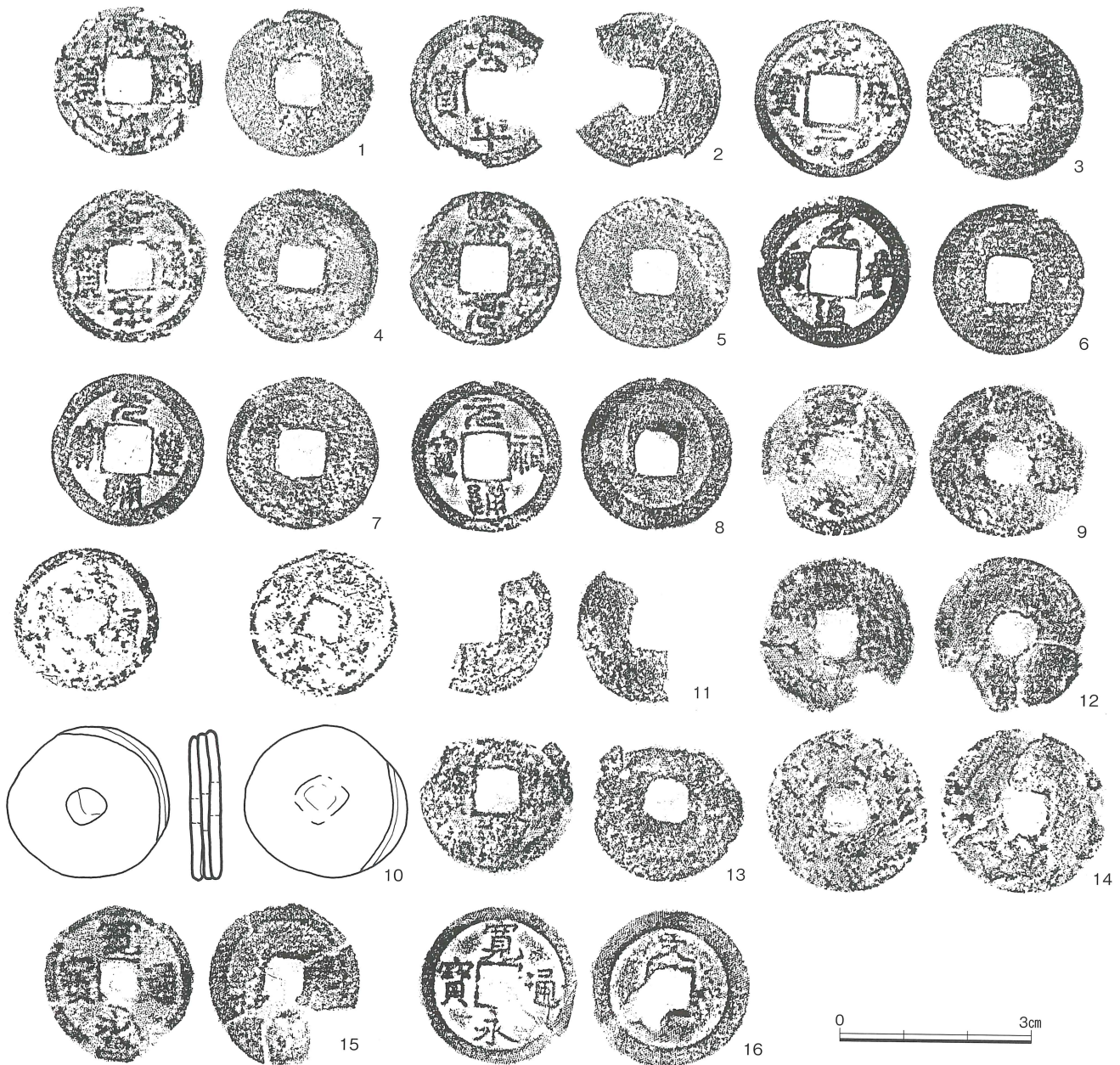


第407図 包含層・整地層出土遺物実測図④ (1/3・1/2)

(9) 包含層・整地層出土遺物 (第404～409図)

遺構に伴わない、包含層・整地層の出土遺物を以下で紹介する。第404図1～3は、中国産の褐釉陶器である。1は把手が残存する破片で、外面に褐釉を施し、内面は露胎となる。2は外面に沈線文を有し、外面に褐釉を施し、内面は露胎となる。3は底部の破片で、外面に目積みの跡が残存する資料である。4は朝鮮王朝産陶器灰青釉碗で、見込みに目積みの跡が残存する。5～6は備前焼で、5は肩部に櫛描き波状文を施す壺である。6は播鉢で、乗岡編年近世1期(16世紀末葉)の製品であろう。7は大甕の口縁部から胴部上位にかけての破片である。8～10は中国産の青釉陶器皿である。11は土師質土器耳皿で、色調や胎土は京都系土師器のそれと類似する。12～26は器壁が薄い京都系土師器皿で、塩地編年1期に比定される製品である。16世紀前葉から中葉に比定される。27は在地系の土師質土器皿で、底部外面に回転糸切り痕を有する。15世紀後葉の所産である。28は在地系のロク口目土師器皿で、15世紀末から16世紀初頭に比定される製品である。29・30は土錘である。第405図31は鞆羽口で、残存部の一端が強く被熱している。32・33は在地系の瓦質土器塀で、内外面ともに丁寧なナデを施す。34は瓦質土器火鉢の口縁部で、外面に刻印による桜花文を押捺する。16世紀末葉以降の製品である。35は在地系の瓦質土器播鉢で、内面に5条を一単位とする播目を施す。36は瓦質土器の脚部で、断面形態は略円形を呈し、外面に指頭痕やナデが認められる。足鍋などの脚部であろうか。37は丸瓦の玉縁部、38・39は平瓦の破片である。第406図40～42は、「金床石」として使用されたと推定される礫で、安山岩を素材とする。上面が平らになるように加工され、表面の一部には被熱した痕跡も認められる。これらの出土地点を遺構配置図(第349図)の中に図示しているので、参照されたい。金床石が出土した地点の周辺からは、小鍛冶の炉跡(SX188)や取瓶・羽口など鍛冶関連の遺物が出土していることが注目される。周辺の状況から、16世紀前葉から中頃に使用されたものと推定している。43～46は砂岩を素材とする砥石で、45・46は同一個体である可能性もある。47は頁岩を素材とする製品で、全面に磨研がかけられている。これも砥石であろう。第407図

金床石

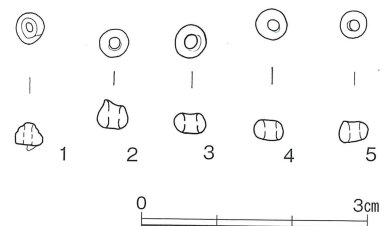


第408図 包含層・整地層出土遺物実測図⑤ (1/1)

用途不明の  
金属製品  
鍍金

48～51は金属製品で、用途不明のものである。地金は銅を素材とし、鑿彫りにより文様を施している。表面には鍍金がなされている。保存処理を施していないため、現状では文様の細部を読み取れない部分があるが、4個とも同一規格の文様を有するものである可能性がある。52・53は鞋金具で、銅を素材とする。54は銅線で、これも用途不明である。55・56は銅製の小柄である。第408図1～16は銅銭である。銭種と初鑄造年などは遺物一覧表を参照されたい。ほとんどが中国北宋代の銅銭であるが、江戸時代以降の「寛永通宝」で、「古寛永」や「文銭」に分類される資料も出土している。第409図1～5は、ガラス小玉である。

ガラス小玉



第409図 包含層・整地層出土遺物実測図⑥ (1/1)

## 3 小結

第67次C調査区で検出された遺構の変遷を再確認して、小結としたい(第410図)。

16世紀末葉～17世紀初頭 明確な遺構は、柱穴数基である。天正14年(1586)の火災処理土SK152を切って構築されたSP151からは漳州窯系青花碗と銅銭が出土している。また、埋土に量の焼土を含む柱穴2基も、当該時期に属する遺構と推定される。

16世紀末葉 「府内古図」に描かれた時期と推定される段階である。第67次C調査区は「府内古図」中に見られる「御内町」に相当する地点で、当該時期に属する遺構は町屋を構成する遺構であると推定される。まず、調査区を斜め方向に横断する形で柱穴列が2列確認されている。これらの柱穴列は「桜町」などでも認められた短冊形地割を形成する区画遺構と推定され、ふたつの柱穴列の間隔は約4mを測る。また、石列SX216は遺構の主軸方向がこれらの柱穴列の方向と直することから、町屋の裏手の区画に関する遺構である可能性がある。次に、廃棄土坑である。町屋の裏手の空間に位置しており、大型の規模をもつSK170や一般的な大きさであるSK191が掲げられる。SK152は埋土上位に多量の焼土を含んでいたことから、天正14年(1586)の島津侵攻時に関わる火災処理土坑であろう。SE221は町屋の裏手に所在する共同井戸と思われる遺構である。また、注目すべき遺構として大甕埋設遺構SX153がある。備前焼大甕1基を埋設したもので、残念ながらその機能を明らかにできなかった(便所遺構である可能性は少ない)が、やはり町屋の裏手に位置する特徴的な遺構である。御内町の領域にはこの他にも備前焼大甕1基を埋設した遺構が2基(第13次調査区SK250・SK251)認められ、今後とも注意を払っておきたい遺構である。以上のように、16世紀末葉の段階では柱穴列・石列・廃棄土坑・井戸・大甕埋設遺構などの「御内町」に関連する町屋の遺構群が確認できた。なお、16世紀後葉に限定できる明確な遺構は認められなかった。

「御内町」  
に関連する  
町屋の  
遺跡群

16世紀前葉～中葉 この段階に比定できる遺構は、土坑と鍛冶関連の遺構である。土坑の中でSK183・SK207・SK208は京都系土師器が主体的に出土する「カワラケ廃棄遺構」である。この遺構の存在から、第67次調査C調査区は武家の屋敷空間で、何らかの儀礼空間として使用されたことを想定した。このことについては、第5節の「小結」の項でも詳述したので、参照された。SX188は小鍛冶の炉跡で、武家の屋敷空間で小鍛冶による生産が行われてたことを物語る遺構であろう。また、L22・L23区で出土した金床石と推定される礫も、小鍛冶生産に関連した遺物である可能性が考えられる。

武家の  
屋敷空間

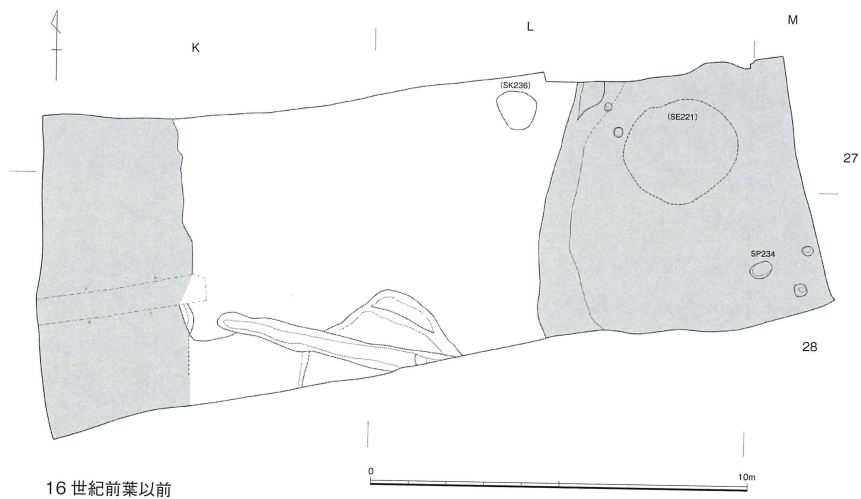
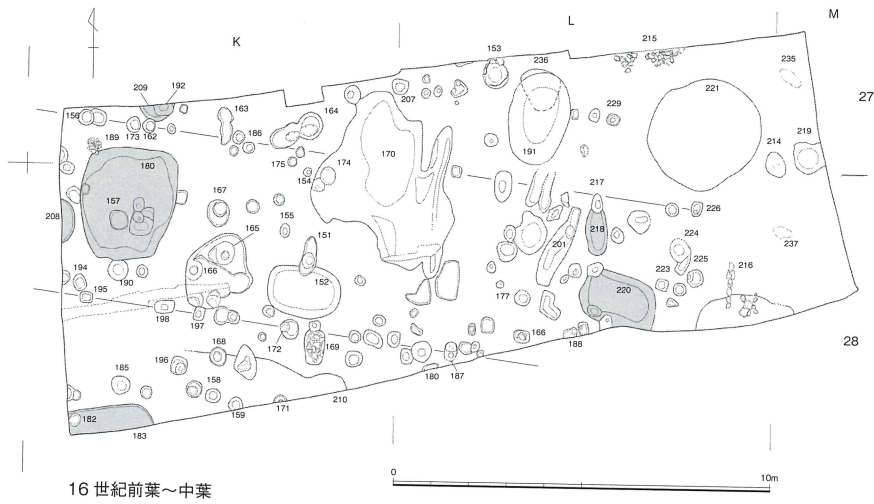
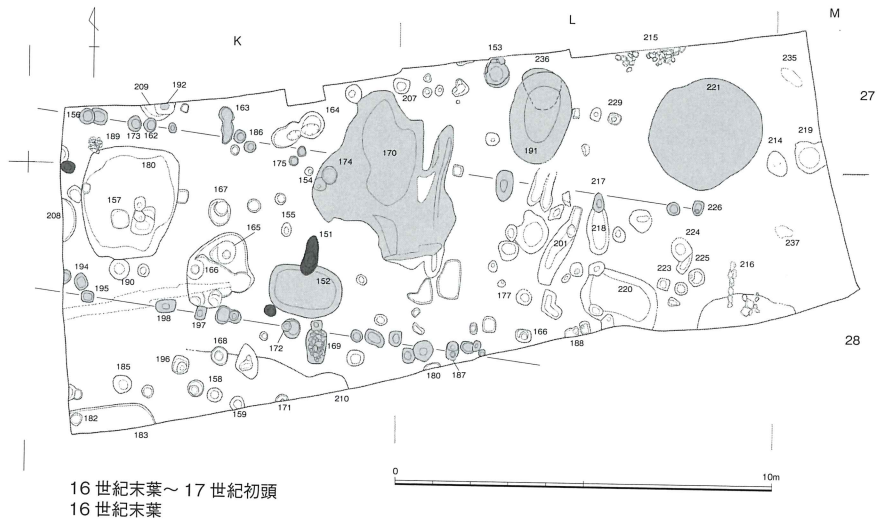
16世紀前葉以前 下層遺構として把握しているSX200・SX201が、この段階に位置づけられる、第67次C調査区は現在使用されている国道や鉄道と隣接した場所に位置する調査区であり、地盤が軟弱であることや調査区が雨期に当たったことなどから、これらの遺構の掘り下げを進めると調査壁面の崩壊等の事故が生ずることが予測されたため、遺構の完掘を行わなかった。

K27・K28区に位置するSX200は溝などの遺構である可能性が考えられ、上面に16世紀前葉ら中葉に比定される遺構が構築されていることから、16世紀前葉以前の所産と推定される。

大規模な  
落ち込み  
遺構

LM27・LM28区に位置するSX201は東に向かって傾斜する大規模な落ち込み遺構で、土取り遺構であった可能性も考えられる。遺構埋土は斜堆積の土層群で構成され、掘削と埋め戻しが何度も繰り返されているようである。埋没の過程で、15世紀末から16世紀中葉にかけての土師質土器が一括廃棄された遺構(SX213・SX235・SX237)なども確認されており、16世紀末葉にはほぼ完全に埋め戻されている。なお、同様な状況が第67次C調査区の南約5mに位置する第40次調査でも認められている<sup>(2)</sup>。第40次調査区の場合は落ち込み遺構が埋没する過程で、多量の京都土師器(塩地編年1基)やロクロ目土師器が廃棄された状況が確認されており、第67次調査区同様、周辺で何らかの儀礼が行われたことが想定されている。

第6節 中世大友府内町跡第67次調査C区



第410図 遺構の変遷 (1/200)

註(2) 大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内10 大分駅付近立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(6)』  
(大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告第26集 2008年)



第7節 中世大友府内町跡第78次調査

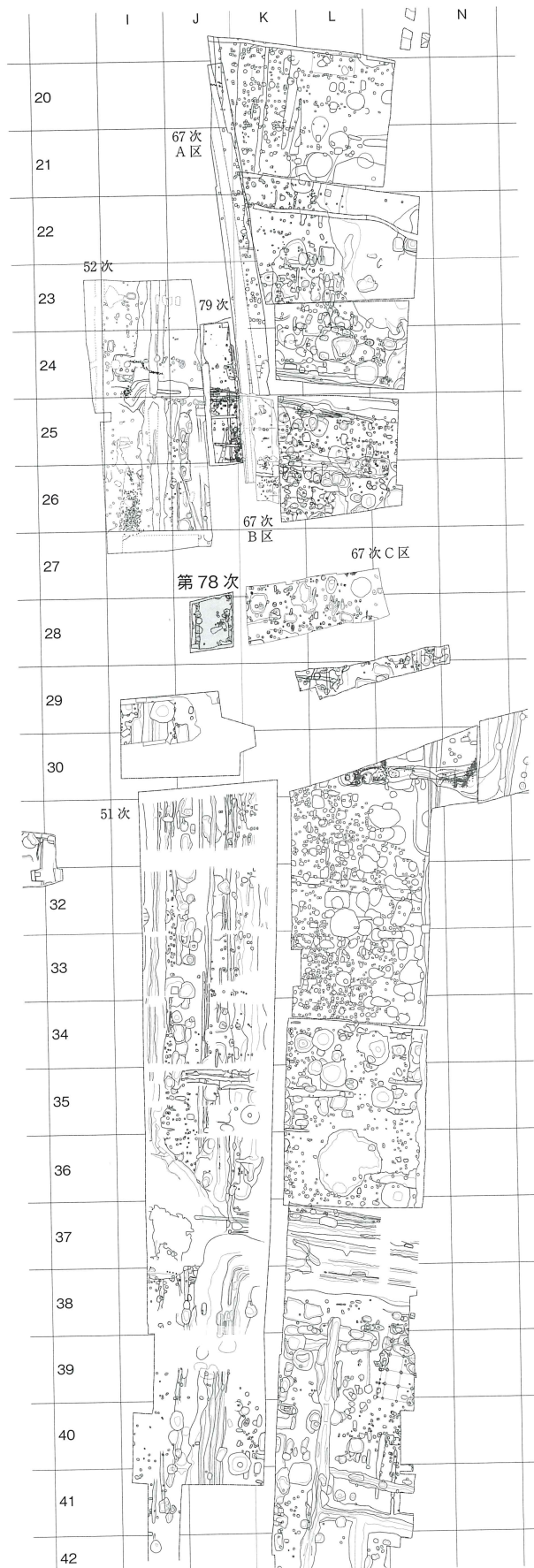
1 調査の概要

中世大友府内町跡第78次調査区は大分県大分市元町に所在し、標高約4.5mの沖積低地上に立地する。中世大友府内町跡は、大分県教育委員会が1993年に刊行した『大分県遺跡地図』において「中世大友城下町跡」の名称で登録されていた周知遺跡である。『大分県遺跡地図』は2008年に増補改訂版が刊行され、遺跡名が「中世大友城下町跡」から「中世大友府内町跡」に改称されている。また、1987年に大分市史編さん委員会が作成した「戦国時代の府内復元想定図」によると、当該調査区は大友氏館跡の南東側付近あるいは豊後府内のメインストリートである第2南北街路付近に相当することが推定された。

本節で報告する第78次調査については、一般国道10号古国府拡幅事業に伴って国土交通省大分河川国道事務所からの委託を受け、2007年（平成19年）6月13日～8月30日までの約3箇月間発掘調査を行った。調査区の平面形態は略台形を呈し、南北約7m、東西約6mを測る。調査面積は約43㎡である。本調査区とほぼ同じ時期に同一事業、同一事業主体による第79次・第80次調査の発掘調査が併行して実施されている。また、本調査区の北約9mの地点には2005年度（平成17年度）に発掘調査が実施された第52次調査区、南約6mの地点には同じく2005年度に発掘調査が実施された第51次調査区、東側約2.5mの地点には2006年度（平成18年度）に発掘調査が実施された第67次調査区が位置している（第411図）。また、発掘調査に当たっては、重機等の手配・発掘作業員の雇用や労務管理・実測や写真撮影など発掘調査に伴う諸記録の作成・安全管理などの発掘支援業務を株式会社国際航業に委託した。

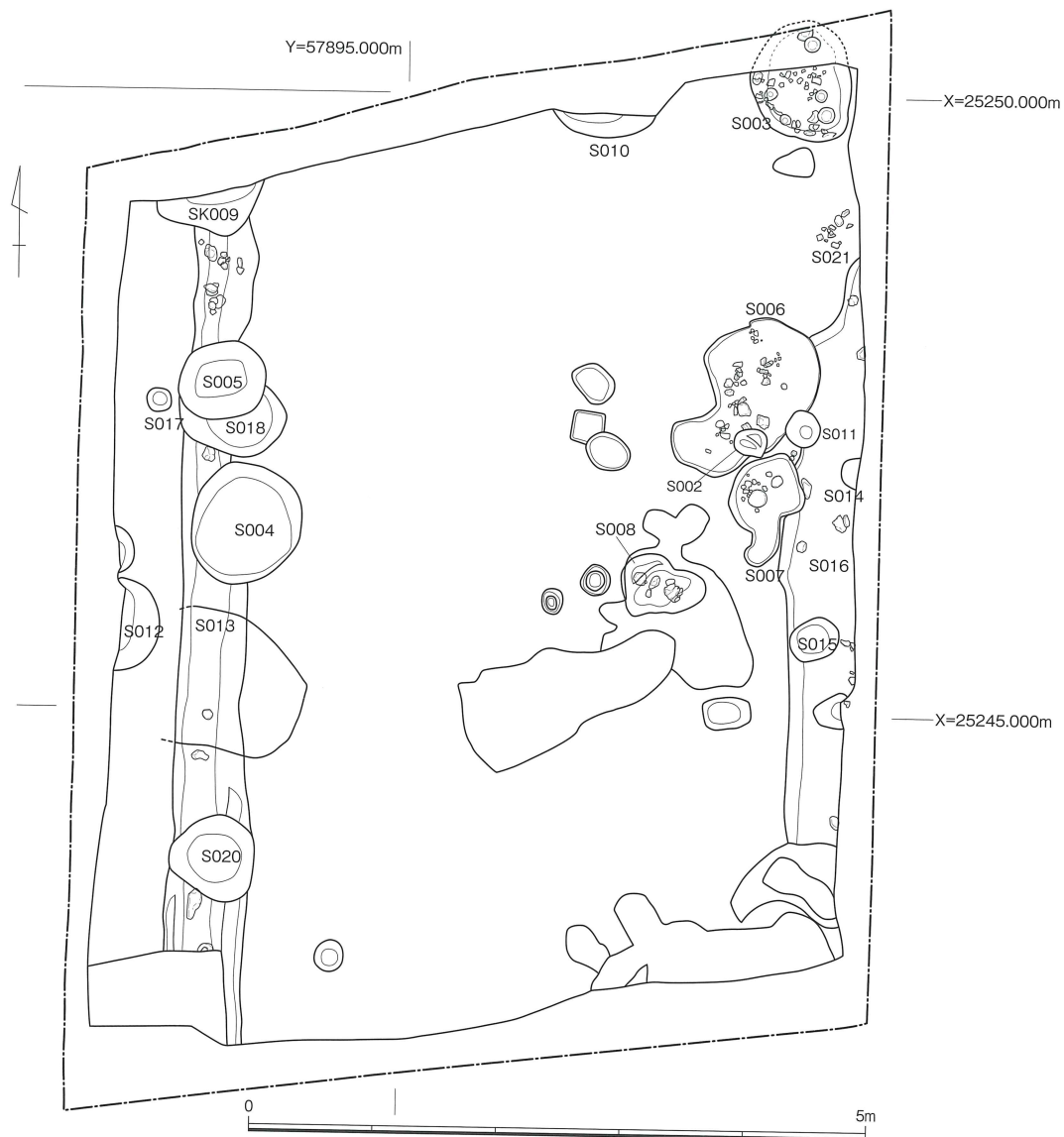
調査期間  
2007年  
(平成19年)  
6月13日～  
8月30日

調査面積  
約43㎡



第411図 調査区位置図(1/1,000)

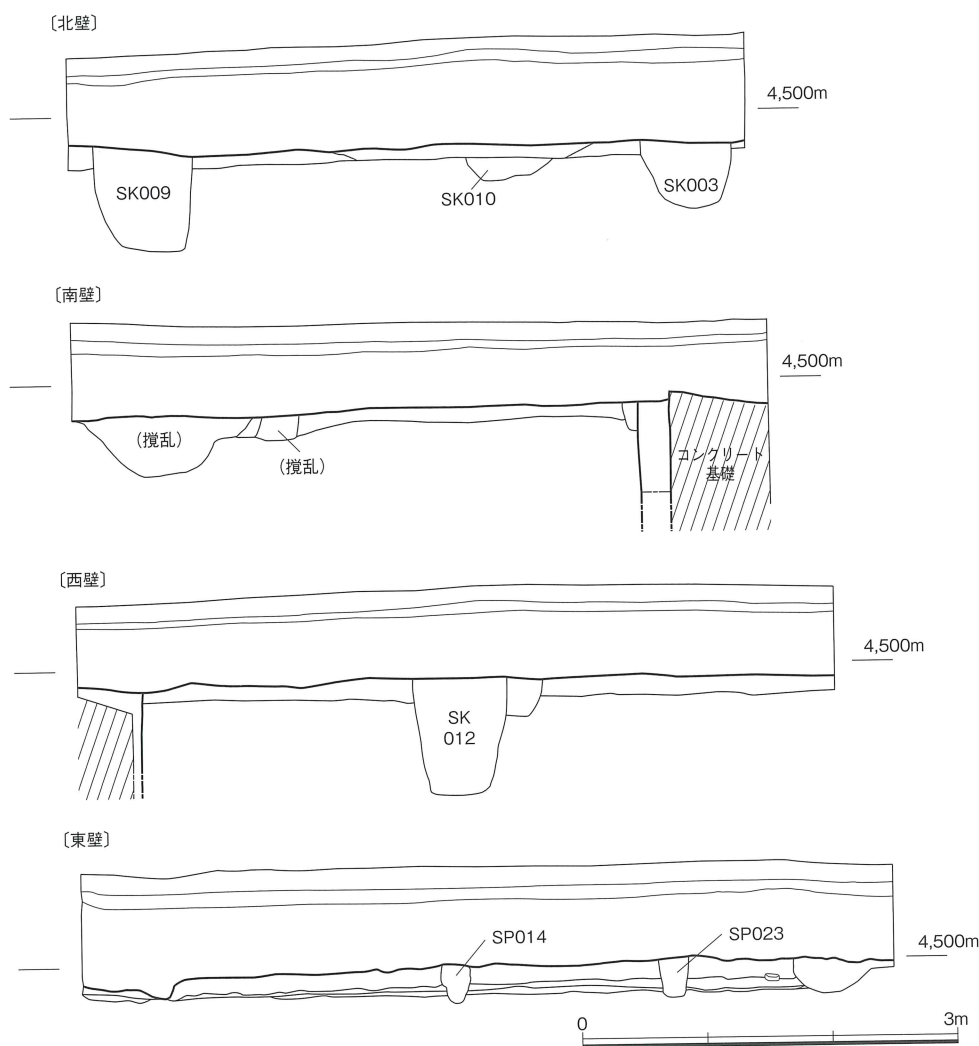
第7節 中世大友府内町跡第78次調査



第412図 第78次調査区遺構配置図(1/60)

第14表 中世大友府内町跡第78次調査遺構一覧表

遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SF001	S001	道路	J-28	16世紀末葉	第2南北街路	358
SP002	S002	柱穴	J-28	16世紀末葉～17世紀初頭	第2南北街路を切って形成。焼土を含む	357
SK003	S003	土坑	J-28	16世紀前葉～中葉	京都系土師器大量出土	355
SK004	S004	土坑	J-28	不明	14世紀の溝を切る。	356
SK005	S005	土坑	J-28	不明	京都系土師器小片と瓦質土器土鍋小片が出土	356
SX006	S006	炉跡関連遺構	J-28	16世紀前葉～中葉	フイゴ出土	356
SX007	S007	炉跡関連遺構	J-28	16世紀前葉～中葉		357
SX008	S008	炉跡関連遺構	J-28	16世紀前葉～中葉	鉄滓出土	357
SK009	S009	土坑	J-28	不明		356
SK010	S010	土坑	J-28	不明		356
SP011	S011	柱穴	J-28	不明		356
SK012	S012	土坑	J-28	不明		356
SD013	S013	溝	J-28	14世紀		354
SP014	S014	柱穴	J-28	不明		
SP015	S015	柱穴	J-28	不明		
SX016	S016	整地層	J-28	不明		
SP017	S017	柱穴	J-28	不明		
SK018	S018	土坑	J-28	不明		356
SX019	S019	整地層	J-28	不明		
SK020	S020	土坑	J-28	不明		356
SX021	S021	土器溜り	J-28	14世紀?	京都系土師器の小片が数点混ざる(混入?)	357
SK022	S022	土坑	J-28	不明		
SP023	S023	柱穴	J-28	不明		



第 413 図 調査区土層実測図 (1/60)

## 2 遺構と遺物

### (1) 遺構の概要と基本層列

一般国道10号古国府拡幅事業に伴う発掘調査では、事業対象地区を国土座標(旧日本測地系)に乗せた10m方眼で区画している。第78次調査区は調査面積が狭小であるため、調査区のほとんどがJ28区に属し、調査区北東隅付近がJ27区に位置している。

本調査区で検出された遺構は、14世紀代から17世紀初頭に比定され、溝1・土坑8・炉跡関連遺構3・柱穴6・土器溜め1・道路遺構(第2南北街路)1・その他の遺構2の計23基を数える(第412図)。本調査区では最も上位で検出されるべき遺構である第2南北街路SF001が、近年の造成工事によって大きく削平を受けていた。SF001はすべての調査区壁面に街路形成土が認められたものの、残存状況は不良で、南壁土層のみに街路下位の硬化面と砂質土・粘質土の互層がわずかに残存していた。このような状況は調査開始直後の表土剥ぎの段階で確認されたため、発掘調査は街路形成土の撤去を急ぎ、地山直上で検出された遺構群の精査に時間を費やすことにした。

近年の  
造成工事による削平

基本層序

本調査区の基本層序は、下記の通りである(第413図)。表土下にはアスファルトと砂利層および近年の造成土が堆積していた。造成土の下位には、街路形成土や16世紀代以前の整地層が10~20cm前後堆積する。街路形成土の下位は地山で、14世紀代から16世紀中葉までの遺構面となる。以下、代表的な遺構についての詳細を報告する。

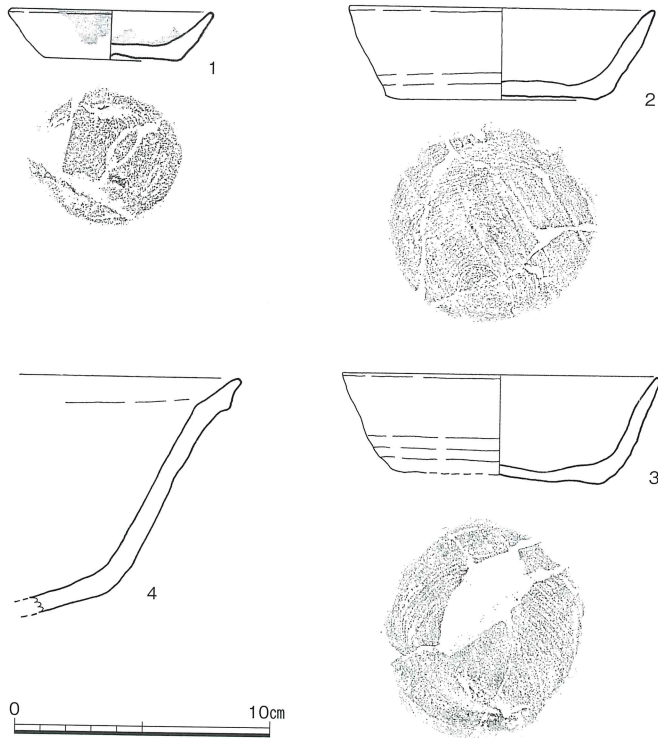
(2) 溝

SD013 (第415図) 調査区西側を南北方向に縦断する溝で、断面形態は逆台形を呈する。その規模は延長6.9m、幅0.6m、深さ0.7mである。土坑5基(SK004・SK005・SK009・SK018・SK020)と切り合い関係を有し、すべての土坑から切られている。溝の主軸は正南北方向で、何らかの区画を示す溝であると推定されるが、その詳しい性格は不明である。当該遺構は調査区外に伸びるが、約9m北に位置する第52次調査区、および約6m南に位置する第51次調査区では延長部が確認されていないため、最大に見積もっても当該溝の総延長は20m以下に留まることが判明する。溝の北側の埋土上部より、土師質土器の坏や小皿がややまとまって出土した。出土遺物の年代観から、14世紀代の遺構と推定される。

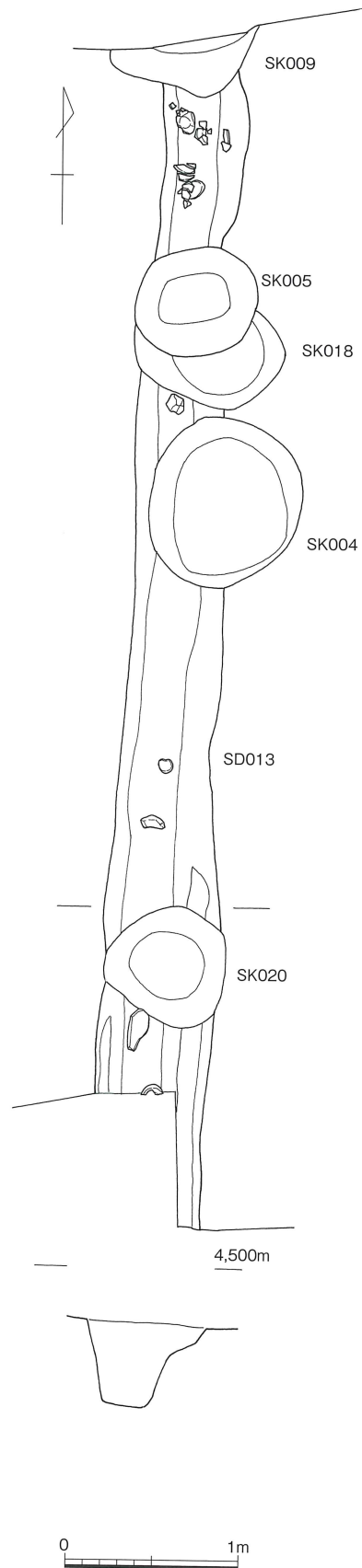
溝SD013は第51次・第52次調査区まで伸びない

SD013出土遺物(第414図) 1は土師質土器小皿で、口縁部外面と底部内面付近にススの付着が認められる。2・3は土師質土器坏で、底部外面に右回転糸切り痕が認められる。4は瓦質土器土鍋の口縁部から胴部にかけての破片である。1～4は量的には僅少であるが、14世紀代の良好な一括資料と考えられる。

14世紀代の一括資料



第414図 SD013出土遺物実測図(1/3)

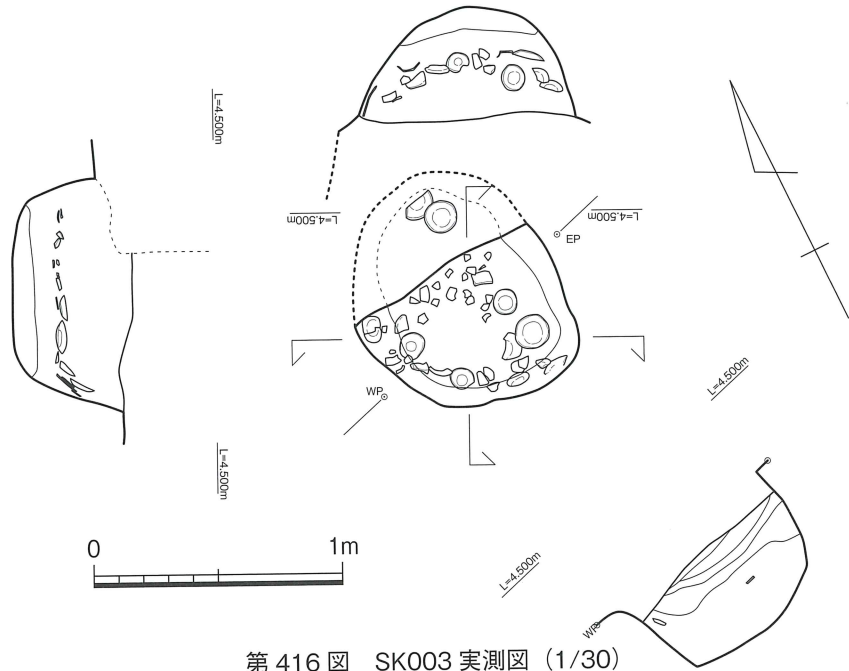


第415図 SD013実測図(1/40)

(3) 土坑

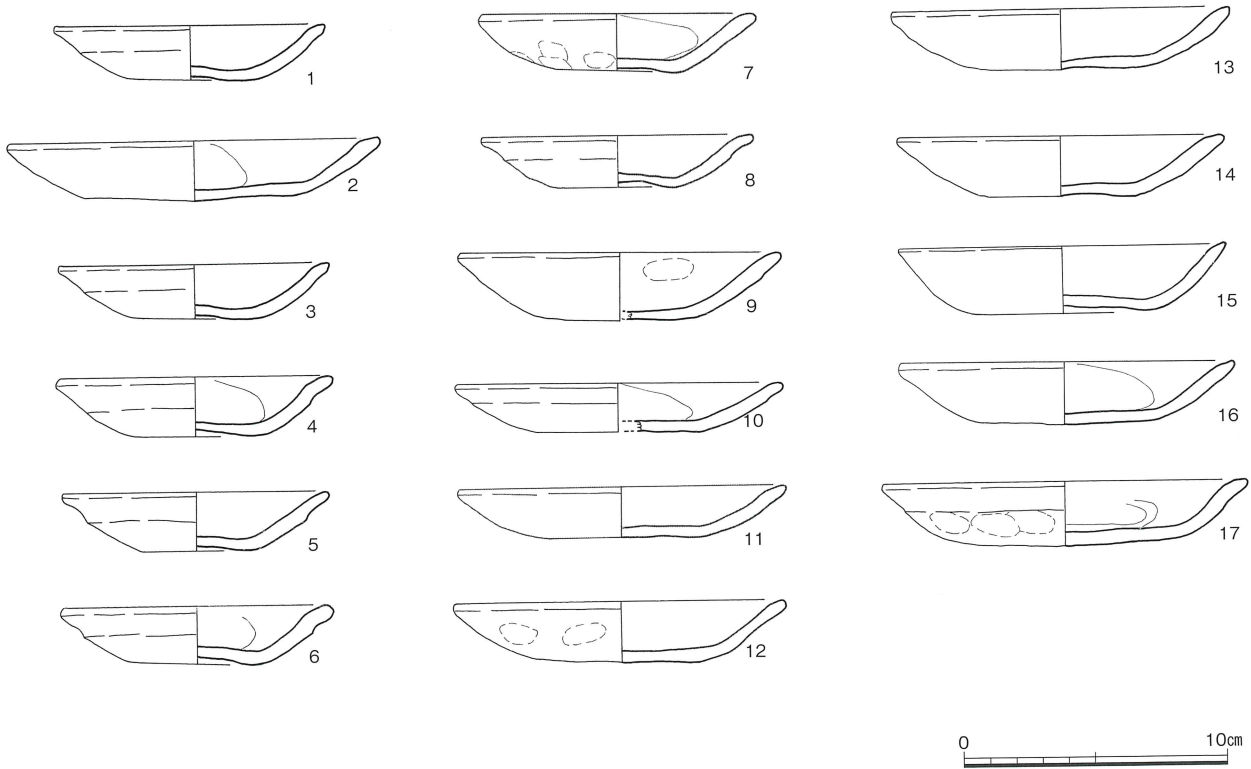
SK003(第416  
図) 調査区北東  
隅に位置する土  
坑である。掘り  
下げ中に遺構埋  
土から京都系土  
師器皿が多量に  
出土し、重要な  
遺構であること  
が想定されたこ  
とから、調査区  
北壁を横方向に  
掘り進め、遺構  
全体の規模を確

京都系土師  
器皿が多量  
に出土



第416図 SK003 実測図 (1/30)

認した。遺構の平面形態は不整円形を呈し、その規模は長径1.0m、短径0.8m、深さ0.5mである。遺構内部からは多量の京都系土師器皿が出土し、一部は遺構の壁面に貼り付くような特異な状況で出土した。同様な遺構は第67次C調査区SK208でも確認されている。出土した京都系土師器の年代観から、遺構の所産時期は16世紀前葉から中葉に比定される。



第417図 SK003 出土遺物実測図 (1/3)

SK003出土遺物（第417図） SK003から出土した多量の京都系土師器皿のうち、残存状況がよいものを図示した。いずれも器壁の厚みが5mm以下と薄く、塩地編年1期に比定される遺物である。16世紀前葉から中葉の所産である。

SK004 調査区東側に位置する土坑である。14世紀代の溝SD013と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSD013→SK004となる。遺構の平面形態は略円形を呈し、その規模は径約0.9m、深さ0.5mである。出土遺物は僅少で、図化可能なものは認められなかった。遺構の詳細な構築時期は不明である。

SK005 調査区東側に位置する土坑である。14世紀代の溝SD013および時期不明の土坑SK018と切り合い関係を有し、これらの遺構をすべて切っている。遺構の平面形態は楕円形を呈し、その規模は長径0.7m、短径0.6m、深さ0.5mである。出土遺物には京都系土師器小片と瓦質土器鍋小片などが認められるが、図示可能な大きさではない。遺構の年代は16世紀前葉以降に比定されるが、詳細な構築年代は不詳である。

SK009 調査区北西隅に位置する土坑である。14世紀代の溝SD013を切って構築されている。遺構の南側を検出できたのみで、北側は調査区外に伸びる。現状での遺構の規模は東西0.8m、南北0.3m、深さ0.5mを測る。出土遺物はなく、詳細な構築年代は不明である。

SK010 調査区北側に位置する土坑である。遺構の南側を検出し、北側は調査区外に伸びる。現状での遺構の規模は東西0.8m、南北0.2m、深さ0.5mである。出土遺物はなく、詳細な構築年代は不明である。

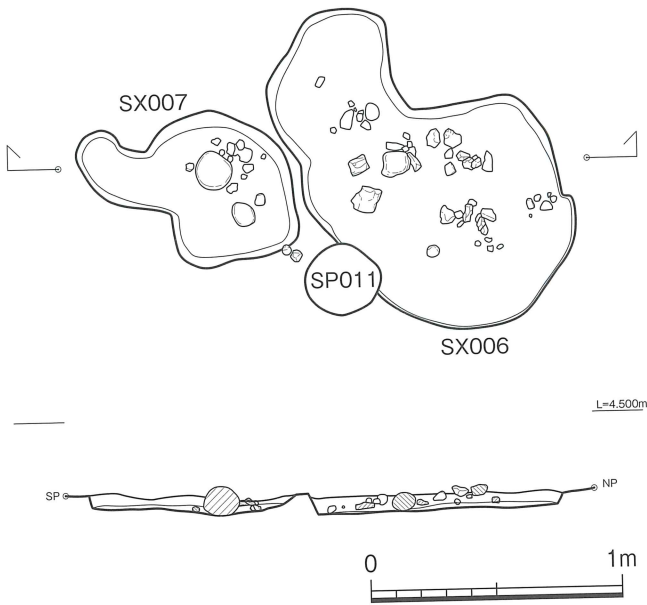
SK012 調査区西側中央に位置する土坑である。遺構の東側を検出し、西側は調査区外に伸びる。現状での遺構の規模は南北0.8m、東西0.3m、深さ0.5mである。出土遺物はなく、詳細な構築年代は不明である。

SK018 調査区北西側中央に位置する土坑である。14世紀代の溝SD013、16世紀代の土坑SK005と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSD013→SK018→SK005となる。遺構の平面形態は略楕円形で、その規模は長径0.8m、短径0.6m、深さ0.5mである。出土遺物はなく、詳細な構築年代は不明である。

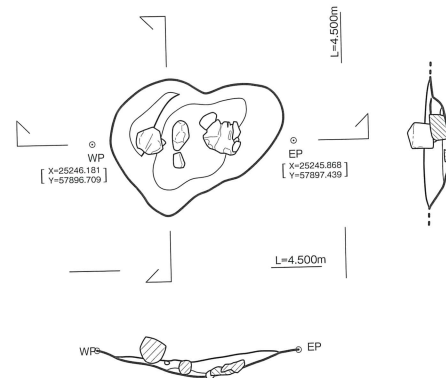
SK020 調査区南西側に位置する土坑である。14世紀代の溝SD013を切って構築されている。遺構の平面形態は略円形で、その規模は径0.7m、深さ0.5mである。出土遺物はなく、詳細な構築年代は不明である。

#### (4) 炉跡関連遺構

FX006（第418図） 調査区北東側に位置する遺構である。平面形態は不整形で南北1.4m、東西1.0mを測り、深さ約10cmの浅い掘り込みを有する。16世紀後葉と推定される柱穴SP011と切り合い関係を有し、切り合い関係はFX006→SP011となる。内部から被熱した礫が少量出土した。また、小片のため図示できていないが、ファイゴの羽口の破片が出土している。ファイゴ羽口の出土から、鍛冶関係の廃棄土坑と推定される。時期を特定できる出土遺物はないが、南東側約10mの地点(第67次調査C区)



第418図 SX006・SX007 実測図 (1/30)



第419図 SX008 実測図 (1/30)

で16世紀前葉から中葉に比定される小鍛冶の炉跡が検出されていることから、SX006の所産時期も16世紀前葉から中葉と推定しておきたい。

小鍛冶の  
炉跡の  
可能性

SX007 (第418図) 調査区北東側に位置する遺構で、炉跡関連遺構SX006の南側に隣接する。平面形態は不整形で南北0.9m、東西0.5mを測り、深さ約10cmの浅い掘り込みを有する。床面が被熱しており、内部から礫が少量出土している。小鍛冶の炉跡であった可能性が考えられるが、遺構の残存状況が悪く、断定できない。出土遺物はないが、周辺の状況から16世紀前葉から中葉の遺構と推定される。

SX008(第419図) 調査区中央東側に位置する遺構である。平面形態は不整形で長径0.7m、東西0.5mを測り、深さ約10cmの浅い掘り込みを有する。内部から被熱した礫が少量出土している。周囲に小鍛冶の炉跡の可能性が考えられる遺構が存在することから、鍛冶関係の廃棄土坑と推定される。出土遺物は認められない。周辺の状況から16世紀前葉から中葉の遺構と推定される。

#### (5) 柱穴

第78次調査区で検出された柱穴は6基を数えるが、いずれも出土遺物が少なく、詳細な時期を特定できるものは少ない。このうち、SP002は埋土中に焼土を多く含むことから16世紀末葉から17世紀初頭に比定される。SP002は周辺調査区の状況から、明らかに第2南北街路を切って構築された柱穴のひとつと推定される。また、SP011は16世紀前葉から中葉と推定される炉跡関連遺構を切って構築されていることから、16世紀後葉以降の所産と考えられる。

#### (6) 土器溜め

SX021 調査区北東隅付近に位置する小規模な土器溜め遺構で、南北約0.3m、東西約0.35mの範囲に土器片が分布していた。土器片の大半は箱形の土師質土器で構成されているが、少量の京都系土

師器小片が混入している。出土土器片については、図示できるようなものは認められなかった。遺構の性格は不明であり、当該遺構が意図的・人為的に形成されたものかどうかについても判断が難しい。当該遺構が人為的なものであることを仮定するとして、形成時期の根拠を箱形の土師質土器に求めるか、京都系土師器に求めるか悩ましいところであるが、取りあえずここでは前者の箱形の土師質土器を重視し、遺構の所産時期を14世紀代に比定しておきたい。

### (7) 第2南北街路

SF001 第78次調査区は第2南北街路が構築されていた位置に相当し、本来調査区全面にわたって街路を形成する砂質土と粘質土の互層が検出されるべき地点であった。ところが近年の削平により、街路形成土は下位の硬化面と砂質土・粘質土等の互層がわずかに残存しているのみであった。当該調査区における街路形成土からの出土遺物については、図示できるような良好なものはない。他の調査地点の成果から、第2南北街路の構築時期は16世紀末葉頃と想定されているため、SF001の所産年代も当該時期に比定しておきたい。

## 3 小結

第78次調査区は面積約42㎡と狭小な調査区であるが、検出された遺構の変遷を再確認して、小結としたい(第420図)。

14世紀 14世紀に比定される遺構は溝SD013である。溝の主軸方向はほぼ正南北で、延長部は調査区外に伸びるものの、約9m北に位置する第52次調査区、および約6m南に位置する第51次調査区では延長部が確認されていない。従って、当該遺構は最大限に見積もっても総延長は20mに満たないことになり、その幅も0.6mであることから、大型とはいえない溝となる。埋土上位からは土師質土器が、数量は少ないものの、良好な状態で出土している。何らかの区画遺構と推定されるが、現状ではその詳細な性格を明らかにすることはできていない。しかしながら、当該遺構の年代が大友氏の関連遺跡を構成する遺構群の中では古い段階に比定されることや16世紀代の大友氏館跡東限と想定されている地点に近い場所に位置していることから、小型の溝でありながら、重要な役割を担った遺構である可能性も考えられる。今後、周辺の調査の動向を見守りながら、再検討を加えるべき遺構であると考えられる。

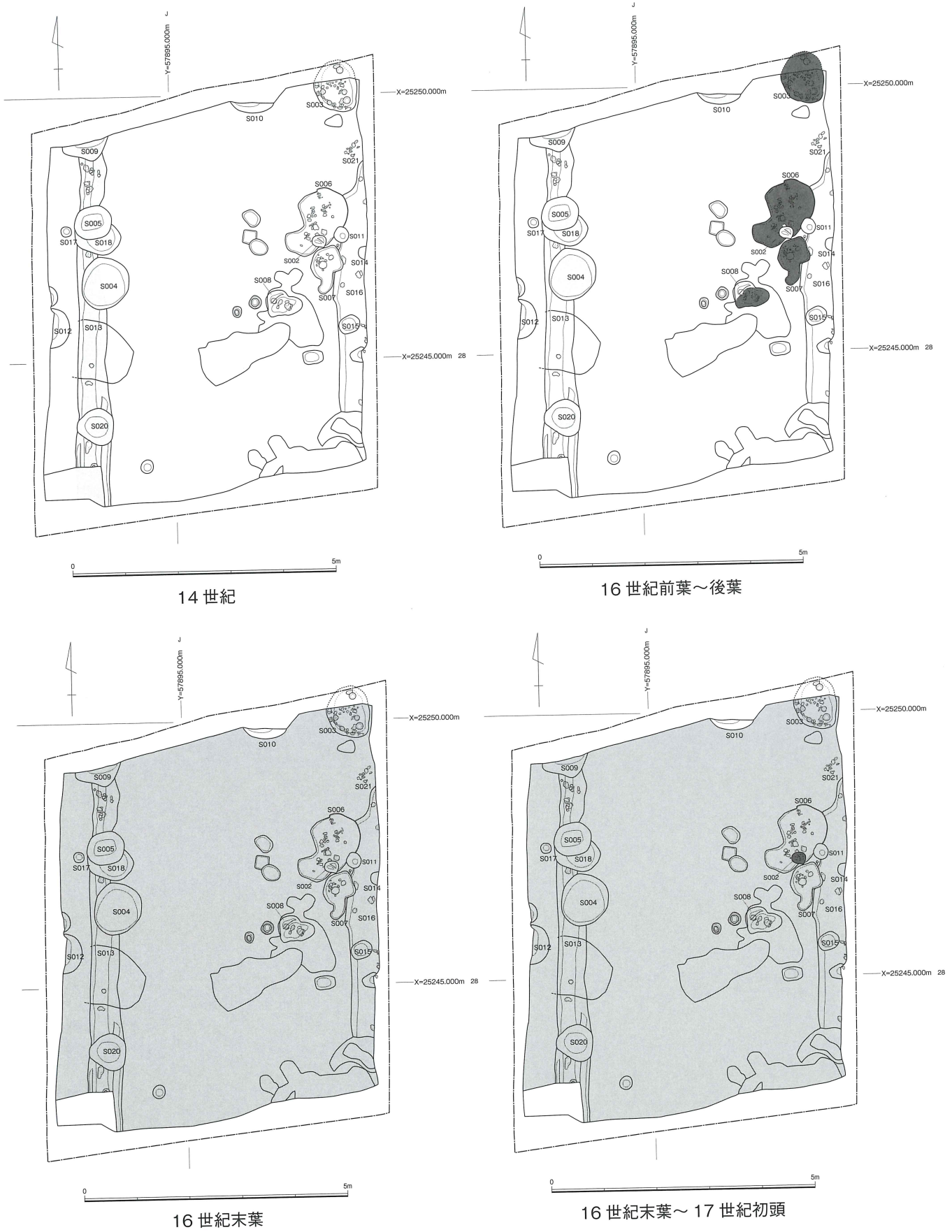
16世紀前葉～後葉 16世紀前葉から後葉に比定される遺構は土坑9基、炉跡関連遺構3基である。このうち土坑1基(SK003)と炉跡関連遺構3基(SX006～008)は、出土遺物や周辺の遺構の状況から、遺構の構築年代が16世紀前葉から中葉に限定できる遺構である。SK003からは多量の京都系土師器皿が出土しており、その一部は遺構の壁面に貼り付くような特異な出土状況を呈していた。出土した京都系土師器は、器壁の厚みが5mm前後となる塩地編年1期ものである。当該土坑と同時期の土坑は北側の第52次調査区で5基、西側の第67次C調査区で3基が検出されており、さらに第67次C調査区SK207・SK208は京都系土師器皿の出土状況も酷似した土坑であった。また、炉跡関連遺構についても西側の第67次C調査区で小鍛冶の炉跡SX188が検出されており、関連性が注目される。以上のように、16世紀前葉から中葉段階の遺構群は、京都系土師器1期の土師器皿が出土する土坑と鍛冶関連遺構で構成されることが判明する。この段階では、周辺の調査区で同時期の土坑やL字状に屈曲する堀<sup>(1)</sup>なども検出されており、第78次調査区周辺は町屋ではなく、屋敷(武家屋敷?)の空間として利用されていたことが推測される。つまり、京都系土師器の出土土坑、すなわち「土器=かわらけ」の多量・大量出土は武家屋敷としての利用空間であることを象徴しており、また炉跡関連遺構は屋敷内で小鍛冶による鉄製品等の生産がなされていたことを物語っていると解釈される。

区画遺構と推定される溝

土坑・鍛冶関連遺構

屋敷(武家屋敷?)の空間





第420図 第78次調査遺構変遷図(1/100)

## 第7節 中世大友府内町跡第78次調査

その他の土坑7基（SK004・SK005・SK009・SK010・SK012・SK018・SK020）については出土遺物が僅少で、遺構の詳細な年代を特定できない。しかしながら、14世紀代の溝SD013を切って構築されているものや少量の出土遺物の中に京都系土師器の小片が認められるものがあることから、大半の遺構が16世紀前葉から後葉の時間幅の中に帰属するものと推定される。

第2南北  
街路の構築

**16世紀末葉** 16世紀末葉になると第2南北街路SF001が構築される。第78次調査区ではSF001を構成する街路形成土が、近年の造成工事で大きく削平を受けており、第2南北街路の構築時期を検証するような良好な出土遺物は認められなかった。しかしながら、街路形成以前の遺構群は地山検出面で確認されており、SF001は14世紀代の溝や16世紀前葉から後葉の土坑などをすべてパックした状態で構築されたものと推定される。街路形成土の削平により、側溝などの附属施設も確認することができていない。

焼土を  
含む柱穴

**16世紀末葉～17世紀初頭** 他の調査区の所見から、この段階についても第2南北街路SF001の使用は継続していると考えられる。また、柱穴SP002は埋土中に多くの焼土を含むことから、天正14年（1586）の島津侵攻後に構築された遺構と考えられる。SP002は第67次調査C区で検出された柱穴列の延長方向に位置しており、これらの遺構を構成する柱穴群とともに街路上に張り出した町屋の区画遺構の一部と推定される。

屋敷から  
街路へ

以上、第78次調査の遺構については、「14世紀」・「16世紀前葉～後葉」・「16世紀末葉」・「16世紀末葉～17世紀初頭」の4段階の変遷が確認できた。「16世紀前葉～後葉」と「16世紀末葉」の間に大きな画期があり、調査区周辺の空間利用が屋敷（武家屋敷？）から街路（第2南北街路）へと大きく変遷する。このことは前章で第3節で触れた第52次調査と同様な変遷が確認できたこととなる。また、これも第52次調査区と同様に、15世紀代に比定される遺構についても皆無であったことを付記しておきたい。

註 (1) 京都系土師器皿を大量に廃棄した土坑については第67次調査C区SK183、L字状に屈曲する堀については第9次調査区I・IV区SD01および第67次調査B区SD078、が相当する。なお、第9次調査区I・IV区SD01については、下記文献を参照されたい。  
大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内2』（大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第2集 2005年）

第8節 中世大友府内町跡第79次調査

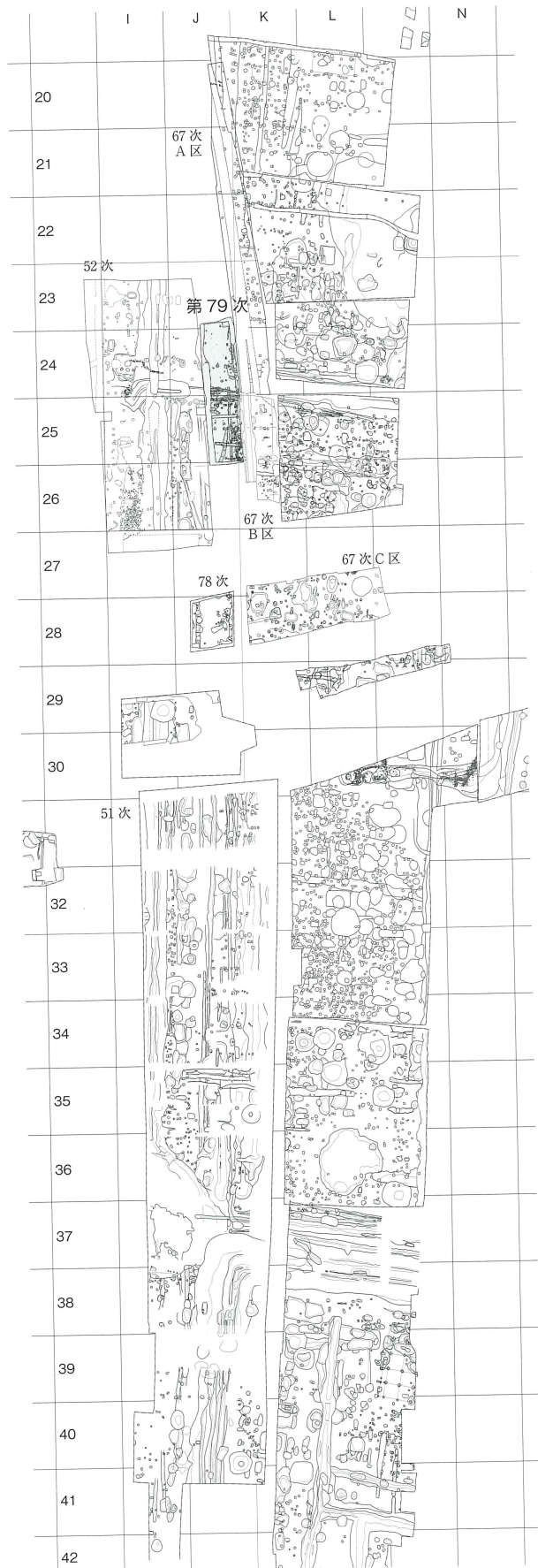
1 調査の概要

中世大友府内町跡第79次調査区は大分県大分市元町に所在し、標高約4.5mの沖積低地上に立地する。中世大友府内町跡は、大分県教育委員会が1993年に刊行した『大分県遺跡地図』において「中世大友城下町跡」の名称で登録されていた周知遺跡である。また、1987年に大分市史編さん委員会が作成した「戦国時代の府内復元想定図」によると、当該調査区は大友府内町跡のメインストリートである「第2南北街路」に相当し、その中でも大友氏館跡の正門に至る東西道路である「御所小路」との交差点付近に位置することが想定されていた。

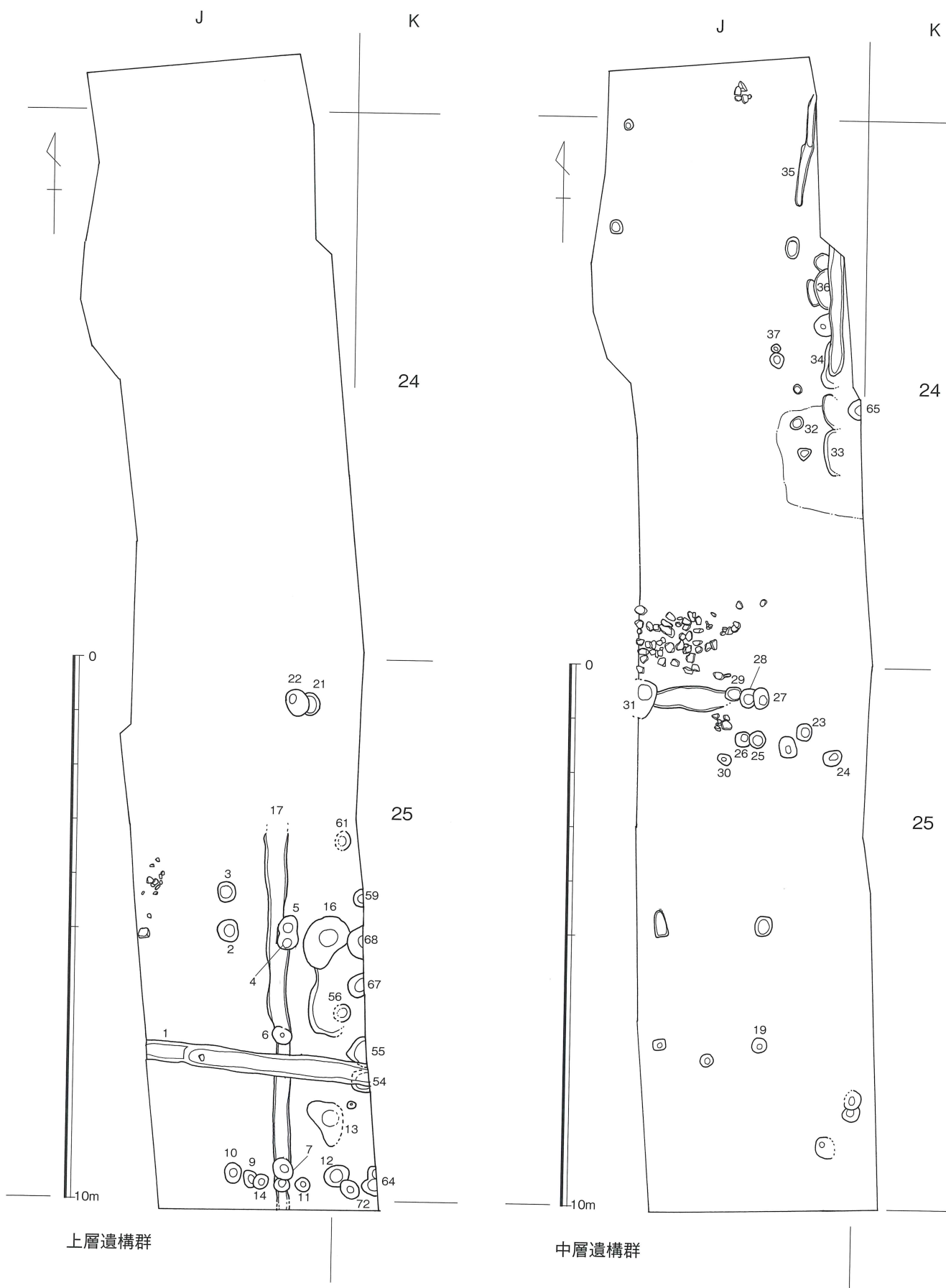
本節で報告する第79次調査については、一般国道10号古国府拡幅事業に伴い国土交通省大分河川国道事務所からの委託を受け、2007年（平成19年）6月13日～8月30日までの約3箇月日間発掘調査を行った。調査区の平面形態は長方形を呈し、南北約16.8m、東西約3.6mを測る。調査面積は約60m<sup>2</sup>である。本調査区とほぼ同じ時期に同一事業、同一事業主体による第78次・第80次調査が併行して実施されている。また、本調査区の西に隣接して2005年度（平成17年度）に発掘調査を実施した第52次調査区、東に隣接して2006年度（平成18年度）に発掘調査を実施した67次調査区が位置している（第421図）。また、発掘調査に当たっては、重機等の手配・発掘作業員の雇用や労務管理・実測や写真撮影など発掘調査に伴う諸記録の作成・安全管理などの発掘支援業務を株式会社国際航業に委託した。

調査期間  
2007年  
(平成19年)  
6月13日～  
8月30日

調査面積  
約60m<sup>2</sup>



第421図 調査区位置図(1/1,000)



第422図 第79次調査区遺構配置図① (1/100)

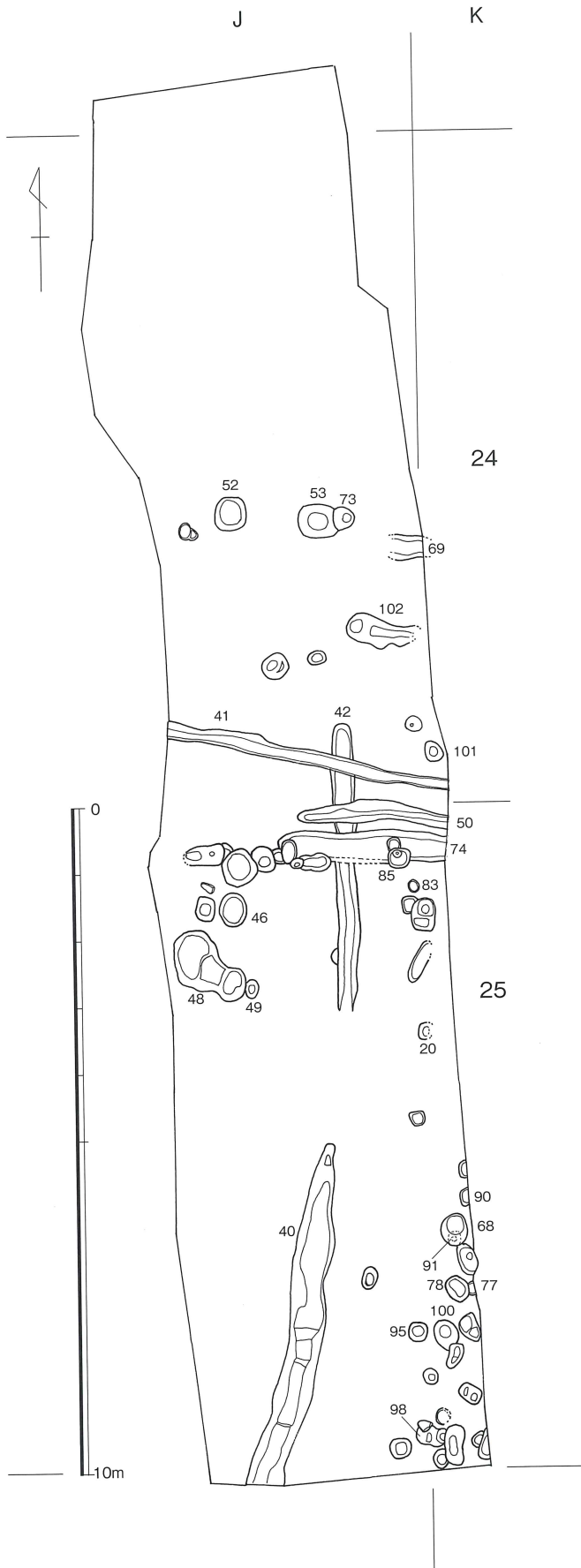
2 遺構と遺物

(1) 遺構の概要と基本層列

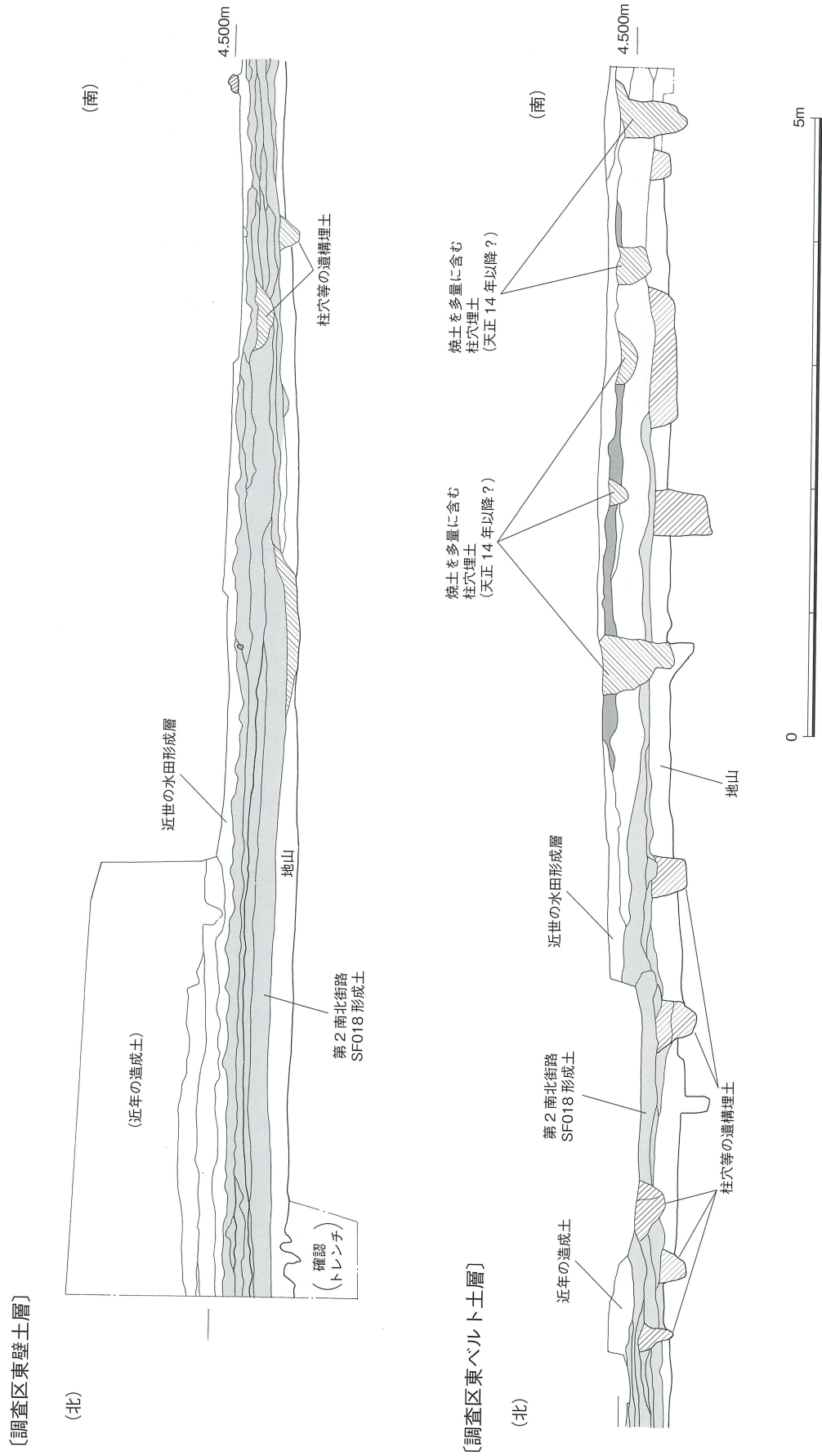
一般国道10号古国府拡幅事業に伴う発掘調査では、事業対象地区を国土座標（旧日本測地系）に乗せた10m方眼で区画している。それぞれの区画には西から東へJ～M、北から南へ1～78の番号を付し、アルファベットと数字の組み合わせで、各々の区画を呼称することになっている。本節で報告する第79次調査区はJ23区からJ25区に位置しており、調査区のほとんどがJ24・J25区に属し、調査区北端部付近のみがJ23区に位置している。

本調査区は過去に実施していた周辺の発掘調査から、調査区全体が第2南北街路であることが想定されていた。表土下には近年の工事による造成土が80～100cmほど認められ、その下位に近世の水田層が堆積している。近世の水田層を除去すると、中世府内のメインストリートである第2南北街路の形成層群（粘質土と砂質土の互層）が現われる。第2南北街路が機能している時期における遺構面については街路形成層の最上面で1面、街路形成層群の中位で1面、計2面の遺構面を確認した。また、街路形成層をすべて除去した他山面でも遺構面を確認した。このように都合3面の遺構面を確認したことになるが、各遺構面に構築された遺構群を上位から、「上層遺構群」・「中層遺構群」・「下層遺構群」と呼称することにした（第422・423図）。それぞれの遺構面からは柱穴、溝、集石、土坑などの遺構が検出された。出土遺物や既往の発掘調査結果から、上層遺構群は16世紀末葉から17世紀初頭前後、中層遺構群は16世紀末葉前後、下層遺構群は16世紀前葉以前に比定される。

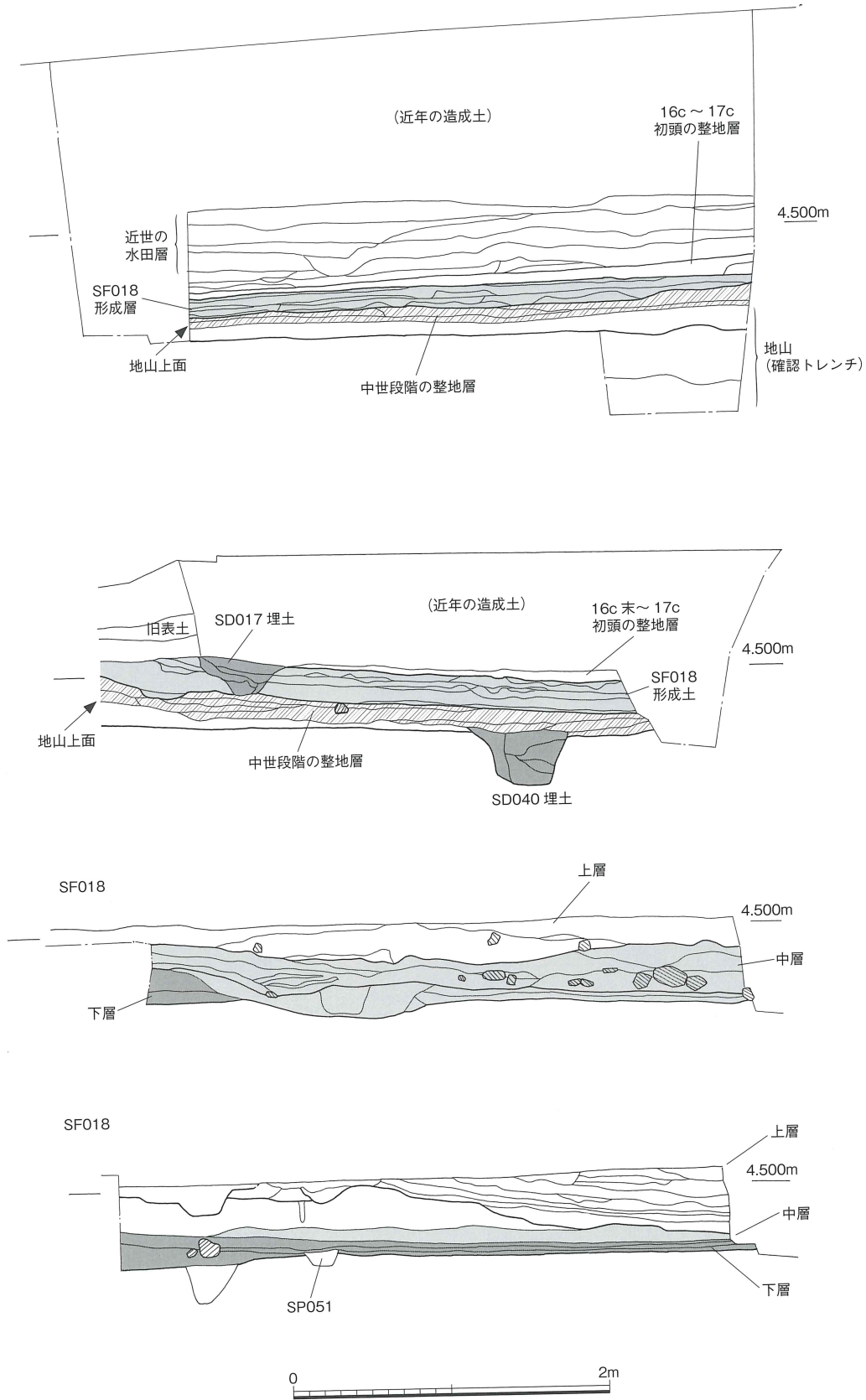
以下、代表的な遺構についての詳細を報告することにした。



第 423 図 第 79 次調査区遺構配置図② (1/100)



第424図 調査区土層実測図① (1/50)



第 425 図 調査区土層実測図② (1/40)

第15表 中世大友府内町跡第79次調査区遺構一覧表①

遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SD001	S001	溝	J-25	16世紀末葉～17世紀初頭以降	上層遺構群、近世の溝、時期を認定できる遺物は出土せず	368
SP002	S002	柱穴	J-25	16世紀末葉～17世紀初頭	上層遺構群、焼土含む	368
SP003	S003	柱穴	J-25	16世紀末葉～17世紀初頭	上層遺構群、焼土含む	
SP004	S004	柱穴	J-25	16世紀末葉～17世紀初頭	上層遺構群、焼土含む	368
SP005	S005	柱穴	J-25	16世紀末葉～17世紀初頭	上層遺構群、焼土含む	368
SP006	S006	柱穴	J-25	16世紀末葉～17世紀初頭	上層遺構群、焼土含む	
SP007	S007	柱穴	J-25	16世紀末葉～17世紀初頭	上層遺構群、焼土含む	
SP008	S008	柱穴	J-25	16世紀末葉～17世紀初頭	上層遺構群、焼土含む	368
SP009	S009	柱穴	J-25	16世紀末葉～17世紀初頭	上層遺構群、焼土含む	
SP010	S010	柱穴	J-25	16世紀末葉～17世紀初頭	上層遺構群、焼土含む	368
SP011	S011	柱穴	J-25	16世紀末葉～17世紀初頭	上層遺構群、焼土含む	368
SP012	S012	柱穴	J-25	16世紀末葉～17世紀初頭	上層遺構群、焼土含む	368
SP013	S013	柱穴	J-25	16世紀末葉～17世紀初頭	上層遺構群、焼土含む	
SP014	S014	柱穴	J-25	16世紀末葉～17世紀初頭	上層遺構群、焼土含む	368
SP015	S015	柱穴	J-25	16世紀末葉～17世紀初頭	上層遺構群、焼土含む	
SP016	S016	柱穴	J-25	16世紀末葉	上層遺構群	368
SD017	S017	側溝	J-24	16世紀末葉	上層遺構群、第2南北街路の側溝	368
SF018	S018	道路	J-24・25	16世紀末葉	上層遺構群・中層遺構群、第2南北街路	370
SP019	S019	柱穴	J-24	16世紀末葉	中層遺構群	
S020	—	—	—	—	欠番	
SP021	S021	柱穴	J-24	16世紀末葉	上層遺構群、S022に切られる	
SP022	S022	柱穴	J-24	16世紀末葉	上層遺構群、焼土含む	
SP023	S023	柱穴	J-24	16世紀末葉	中層遺構群	
SP024	S024	柱穴	J-24	16世紀末葉	中層遺構群	
SP025	S025	柱穴	J-24	16世紀末葉	中層遺構群	
SP026	S026	柱穴	J-24	16世紀末葉	中層遺構群	
SP027	S027	柱穴	J-24	16世紀末葉	中層遺構群、埋土が砂利	
SP028	S028	柱穴	J-24	16世紀末葉	中層遺構群	
SP029	S029	柱穴	J-24	16世紀末葉	中層遺構群	
SP030	S030	柱穴	J-24	16世紀末葉	中層遺構群	
SP031	S031	柱穴	J-24	16世紀末葉	中層遺構群	
SP032	S032	柱穴	J-24	16世紀末葉	中層遺構群	
SP033	S033	柱穴	J-24	16世紀末葉	中層遺構群	
SP034	S034	柱穴	J-24	16世紀末葉	中層遺構群	
SP035	S035	柱穴	J-24	16世紀末葉	中層遺構群	
SP036	S036	柱穴	J-24	16世紀末葉	中層遺構群	
SP037	S037	柱穴	J-24	16世紀末葉	中層遺構群	
SD038	S038	側溝	J-25	16世紀末葉	中層遺構群、御所小路の南側溝の可能性あり	
SP039	S039	ピット	J-25	16世紀末葉	中層遺構群	
SD040	S040	溝	J-25	16世紀前葉～中葉	下層遺構群	
SD041	S041	溝	J-24	16世紀末葉	下層遺構群	368
SD042	S042	溝状遺構	J-24・25	16世紀前葉～中葉	下層遺構群	368
SP043	S043	柱穴	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	
SP044	S044	柱穴	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	368
SP045	S045	柱穴	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	
SP046	S046	柱穴	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	
SP047	S047	柱穴	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	
SP048	S048	柱穴	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	
SP049	S049	柱穴	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	
SP050	S050	溝状遺構	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	368



第16表 中世大友府内町跡第79次調査区遺構一覧表②

遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SD051	S051	溝	J-25	16世紀前葉～中葉	下層遺構群	368
SP052	S052	柱穴	J-24	16世紀末葉	上層遺構群	
SP053	S053	柱穴	J-24	16世紀末葉	下層遺構群	
SP054	S054	柱穴	J-25	16世紀末葉～17世紀初頭	上層遺構群、焼土含む	
SP055	S055	柱穴	J-25	16世紀末葉～17世紀初頭	上層遺構群、焼土含む	
SP056	S056	柱穴	J-25	16世紀末葉～17世紀初頭	上層遺構群、焼土含む	
S057	-	-	-	-	欠番	368
SP058	S058	柱穴	J-25	16世紀末葉	上層遺構群	
SP059	S059	柱穴	J-25	16世紀末葉	上層遺構群	
S060	-	-	-	-	欠番	
SP061	S061	柱穴	J-24	16世紀末葉	上層遺構群	
SP062	S062	柱穴	J-24	16世紀末葉	上層遺構群	
S063	-	-	-	-	欠番	
SP064	S064	柱穴	J-24	16世紀末葉～17世紀初頭	上層遺構群、焼土含む	
S065	-	-	-	-	欠番	
S066	-	-	-	-	欠番	
SP067	S067	柱穴	J-24	16世紀末葉	上層遺構群	
SP068	S068	柱穴	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	
SP069	S069	柱穴	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	
S070	-	-	-	-	欠番	
S071	-	-	-	-	欠番	
SP072	S072	柱穴	J-25	16世紀末葉～17世紀初頭	上層遺構群、焼土含む	368
SP073	S073	柱穴	J-24	16世紀末葉	下層遺構群	
SD074	S074	溝状遺構	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	368
SP075	S075	柱穴	J-25	16世紀末葉	中層遺構群	
SP076	S076	柱穴	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	
SP077	S077	柱穴	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	
SP078	S078	柱穴	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	
S079	-	-	-	-	欠番	
S080	-	-	-	-	欠番	
S081	-	-	-	-	欠番	
S082	-	-	-	-	欠番	
SP083	S083	柱穴	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	
SP084	S084	柱穴	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	
SP085	S085	柱穴	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	
SP086	S086	柱穴	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	
SP087	S087	柱穴	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	
SP088	S088	柱穴	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	
SP089	S089	柱穴	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	
SP090	S090	柱穴	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	
SP091	S091	柱穴	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	
S092	-	-	-	-	欠番	
S093	-	-	-	-	欠番	
S094	-	-	-	-	欠番	
SP095	S095	柱穴	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	
SP096	S096	柱穴	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	
SP097	S097	柱穴	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	
SP098	S098	柱穴	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	
SP099	S099	柱穴	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	
SP100	S100	柱穴	J-25	16世紀末葉	下層遺構群	

(2) 溝

SD001 J25区に位置し、上層遺構群に属する溝である。その規模は長さ約4.2m、幅約0.4m、深さ約15cmを測る。周辺の遺構すべてを切っており、第79次調査区で検出された遺構の中で最も新しい時期のものである。出土遺物はないが、近世以降の所産と推定される。

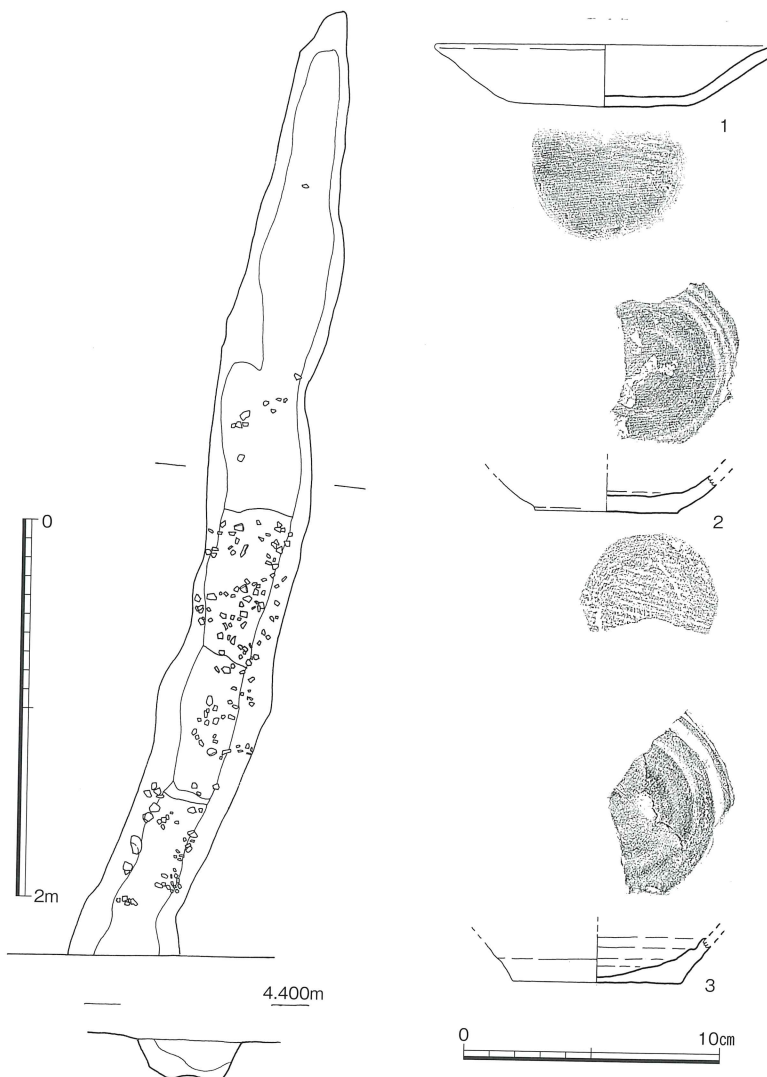
第2南北  
街路東側溝

SD017 J25区に位置し、上層遺構群に属する溝である。その規模は長さ約6.7m、幅約0.3～0.4m、深さ約15cmを測る。近世以降の溝SD001と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSD017(古)→SD001(新)である。遺構の位置から考えると、第2南北街路の東側溝である可能性が考えられる。しかしながら、溝の構造や規模は恒久的なものではなく、小規模である。出土遺物はないが、第2南北街路の形成土に掘り込まれていることから、16世紀末葉の遺構と推定される。

SD038 J25区に位置し、中層遺構群に属する溝である。その規模は長さ約1.3m、幅約0.45m、深さ約10cmを測る。遺構の平面形態から溝と判断したが、規模が小さい上に深さが浅く、本当に溝としての機能を有する遺構かどうかの判断が難しい。第2南北街路形成土を一定程度掘り下げた段階で検出されたもので、出土遺物は僅少であるが、16世紀末葉の時間幅の中で構築された遺構と推定される。

SD040(第426図) J25区に位置し、下層遺構群に属する溝である。調査区を南北方向に縦断するが、南側では緩やかに西方向にカーブするような形で検出された。その規模は長さ約5.2m、最大幅約0.6m、深さ約20cmを測る。第2南北街路を形成する整地層群によって、完全にパックされている。埋土は2層に分割され、下位の黒褐色砂質シルト層には京都系土師器やロクロ目土師器の小片を多量に含む。遺物の量は多量にのぼるが、復元や実測に耐える遺物は少ない。何らかの区画溝と推定されるが、詳しい性格は不明である。出土遺物の年代観から、16世紀前葉から中葉に比定される遺構である。

京都系  
土師器や  
ロクロ目  
土師器の  
小片



第426図 SD040実測図(1/40)

第427図 SD040出土遺物実測図(1/3)

SD040出土遺物（第427図）1は京都系土師器皿で、器壁の厚みが5mm前後であることから、塩地編年1期の製品である。2・3は在地系のロクロ目土師器で、内面にロクロ回転による段があり、底部には糸切り痕または糸切り痕と板状圧痕が認められる。

SD042・SD051 SD042・SD052はJ24～J25区に位置する一連の遺構で、下層遺構群に属する溝である。同じ下層遺構群に属する溝SD041およびSD050に切られている。その規模は長さ約4.2m、幅0.35m、深さ約20cmを測る。南側の延長部には塩地編年1期の京都系土師器小片等が多量に出土したSD040が位置している。遺構の位置から判断して、SD040とSD042・SD052は同一時期の同一遺構である可能性が考えられるが、SD042・SD052からは図示可能な遺物は出土しなかった。遺構の状況から、SD042・SD052は16世紀前葉から中葉の所産と考えておきたい。

SD041 J24区に位置し、下層遺構群に属する溝である。調査区を東西方向に斜めに横断するような形で検出され、その規模は長さ約4.4m、幅0.3m、深さ約20cmである。溝の断面形態は逆台形を呈する。埋土中から保存状態の悪い獣骨片が出土したが、取り上げを行うことができなかった。出土遺物は僅少で、図示可能なものは認められない。第52次調査区で検出された溝SD052と連続し、同一遺構と断定できる。第52次調査では14世紀代に比定したが、第79次調査では、時期を特定できる出土遺物は認められなかった。

第52次調査  
SD052と  
同一遺構

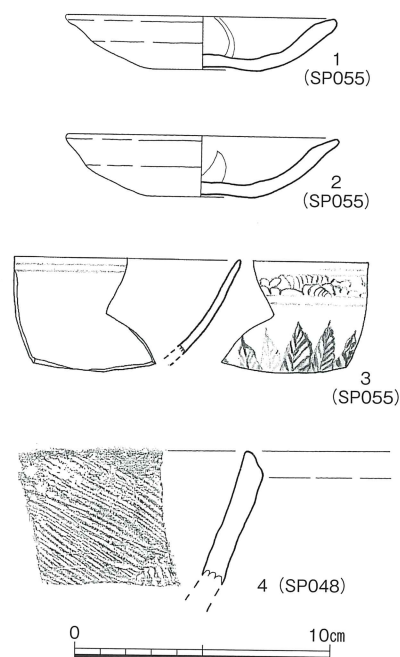
SD050・SD074 いずれもJ25区に位置し、下層遺構群に属する溝状遺構である。その規模はSD050が長さ約2.3m、幅0.3m、深さ約20cm、SD074が長さ約2.6m、幅0.4m、深さ約20cmである。出土遺物は僅少で、図示可能なものは認められないが、16世紀前葉から中葉に比定されるSD042・SD051に切られており、また第2南北街路を形成する整地層群によってパックされていることが確認できる。従って、遺構の構築時期は16世紀前葉以降から末葉以前の時間幅で比定できる。

### (3) 柱穴・柱穴列

第79次調査区では、上層遺構群・中層遺構群・下層遺構群で多数の柱穴が検出された。

このうち、上層遺構群では25区で柱穴列2列が確認された。北側の柱穴列は、SP002・SP004・SP005・SP016・SP058の5基で構成され、このうちSP002・SP004・SP005の3基については遺構埋土中に多量の焼土を含んでいた。これらの柱穴は東側に隣接する第67次B調査区でも延長部が確認されている。南側の柱穴列はSP010・SP009・SP014・SP007・SP011・SP012・SP072・SP012などで構成され、すべての柱穴の遺構埋土に多量の焼土を含む。切り合い関係にある柱穴が多く、これらの遺構は同時に存在していたわけではなく、数回の改修が行われていたものと推定される。ふたつの柱穴列を構成する個々の柱穴の規模は、径20～30cm、深さは30～50cmである。また、2つの柱穴列の間隔は約3.5mを測る。上記の柱穴からは良好な出土遺物はないが、埋土に多量の焼土を含む柱穴は、天正14年（1586年）島津侵攻後に構築された遺構である可能性が高く、これら2列の柱穴列も16世紀末葉から17世紀初頭に比定される可能性が高い。柱穴列は調査区の東側に位置する「御内町」の短冊形地割りに関連する町屋の区画遺構と推定され、第2南北街路を切って構築されていることから、島津侵攻後に街路上に町屋の区画遺構が張り出してきたことを物語るものであろう。

柱穴出土遺物（第428図） 1～3はJ25区で検出されたSP055から出土した遺物である。SP055は上層遺構群に属し、埋土に多量の焼土を含むことから、島津侵攻後の16世紀末葉から17世紀初頭に比定される柱穴である。1・2は京都系土師器皿で、塩地編年2期以降に比定される製品である。3は中国景德鎮窯系青花碗で、小野分類C群碗（蓮子碗）に分類される資料である。胴部外面に芭蕉文、口縁部内面に圈線を描く。16世紀前半までに生産された製品である。4はJ25区で検出されたSP048から出土した遺物である。SP048は下層遺構群に属する柱穴である。図示した遺物は瓦質土器播鉢で、外面にはナデ調整、内面には刷毛目状の工具での調整が認められるとともに、3条以上の播目が施されている。16世紀代の所産である。



第428図 柱穴出土遺物実測図（1/3）

（4）第2南北街路

SF018 本調査区での第2南北街路の遺構番号は、SF018である。本調査区では南壁・北壁・東壁において、第2南北街路を構築する硬化面や整地層（砂質土と粘質土の互層）が認められ、全面にわたり道路として使用されていたことが判明した。調査区が狭小であるため、道路幅や構造、構築時期や廃絶時期などを明確にする所見は得られなかったが、土層観察用ベルトの一部では、道路の改修に当たって、旧路面を匙面状に掘り込んでいる状況が確認できた部分がある（南ベルト土層・第425図参照）。本調査区ではSF018を土層断面の堆積を参照しながら、上層・中層・下層の3層に分けて掘り下げを行った。上層の掘り下げ時には、整地層の上面から埋土に焼土を含む柱穴で構成される柱穴列などが構築されている。出土遺物には肥前磁器などの混入品もあり、取り上げミスと思われる遺物もある。また、出土遺物の中に「慶長通寶」（初鑄造年1606年）の存在が認められ、第2南北街路の最終使用年代を示唆する遺物である可能性も考えられるが、肥前磁器の混入があったことから、それを断定するに至っていない。中層の掘り下げ時には、路面改修ため、拳大の礫や黒色土のブロックが形成されている部位が認められた。また、SF018を形成する整地層をすべて撤去した後も、溝などの遺構が検出された。これらの遺構は第2南北街路構築以前のもので、街路形成土によって完全にパッキングされていた。

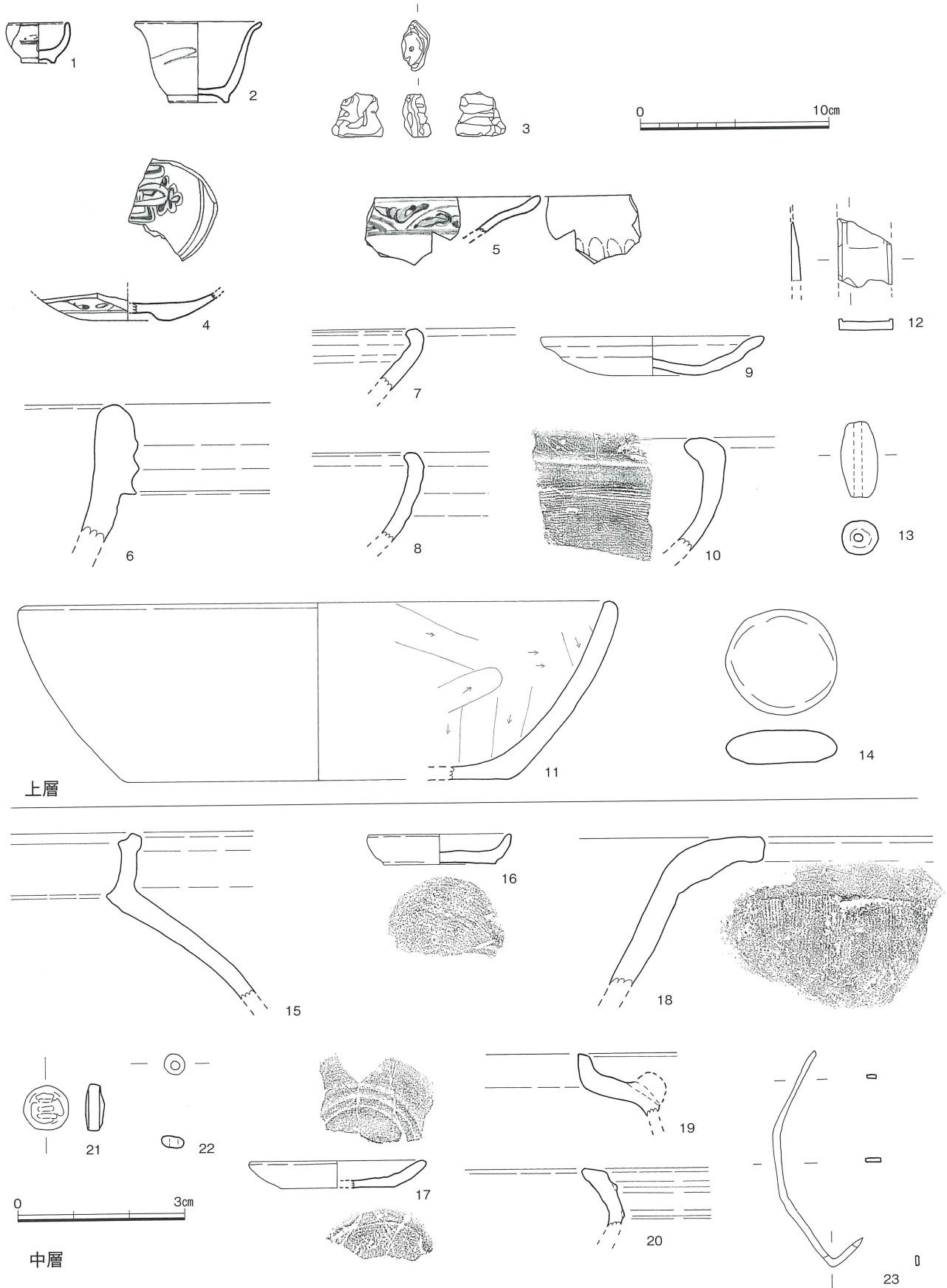
出土遺物については、上層・中層・下層の3層に分けて報告する。

SF018出土遺物（第429・430図） 第2南北街路SF018からの出土遺物は、上層・中層・下層の3段階に分けて取り上げを行っている。

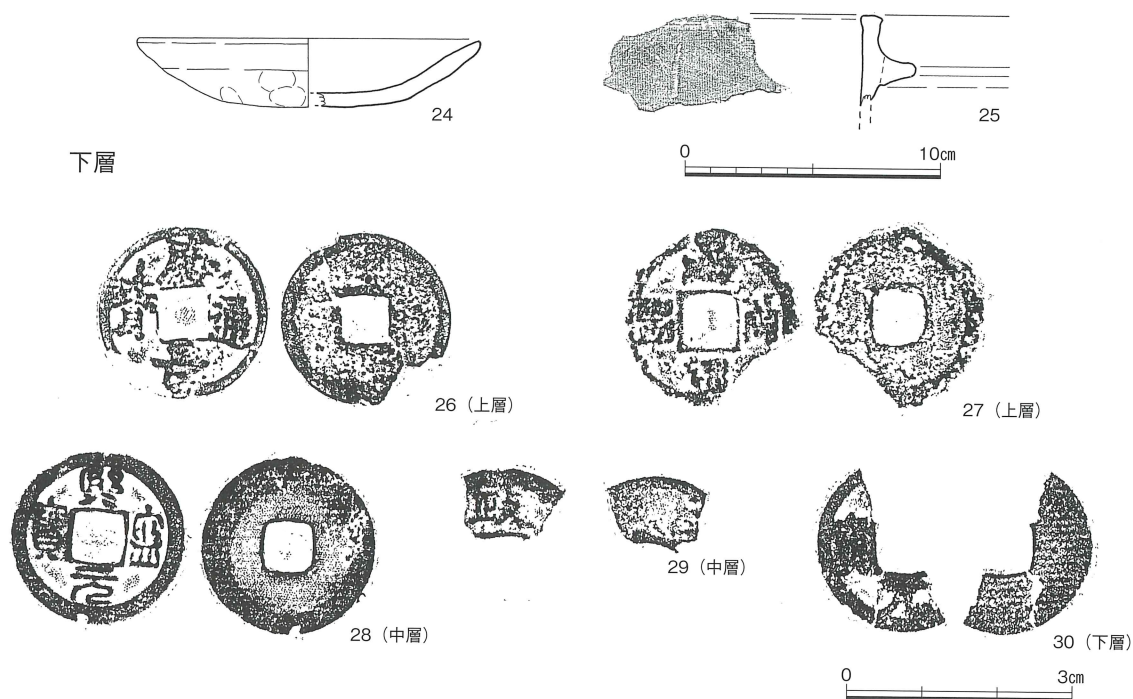
第429図1～14は上層からの出土遺物である。1・2は18世紀代の所産である肥前磁器染付であって、1は飯事道具である小型の碗、2は小杯である。いずれも18世紀代に比定される。3は小型の土人形で、破損や磨滅が著しく、形態は不明である。当該遺物については詳細な年代を確定できないが、やはり18世紀代以降の製品であろう。1～3については江戸時代中期以降の製品であるため、第2南北街路に直接関連する遺物ではなく、混入品あるいは取り上げミスの遺物であろう。4・5は中国景德鎮窯系青花で、4は小野分類C群皿、5はF群皿に分類される。6～8は備前系陶器で、6は大甕、

「慶長通寶」の出土

上層出土遺物



第 429 図 SF018 出土遺物実測図① (1/3・1/1)



第430図 SF018出土遺物実測図② (1/3・1/1)

7・8は鉢の口縁部である。9は京都系土師器皿で、塩路編年2期の製品である。10は瓦質土器鉢で、口縁部が内湾し、胴部内面に刷毛目状の調整、外面にナデを施す。11は瓦質土器鉢で、内面に削り、外面にナデ調整を施す。在地系の製品であろう。12は小型の硯で、輝緑凝灰岩を素材とする。13は土錘である。14は玉砂利で、全面にわたってミガキを施し、端部を磨き上げている。

中層出土  
遺物

15～23は上層からの出土遺物である。15中国産の褐釉陶器壺である。口縁部が内湾する形態を呈し、外面には褐釉を施し、内面は露胎となる。16・17は土師質土器小皿で、いずれも底部外面に糸切り痕を有する。16は15世紀後葉以前、17は15世紀末葉から16世紀初頭の所産である。18は瓦質土器鍋で、外面に刷毛目状の調整を施す。14世紀代の製品であろうか。19・20は在地系の瓦質土器で、16は羽釜、20は浅鉢形の火鉢である。21は分銅で、径0.8cm、重さ0.6gを測る。表面には大友氏の定紋である「三」を鋳出している。22はガラス玉、23は鉄線である。

分銅

下層出土  
遺物

第430図24・25は下層からの出土遺物である。24は京都系土師器皿で、塩地編年2期に比定される。25は瓦質土器の火鉢の口縁部で、在地系の製品と考えられる。

銅銭  
慶長通寶

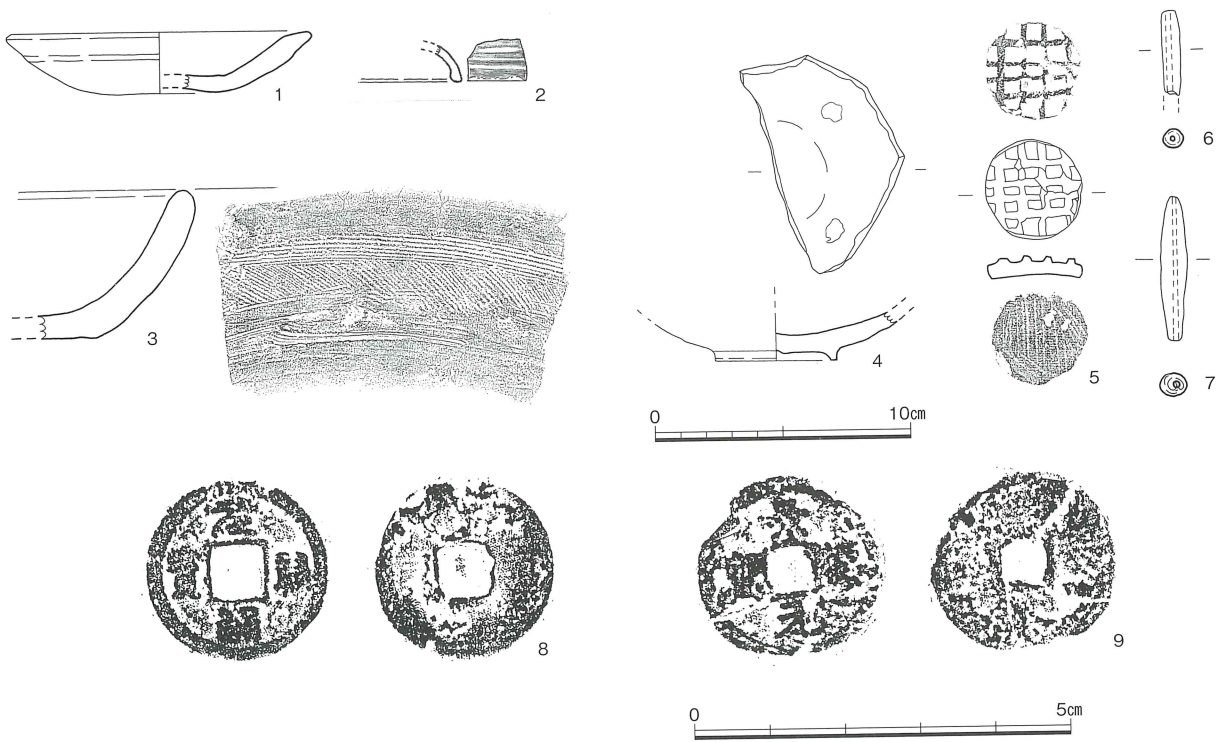
26～30は銅銭で、26・27は上層、28・29は中層、30は下層からの出土である。26は「慶長通寶」で、1606年に鋳造されたといわれる日本産の銅銭である。出土数が比較的少ない資料であり、中世大友府内町跡では第79次調査区の外に、第77次調査区（2009年度＝平成21年度報告予定）で1枚が出土しているに過ぎない。27は初鋳造年1086年の北宋銭「元祐通寶」、28は初鋳造1068年の北宋銭「熙寧元寶」、29は初鋳造年1068年の北宋銭「政和通寶」、30は「元寶」のみが残存する中国銭である。

(5) 遺構外（包含層・整地層）の出土遺物（第431図）

図示したものは、遺構に所属せず、包含層・整地層出土として取り上げた遺物である。「遺構外」として出土遺物であるが、前述のように本調査区は全域が第2南北街路の形成土で構成されていることから、出土遺物のほとんどは第2南北街路形成土中に包含されていた遺物である可能性が高い。

第431図1は京都系土師器で、器壁の厚みが7mm前後であることから、塩地編年3期に比定される。2は中国産の合子蓋で、外面に黄褐色の釉を施し、内面は露胎となる。同一個体であるとは断定できないが、この種の蓋とセットになる身の口縁部破片が第67次B調査区焼土層（第342図14）から出土している。3は瓦質土器鉢で、外面に刷毛目状の調整を施す。5は朝鮮王朝産の陶器碗で、見込みに目積みの跡が認められる。6は土器片再加工作品で、外面には格子目叩きが残存する。瓦質土器鍋の底部付近を再利用した資料である。7・8は土錘である。9・10は銅銭で、9は初鑄造年1086年の北宋銭「元祐通寶」、10は初鑄造年1004年の北宋銭「景德元寶」である。

中国産  
合子蓋



第431図 包含層・整地層出土遺物実測図（1/3・1/1）

### 3 小結

第79次調査区は、第52次調査（平成17年度＝2005年度調査）と第67次調査（平成18年度＝2006年度調査）との間に挟まれた縦長で狭小な調査区である。当該調査区は大友府内町跡のメインストリートである「第2南北街路」に相当し、その中でも大友氏館跡の正門に至る東西道路である「御所小路」との交差点付近に位置することが想定されていた。発掘調査では、当初の予測どおり、調査区が全面にわたって第2南北街路（以下「街路」と略称）の路面であったことが確認できた。

3面の  
遺構面

SD017

今回の調査では、街路が機能している時期に2面、街路が構築される以前に1面の合計3面の遺構面を確認した。街路が存続している時期である上層・中層遺構群は、16世紀末葉から17世紀初頭に比定される。これらの遺構のうち、溝SD017は改修が施された時期の道路側溝と推定される。ただし溝の長さは5.6m、幅は0.3mと小規模で、街路全般にわたって計画的に構築された道路側溝とは考えられない。

柱穴列

上層遺構群ではJ25区で柱穴列2列が確認され、ふたつの柱穴列の間隔は約3.5mを測る。これらは調査区の東側に位置する「御内町」の町屋に関連するものと思われ、街路上に町屋の遺構が張り出してきたことを物語るものであろう。柱穴列が街路上に張り出す時期は、出土遺物が僅少であるため明確ではないが、おそらくは天正14年（1586）年の島津侵攻以降の時期、すなわち1590年代から17世紀初頭頃と推定される。同様な状況は、本書で報告する第51次調査でも確認されている。

「木戸」遺構

SD040

中層遺構群では特筆すべき遺構はないが、J25区で検出された柱穴SP031は、第52次調査で「南側大型柱穴列」とした東端の柱穴と同一遺構である。第52次調査で検出された大型柱穴列が「木戸（釘貫）」と推定される遺構であることは既に記したが、この木戸遺構が第79次調査区までは及んでいないことが確認されたことになる。

下層遺構群では、溝SD040が注目される。この遺構埋土からは、京都系土師器やロクロ目土師器皿が細かく破碎された状態で出土した。遺物の出土状態は特異なものであり、この遺構の周辺で「かわらけ」を使用した何らかの儀礼が執り行われたことを物語る。

SD041

また、溝SD041は第52次調査の溝SD052と同一遺構である。出土遺物が僅少であるため、詳細な時期を確定することができなかった。第52次調査区では周辺の遺構の状況から14世紀代の溝と推定したが、この推定が妥当なものであるならば、第79次調査において当該遺構が唯一14世紀代に遡る遺構となる。

以上のように、第79次調査は狭小な調査区ではあったが、第2南北街路の状況や街路上に張り出してきた町屋遺構の状況が判明し、さらには街路構築以前の遺構が検出されるなど、中世大友府内町跡の検討を行う上で一定の成果を得たことを指摘しておきたい。